
ソナーパレカル Soner PARECARU

天海慎也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソナーパレカル Soner PARECARU

【Nコード】

N3206F

【作者名】

天海慎也

【あらすじ】

謎の暗殺集団ソナーパレカル…。武はあることからその組織に助けられる。なぜ組織は自分を助けたのか？組織の敵パルパックとは一体なんなのか？若者の体にはらまかれたHKWウイルス。青い携帯と赤い携帯と黒い蝶が教えるその先にある真実とは？ただ、きつねのぬいぐるみだけが彼らの行く末を笑うように見ていた。

1章第1話『武』（前書き）

あれは高2の夏、全てはその夏に始まった。

あれは 真夏。

うだるような暑さの日だった。

今まで暑さが嘘の様に感じるほど蒸し暑い夏の日…。

13歳の加進^{かしん} 武^{いさむ}はふらふらした足取りで病院へと向かっていた。

昨日から40 を超える熱に頭痛、吐き気、下痢、咳、眩暈がしていた。まるで体の中の臓器がすべて体内でぐるぐる移動しているような感覚があった。

武はこれまで大きな病気どころか風邪をひいたことが一回もなかった。

1 章第1話『武』

ソナーパレカル Soner PARECARU

『武』

あれは高2の夏、全てはその夏に始まった。

あれは 真夏。

うだるような暑さの日だった。

今まで暑さが嘘の様に感じるほど蒸し暑い夏の日…。

13歳の加進^{かしん} 武は^{いさむ}ふらふらした足取りで病院へと向かっていた。

昨日から40 を超える熱に頭痛、吐き気、下痢、咳、眩暈がしていた。まるで体の中の臓器がすべて体内でぐるぐる移動しているような感覚があった。

武はこれまで大きな病気どころか風邪をひいたことが一回もなかった。

中学でクラスの半分がインフルエンザで学級閉鎖になった時も武はインフルエンザって何？というほどピンピンしていたものだ。

だから、風邪の症状も何一つ経験したことがなかったが、さすがにこの症状が尋常でないことを武は分かっていた。

昨日は1日中安静にして寝ていたが症状は大して良くなりず不運なことに悪化してしまった。

熱は40度近くにはねあがり咳のせいでか呼吸するのが辛い。

武はやつとの思いで近くの大学病院へと辿り着いた。

診察券を出して待合室で座っていると偶然通りかかった白い服を纏った男が武に声をかけてきた。

「具合が悪そうだね」と男はそう武に言った。武は彼の顔を見てうなづいた。

声をかけてきた男は真つ赤な赤い髪に赤い瞳の武と年齢がそこまで変わらないであろう若い青年だった。白い白衣を着ており、首には聴診器を付けていた。

男は座っている武と目線を同じにするようにしゃがみ込むと武の額に手を当てた。

その手はとても優しくてまるで氷の様につめたかった。

そして、少し考えると額から手を放し武を見た。「熱がかなりあるみたいだね」

武は沸騰しきった頭でこくんとうなづいた。

「もしかして、息苦しくて頭痛とめまいと吐き気が同じにきているかな？」と彼は聞いた。なぜそんなこと分かるんだろうと思いがら武はうなづこうとした。

そのとき「あー先生！ここにいたんですか！？」と一人の看護婦が慌ただしく走ってきた。

そして、武の前の青年を捕まえて言った。

「先生！ポケベルで何回も呼んだんですよ？急患が入って人手が足りないんです」

「あ？気付かなかった」と彼はズボンの後ろポケットからポケベルを取り出し画面を睨む。

「先生、ポケベル見ている場合もありません」と看護婦は彼を急かす。

「はいはい」と彼は面倒そうにそう言うと言った。武を見た。「坊主、診察終わったらここにいろ」と彼は武にそういった。

しかしその言葉は「先生、早く」という看護婦の声と重なり、武の耳には届かなかった。いや、届いていたかもしれないがこのとき武の耳は中耳炎のように水が溜まり音を聞き取ることは困難だった。

この声が聞こえていれば武の運命もすこしは変わっていただろう。しかし、運命の糸はここで複雑に絡まり始めた。

「かしん いさむさん！」と呼ばれ武は診察室に入った。

その様子を待合室で見ながら薄気味悪い笑みを浮かべていた男がいたことを武は気付きもしなかった。

「加進 武さんー！」という声がして、おれはふらつく足で診療室に入った。

診療室にいた医者はかなり若い男だったことを覚えている。

その医者の下した診断はただの風邪だった。

しかし、念のため精密検査をしておきましようと言われて俺は採血された。

「なぜ？採血するのだろう？」と武は朦朧とする意識の中でそんなことを思ったことを覚えている。

採血の後、武は点滴を3本され、30分後にやっと開放された。

点滴の後は頭痛も無くなっており、体のだるさや吐き気、眩暈も治まっていた。

こんなに簡単に治るものなのかな？と不思議に思いながら、武は帰り道を歩いていった。

家の近くの大きな通りに来た時、突然、後ろから人の気配を感じた。武はおそろおそろうしろを向いた。

しかし、誰もいない。

その道は普通の日でも人通りの少ない通りであった。

学校だけが永遠と6校近く連なる道で周りに民家は一つもない。生徒たちの登下校の際にしか使われない道であろう。

ましてや、平日の昼過ぎ、生徒たちはお昼中か誰一人校庭に出ている者はいなく通りは静まり帰っていた。ガサツという音が後ろから聞こえた気がして怖くなった武は走るようにして道を急いだ。すると、後ろから武を追いかける大勢の足音が聞こえてきた。

武は恐怖で後ろを見ることが出来ずに全速力で走った。

やがて、腕を掴まれて後ろから押さえつけられ口にタオルを押し付けられた。驚いて暴れている内に意識が暗闇の中に落ちて行った。

夢を見た……。ひどく目覚めの悪い夢だった。

ピチョンという水の落ちる音がいつまでも続く部屋に武寝ていた。目の前には灰色の薄汚れたコンクリートが広がっていた。

ここはどこだろう？　と思いながら辺りを見回そうとしたが、首から下が動かなかった。

「目が覚めたみたいだね？　武君？」と夢の中で頭上から声が降ってきた。

聞いたことのある声だったが、頭がぼーっとしていてなにも考えられない。

まるで脳全体に薄い靄がかかっているみたい。

「そのままで聞け！」と声はそう武に命令を下した。

どこから声がしているのだろうか？　と思いながら武は朦朧とする意識のなかでその言葉に頷いた。

「君の鎖骨に組織の証である刺青を彫った。この刺青がある限り君は組織から抜け出すことはできないよ」と声は武の頭の中で鳴り響く。

毒？　刺青？　なんだっけそれ？

「組織はこの刺青がある限り君を地の果てまで追いかける。」

武はもやもやとした夢のような意識のなかでその言葉を聞いていた。

「さあ、つかれただろう？　ゆっくりおやすみ……いさむ」と誰かが武の額を優しくそっとなでる。

その手は暖かくて、優しくて、どこかとてもなつかしかった。

武はその手に導かれるようにゆっくり瞼を閉じた。

また暗い闇の世界へ武は落ちて行つた。

目が覚めると武は自分の部屋のベッドの上だつた。武は慌てて自分の鎖骨を触つた。

しかし、刺青の感触はない。彼は手鏡を取り自分の鎖骨を映した。しかし、そこにも刺青の痕跡はなかつた。

朝日が部屋の窓から武の手鏡を濡らした。

今のは夢か…と武は安心したように呟くと起き上つた。ベッドの横にある窓からいつもの青い綺麗な空が見えた。とても現実とは思えない青く綺麗な空だつた。

第2話『ソナーパレカル』

『ソナーパレカル』

貴方たちはソナーパレカルという組織をしっていますか？

一般人に紛れターゲットを瞬時に抹殺する組織…それが闇の暗殺組織、ソナーパレカル。

活動拠点は全国に及ぶが主としての活動拠点は経済の中心東京。

渋谷、新宿、池袋そして都庁で起きる連続殺人はほとんど彼らの手によるもの。

彼らの犯行は大胆なものであるが犯行の瞬間を一度も捕えられたことは一度もない。

日本政府はこの組織を非常に恐れている。

なぜなら、ソナーパレカル達の犯行は証拠を一切残さない完璧犯罪であるから、そして、彼らがまだ若い青年達である確率が非常に高く、犯行現場には政府の人間をあざ笑うかのように赤い糸でパレカルの紋章が刺繍されたぬいぐるみが必ず残されているから。

そして、ソナーパレカルは日本政府の秘密を知っている組織でもあるから…。

濃い赤い光の中一人の少女がきつねのぬいぐるみをぶんぶん振りまわして誰一人いない静かな裏道を歩いている。

彼女は鼻歌交じりで道に倒れていた血だまりの中の血だらけの男を見下ろすと彼の上に手に持っていた可愛いきつねのぬいぐるみを置いた。

「おまえ…パレカルの者だな？」と男が切れ切れにそう呟く。

彼女は血だらけの男を見下ろして薄い笑みを浮かべた。

「おじさん。私のこと覚えてるよね？ 忘れたとは言わせないよ？」

「た…助けてくれ！！」と男は彼女をすぐるように見つめた。

「助けて？ おじさん達が私達にしたことはこれよりもっとひどいよね？ 今更、助けてだって？ お前らは助けてと泣いて縋ってきた子供達をその汚い手で自分たちの利益のために突き放したじゃないか！！」と彼女は怒鳴った。

彼女の瞳と髪が赤い血の色に変わった。

ひいつつと男の顔は恐怖にひきつり汚い悲鳴が上がった。

一瞬男の前を赤い光が過ぎ去った。次の瞬間、男の呼吸は止まり見開かれた濁った瞳が暗いコンクリートの闇を見つめていた。

少女は頬についた男の返り血を手の甲で拭い去ると赤い携帯を手に立ち上がり、男を見降ろして薄く笑うと学生かばんをぶんぶん振りまわしながら闇の中へ消えていった。

男の上に取り残された血にまみれ赤く染まったきつねのぬいぐるみの右頬にはパレカルの紋章と呼ばれる不思議な形の刺繍が無造作に施されていた。

そう、それは死へと誘う紋章…。

第3話『メール』

『メール』

今日も空がきれい…と保坂^{ほさか} 早奈^{さな}はそんなことを思いながら横断歩道を渡った。

早奈は今年大学2年生になった。前々から望んでいた医学系の学校に受かり大学生活を楽しんでいた。

大学は家から電車を乗り継いで一時間、近いような遠いような距離である。耳にイヤホンをつけ流れてくる音で朝の眠気を飛ばしながら大学構内に入った。

講義がある部屋に入ろう戸ドアノブに手を伸ばした瞬間中から声が聞こえてきた。

「ねえ、知ってる？ 渋谷殺人事件。あれソナーパレカルがやったらしいよ」

早奈はドアノブから手を放し耳を澄ませる。

「渋谷殺人って昨日男性が渋谷でメッタ刺しにされ殺されたって言う？」

「そうそう。なんでもパレカル紋章の刺繍されたぬいぐるみが死体の上に置いてあったんだって」

「おはよう！」と早奈は笑顔を作って講義室のドアノブを捻り中へはいる。

「おはよう！！」と教卓から一番近い席に陣取っているグループの子達が声を揃えてそう言った。

「昨日のアニメ観た？」と早奈は渋谷事件から話題を変えると授業開始ベルが鳴るのを待ちながら友達とくだらない話しをした。

2限あつた授業を全て受け終わると早奈はかばんに教科書を詰めていた。

ふと、携帯を見るとメールが一通はいつている。

早奈は誰にも見えないように携帯をかくしながらそのメールを開いた。

そして、露骨に嫌そうな顔を見ると携帯を閉めた。

そんな早奈に友達が声をかける。

「早奈ちゃん。ロッカーに教科書置きにいくけど？」

「あつー！まって私も行く」と早奈はいつもと変わらないにこやかにそう返すと携帯をズボンの後ろポケットに入れ上着を着ると友達と一緒に廊下に出た。

「今日の授業分かりにくかったね」と話ながら廊下を歩く。

「ってか、すごい眠かった」

「うんうん。眠かったよね」

「って、ゆみちゃん授業中寝ていたじゃん！！」

「あれでも寝ないようにがんばっていたんだよ？」

「うそー。だって授業始まって3分ぐらいで寝ていたじゃん」

「ねえ？早奈ちゃんも見ていたでしょ？」

「うん。ゆみちゃん寝ていたね」と友達に返事を返しながら早奈は雲行きの危うい空を見上げてため息をついた。

第4話『関根』

『関根』

青い空に白い雲が乗っている良い天気：なのに俺はなんでこんなところにいるのだろう？と彼は思いながら渋谷を歩いていていた。

暖かい春の風が彼の短い黒髪をもて遊んで行った。

彼は関根 隆太郎。

今年25才になる。

25才のわりに幼い顔つきの関根の外見はスーツを着た高校生に見える。

しかし、これでもれっきとした警官である。今日の取り調べを終えた関根は部署へ戻ろうと地下鉄に乗った。午後5時だけあって地下鉄は満員であった。

座席は全て疲れきった人で埋まっている…。

仕方なく彼はドアの前に立つことにした。関根の前には上等なスーツを着た中年の男。右側には大きな重たそうなかばんを持った女性。左側には高校生らしい制服を着た男の子が肩に何も入って無さそうなかばんを担ぎ吊革を掴んでいた。

電車が動きだした。

電車が曲がるたびに人が左右に揺られた。「次は渋谷！渋谷」というアナウンスが響いたのと同時に関根は銀色の物が目の前を通過するのを見た。

それは一瞬だったがまるで銀色の燕が空を横切るようなそんな…そして次の瞬間、関根の目の前の男が首から血しぶきをあげドアにもたれかかった。

関根には何が起こったのかわからなかった。

自分の目の前が血に染まっている…。突然のことに関根が動揺を隠せずにいると後ろから「うわあああ」と男の声が響いた。

振り向いた関根の目に飛びこんで来たのは反対側のドア付近で高く

舞い上がる血しぶきだった。

第5話『早奈』

『早奈』

放課後、友達と別れた早奈は大泉公園の大きな池の前のベンチに座っていた。

空はますます雲行きがあやしくなっていて来ていたためか、公園内に人は誰一人いなかった。

路上で生活するホームレスを除けばの話だが、早奈はそこでメールをしながら人を待っていた。赤い髪と黒い髪の青年を…。彼らはもうすぐくるだろう。一人は面倒そうな顔でもう一人は楽しそうな顔で歩いてくるだろう。

やがて、空が灰色になった頃、二人の青年は早奈の前に現れた。

早奈はちょうどその時、具合が悪くなりベンチで横になり目をつぶっていたので、二人が近くに来たことは気づかなかったわけだが

「おい！早奈。大丈夫か？」という声で早奈は目を開けた。

赤い髪の青年が早奈の顔を覗きこんできた。

「遅かったね、名刀^{めいとう}：あれ？弥譜音^{みふね}は？」と早奈がそう呟くと、頭上から違う声が降ってきた。

「ここにいるよ」とそう言っていると黒髪の弥譜音は自分の上着を早奈の体にかける。

「待たせてしまったようだな？」と名刀は呟き早奈の頭を無造作に撫でた。

「うん？そんなに待ってない」と早奈は体を起こそうとした。しかし、弥譜音がそれを止めた。

「その顔だと具合悪いのでしょうか？もう少し寝てなさい」

「あいつは？」大丈夫か？と早奈はベンチに横になりながらそう尋ねた。

「ああ…あいつなら、今は無事だ」と名刀は面倒な気持ちを顔いっぱいに広げながらそう言った。

「それより、具合のほうは大丈夫か？」と名刀はその赤い瞳で早奈を見る。

「うん。ただの薬の副作用だよ」と早奈はポツリと言った。

「そうか…」と名刀は辛そうな顔で呟くと早奈の右腕を取り、脈を取り始めた。

真剣な顔で時計とにらめっこしている名刀のその顔はいつもの愛想の悪い顔よりすっかり医者の顔に変わっていた。そんな名刀に弥譜音が尋ねた。

「どうです？」

「脈は正常だな」と名刀はそう溢すといつも冷たい手で早奈の額を触った。

「熱も無さそうだな」

名刀はこの若さでこの国の最高峰の国大の医学部を卒業し、医療先進国の大学。要するに近代医学の最高峰の大学を卒業してきた青年だった。愛想が悪いのを抜かせば弥譜音同様才色兼備である。なぜそんな青年が医療現場を離れてこんなところにいるのか早奈には分からなかったがこの二人は突然早奈の前へ現れたのだ。

なぜ、二人が早奈の前に現れたのか早奈はだいたい理解していた。それは彼らと早奈には共通点があるから…。運命が3人を呼び集めたといってもおかしくは無かった。

早奈は体を起こすと言った。

「ありがとう。名刀、弥譜音」

「もう平気なのか？」と弥譜音が心配そうに聞いた。

「もう大丈夫だ」と早奈は上着を弥譜音に返すと立ち上がった。

「本当に平気か？」と名刀が困った顔で早奈を見つめた。

「いつまでも寝てるわけにはいかないだろ？それにもう治った」と早奈。

「まあ、おまえの体だ。おまえがそう言うのなら俺はなにもかえせないがな」と名刀は頭を掻くとすっかり暗くなった空を見つめた。
「嫌な天気ですね」と弥譜音も暗い空を見上げる。

「ああ…」と早奈と名刀は綺麗なハモリを披露しながら闇のように暗く重苦しい空を見つめた。

チャリンと鈴の鳴る音がして大泉公園の目の前に店を構えている小さなカフェのマスターは入ってきた男女3人に「いらっしやいませ」と優しく声をかけた。

「おう！！」と名刀がマスターに親しそくに挨拶する。

「ひさしぶりだね？名刀。」と店のマスターである流暉ないきはコップを拭きながらそう返した。

「マスター。例のものは出来ている？」と早奈は流暉にそう尋ねた。
「ああ。ばっちり！」と流暉はそう答えると尋ねた。「いつも通り。早奈はミルクティーに名刀はココア、弥譜音はコーヒーでいいか？」
「うん。紅茶はアールグレイでお願い」と早奈はカウンター席に座る。

「はいはい。ミルクは牛乳で温めたやつだろ？」と流暉は苦笑いをしながら言った。

「な？流暉。よくあいつの居場所を特定したな？」と名刀はカウンター席に頬杖をついて言った。

「早奈の大学の同級生だからね、早奈の学校の名簿を調べればそんなの簡単だったよ」と流暉は弥譜音の前にコーヒーを置く。

「えっ？そうなのか？」と早奈はビックリしたように声を上げた。

「知らなかったの？あの子は…お前と一緒に学部、学科、学年、クラスだよ？お前2組だろ？」と流暉は早奈の前にミルクティーを置いた。

「うん。2組だけだよ…知らないよ。私、人の顔覚えること苦手だもん」と早奈はカウンターに置かれたミルクティーをすすりながら言った。

「名刀も人の顔覚えること苦手だよね？」と弥譜音が楽しそうに名刀に言った。

「はあ？俺は覚えるのが苦手なんじゃなくて覚える気がねえだけだよ。人の顔なんていちいち覚えてられるか？ましてや同じクラスの奴なんてウザくてしょうがねえ」と名刀は嫌そうな顔でそう言うのと流暉が出してくれた糖分多めのココアをちびちび飲んだ。

そんな様子を見て弥譜音は面白そうに笑うと真剣な顔で流暉を見た。「ビー・ステインはどんな感じに仕上がりました？」

流暉は短く太い銀色の棒の様な先端が針のように尖がったものとベルトを何種類か弥譜音の前に置いた。

「長さは15センチぐらいかね？針は折りたたんでベルトのなかに隠せるようになってるから使う時に出して刺すと言ったところかね？この金色のものだけ毒が仕込まれているから扱う時は要注意」と流暉はいたずらそうに笑うと「ああ！あとね…」とカウンターの下からちいさな銀色の箱と黒い箱、金色の箱を取り出す。「この銀色のほうは毒針と血清が入っている。それとこの黒いほう預かっていたお前の商売道具。全部綺麗に研いでおいた。そこでこの最後の箱だけど…まあ、これは俺からのプレゼントだ。ピンチになったら開いてみるといい。たぶん役にたつはずだぜ」と流暉は自慢そうに言った。

「ありがとう」と弥譜音は全ての武器を装着した。

「な？俺の刀は？」と名刀が聞いた。

「ちゃんと手入れしておいたよ」と流暉は名刀の前に二本の刀を出す。

一本は普通の長い刀でもう一本はその半分くらいの長さだった。

「おい。これ…」と名刀は何か言おうとしたそれを流暉が言葉で打ち消した。「名刀の刀はどうやって折たたみにはできなかったのな。このままなんだが…この短い方は寝首刀。この前たまたま入ったいい品だぜ？妖刀疾風と呼ばれている結構レアなものだ。」と流暉。

「ああ。そっか…ありがとう恩にきる」と名刀は刀を受け取った。流暉はその様子を見て面白そうに笑うと早奈の前に短刀を2ペア取

り出した。

「早奈にはこれ」と流暉は短刀を見せて言った。

ひとつは早奈が昔、自分の身を守るために使っていたターガー・ベルガーと呼ばれる。真白い柄に黒い犬の描かれた特別頑丈なナイフである。刃渡りは10センチとかなり短く刃は鋭いが片側だけしか切ることはできない、それに動物などを切り裂く道具だと悟られなために元々ナイフの刃が黒くなっている。これはナイフを作った時の成分にも関係しているらしいが見た目はまったくのペーパーナイフである。

もう一つはベルガーより少し大きく綺麗な青い柄にイルカの模様の入ったなんとも可愛らしいナイフであった。ナイフの刃全体は白くそこに可愛いハートが二つ飛んでいた。

「これはエンジェル・ラッパーという物だ。刃渡り15センチで白硬石とかいう白くて硬い特別な石で造られている。右には二個のハート、左にはエンジェルが描かれていて可愛いらしいからおもちゃのナイフに見えるが切れ味なら保障するぜ？」と流暉は笑って見せた。

「流暉がそう言うのなら間違いないのだろうけど……かなり目立つなこれ」と早奈はナイフを見ながらそう言った。

「おまえのナイフ裁きなら目立たないだろう？」流暉は笑いながら言った。

「まあ、大丈夫だと思う」と早奈はそう溢すとナイフをジーンパンにしまい込むと「ありがとう。じゃあこれで失礼する」と早奈は席を立とうとした。

「ああ！待て。これも渡しておく」と流暉はカウンターの下からゴソゴソと青い箱を取り出すと早奈に投げつけた。早奈はそれを左手で受け取ると流暉を見た。

「お前、長距離になると弱いだろ？そういうときにはその箱のなかの物を投げてやれ！！お前はコントロールがいいからすぐに相手に致命傷を負わせることが出来るはずだぜ」と流暉はそう言って楽し

そうに笑った。

早奈はポケットにそれをしまいこむと「ありがとう」と言ってカフエを出て言った。

3人が出て行く姿を目に焼き付けながら流暉は3人の無事を祈った。また3人がここに来た時、そのときのみ3人が生きていることを知ることができるのだった。

第6話『黒服の男たち』

深夜2時、ガサツという物音に気付いて武は目を覚ました。月の光が部屋の中を照らしていた。

暗闇の中でなにか得体のしれないものが動いている…。武は怖いと思いつながらおそろおそろ電気をつけた。

電気の光で黒い服が光の中へ照らされた。

気がつけば武は黒い服を着た武装した忍者のような者達に囲まれていた。

彼らはそれぞれ手に刃渡り15センチ以上のナイフを持っていた。

「なんなんだ！！お前たち！」と武は叫んだ。

彼らは何も答えることなく武にナイフで襲いかかってきた。

彼らは中心にいた武にナイフを突き刺す。間一髪で武はしゃがみ込んだ。頭上でナイフが重なりあう音がした。

その瞬間武の体は右に飛んだ。黒い服の誰かがしゃがみ込んだ武の体を左から蹴ったのだ。

武は押入れまで吹っ飛ばされた。ミシツという音が鳴ったどうやら、左腕が折れたようだ。頭、顔からは血が溢れている。左横の歯が二三本血にまみれて床に転がっている。

口の中に血の味が広がった。

こ、殺される…と武は実感し部屋を裸足で飛び出した。

暗闇のなかただひたすら武は走った。やがて、大泉公園まで来て武は足を止めた。なんとか逃げ切ったようだった。

武は足を止め息を整えようとした。その瞬間、右からナイフが飛ばされてきた。

よけることが間に合わず右足にナイフが刺さった。ガクツと右足がさがり地面に体を打つ。

右足の痛みに右足を抱えたままうずくまった。

ヒュツと音がして背中にドスツと言う振動と酷い痛みを感じた。

武は目に涙を浮かべたまま地面にうずくまることしかできなくなっていた。

悲鳴をあげることと体を揺らすのも痛い…。

足音がした。地面の上にあの黒服の者が立っているのが分かった。逃げ出そうとした痛みを我慢して立ちあがろうと…しかし、それは叶わなかった。

立ちあがろうとする武の体は左方向へ飛ばされ木にぶつかった。

ゴブツと武はそこに血を吐いた。さすがにやばい…にげなきゃ！！と武はまたしても立ちあがろうとした。

それを誰かが静止した。

「武！！動くな！！」新夜の公園にその声は大きく響いた。

突然、黒い髪の男が武の前に現れた。

武は驚いて逃げ出そうとした。殺される！！と思ったからだ。

「武。落ち着いて、動かないで」と男は武に優しく声をかけた。

「いやだ！！やめろ！！」と武は悲鳴をあげて逃げようともがき彼の手をはじいた。

「武！！動くな！！」とまた大きななり声がして武はビクツと動きを止めた。

「大丈夫。僕らは君を助けに来たのだよ」と黒髪の男はそう静かに言った。

「おい！！弥譜音。武はどうだ？」とどこからかの怒鳴り声と同じ声がした。

「無駄口たたいてないでパルパック倒してください」と黒髪の男は暗闇のなかに声をかける。

やがて「もう終わった」と暗闇の中から声がして、闇の中から見たことのある女の子と赤い髪の青年が現れた。

赤い髪の青年は武の顔を覗きこんだ。

「こりゃ、ひでえ顔だな。前歯何本か折れているぜ？」

「でも、致命傷になる傷はありませんね」

そんな声を聞きながら武の意識は闇の中に消えて行った。

第7話『組織』

目が覚めると大泉公園のベンチの上だった。気がつくやうに傷には綺麗に包帯が巻かれていた。折れた右腕は首から吊されているし、頭には包帯が巻かれ、腫れた頬にはガーゼが当ててある。傷の痛みはなぜか無くなっていた。さっきの3人組みが応急処置をしてくれたみたいだ。

目の前には暗い夜空が続いていた。

武は立ち上がろうとベンチに手をついた。そして、なにか固いものに触れた。なんだろう？とそれを拾い上げた。

それは青い携帯電話だった。携帯の表面にはSon er P a r e c a r uという文字が銀色で彫られていた。

その携帯はまるで武がその袋を手取る時を知っていたかのように鳴りだした。

武は携帯を開けた。

携帯画面に見知らぬ番号が並んでいた。武は通話を押しその電話に出た。

「はい……」

「加進 武君だね？」と電話の向こうの男がそう聞いた。

「はい……」なぜ自分の名前を知っているのだろうと思いつつ武は返事を返した。

「お久しぶりだね？僕のことを覚えている？」と男は尋ねた。

武はその声に聞き覚えがなかった。

「すみません。どなたですか？」

「いや、覚えてないならいいんだ」と男はそう言つと声を低くして言った。

「君はおそらく黒い服を着た集団に襲われただろう？そいつらは君を狙っている。殺す気でね……。生きたければ僕の言う通りにしてくれ。」

「どうすればいいんだ」と武は縋るように彼に聞いた。

「君の目の前に街頭があるはずだ」と彼はそう言った。たしかに武の目の前には街頭が取り残されたように一本立っていた。声は続いた。

「その街灯の下に青い袋が置いてある。その中にはマンションの力ギが入っている。今から必要なものを持ってそこに引っ越しなさい。奴らに気づかれる前に早く。」と電話は切れた。

黒い服の者達の恐怖を思い出した武は急いで街灯の青い袋から新しい住所と鍵を取り出すとその日のうちに違うマンションへと移動した。

そのマンションの入口は頑丈なセキュリティがついていた。青い紙の中にある情報通りにロックを外し武は引っ越しの荷物を持ってマンションへと入った。

指定された部屋のカギを回し中へ足を踏み込んだ。

指定された部屋の中には家具が一通り揃っていた。冷蔵庫に洗濯機、テレビにソファ―にパソコン…。どれも新型機器である。

驚いていると携帯がなった。

「はい」と武は携帯に出た。

「新しい家は気に入ってくれたかね？それは組織のボスから君への入隊祝いだ」と電話の先の人物はそう言った。

「入隊祝い？」と武は聞き返す。

「そうだ。君は今日からソナーパレカルという組織の一員だ。」

「えっ？そんな誰がきめたんだ？」

「ボスだ！君に拒否権はない。君のお兄さんから組織に要望があったのだ」

「兄さんから？」

「そうだ」と彼は言った。

兄さんとは5歳上の道霧兄さんのことだろう。武の両親は武が幼いときに亡くなった。その日から武は5人の兄さんと姉さんに育てられてきたがどういう訳か道霧兄さん以外の兄と姉は家を出て行って

しまった。最後まで残って武の世話をしてくれた道霧兄さんも5年ほど前に医療先進国に行ったきり行方不明になっていた。しかし、武の貯金口座には毎月50万円のお金が兄さん名義で振り込まれていた。そのお金で武はいままで一人で暮して来たのだ。

「兄さんはどこだ!!」と武は怒鳴った。

「道霧はこの組織と関わりが深い。君が組織に協力してくれれば次期にあえるだろう」

「本当に会えるのか?」

「ああ。組織は言った約束は必ず守る」

「分かった。協力しよう」と武。

武が協力するという言葉を聞くと電話の相手は早速、説明をした。

「これから君の携帯にメールが来る。このメールは本部からのメールだ。君はその指令に従ってさえいけば何も心配はない。これだけは覚えておいて来たメールの内容は全て覚えて実行し必ず消すこと。メールが他の人に流出すると君の身が危ないからね」

「俺の身が危ない? ということだ?」と武が携帯に向かって叫び終わらないうちにその電話は一方的に切れた。

武はもう一度かけようと着信記録を開いたが着信記録には番号は一つも残っていないかった。

ただ、全て消去されましたという文字が出るだけだった。

「なんなんだ!!」と武はソファアの上に携帯を放り投げた。

1分ほど天井を見あげているとまた携帯が鳴った。

武は急いで携帯を取り開いた。

それはメールだった。受信メールを開くと「ソナーパレカルへようこそ!! 加進 武。貴方は今日からソナーパレカルの一員だ。君にパレカルナンバーC-5を授けよう」とテンションの高い本文がそのメールにつづられていた。

このメールに返信を返したがメールから返事が返ってくることはなかった。

第7話『組織』（後書き）

第8話から大幅に改正いたしました。

改正したといっても話を少なくした程度です。話の主旨は変わっていないはずです。

話がずれていつているので話の修正をいたしました。

より良いものを書くためにこれからもどんどん改正していきたいと思っています。

今後ともよろしく願います。

b y , 成田 慎也

『暗殺集団?』

『暗殺集団?』

「こりゃーソナーパレカルの事件かもな?」と警部が呟いた。

「ソナーパレカル?」と関根は聞き返した。

血しぶきがあがった後、電車内は混乱した。

乗客は皆、その車両から逃げようと四方八方に押し合いへし合いになった。

駅に着くと扉にもたれかかっていた、遺体が駅でドアが開くことにより列になってその電車に待っていた、大衆の目の前に落ちて行った。

駅で待っていた客が次々と甲高い声をあげ、電車内の乗客は一斉に我先と開いたドアに殺到した。そのため、駅は混乱をきたし逃げ惑う人々で埋め尽くされた。

電車は渋谷駅で緊急停車をし、すぐに119番通報がされた。

電車内で殺された三体の遺体内、関根の一番近くにいた男性の遺体をみながら警部が言った「ああ。東京を拠点とする殺しのプロ集団だよ、この前の渋谷の事件もパレカルが関係している。」

「なぜそのソナーパレカルが関与していると分かるのですか?」

「彼らは殺害した人の傍に必ず赤い紋章の刻まれたきつねのぬいぐるみを置いて行くんだ」と彼は被害者のポケットから小さなきつねの人形を取り出す。

その小さな可愛いきつねのぬいぐるみの顔の左側には赤い糸でS o n e r P a r e c a r u と二行に渡って刺繍されておりその文字の周りには不思議な紋章が縫い付けられていた。

それは見えていい気分のする刺繍デザインではなくそれはきつねのぬいぐるみまで巻き込むほどの禍々しいオーラを放っていた。

人を殺してこのぬいぐるみを遺体において行く…。それはどう考え

ても尋常な人がやることではないと関根はそう思った。

「まだパレカルと決まったワケじゃないがこのぬいぐるみがある以上、その可能性は高いから捜査は打ち切りかもな」

「打ち切り？どうしてですか？」

「この前の渋谷の事件もパレカルの仕業と分かった瞬間、上から捜査の打ち切りと捜査資料の消去が命じられ、渋谷の事件は迷宮入りさ」と彼はなんともやりきれないという顔でそう言った。

「そんな！人が殺されているんですよ？」

「しかしな、俺達は組織の人間だ！上の命令には逆らえない」

彼はただ啞然とした。

「それよりおまえ殺害現場にいたんだろ？」

「はい。」

「なにか不思議な現象を見なかったか？」

「不思議な現象……？」と関根は考える。

「そういえば……銀色の鳥のようなものを見ました」と関根は電車のなかで見た銀色の鳥のようなものを詳しく彼に話した。

話を聞き終わった警部は頷いて「そりゃ、銀色の燕だな。」と洩らした。

「銀色の燕？」たしかに銀色の燕のように見えなくもないな……と思いつながら関根は聞き返した。「それが、犯人の呼び名なのですか？」

「まあ、そう言うことになるかな？ソナーパレカルのS i - 3というやつが銀色の燕と呼ばれている。」

たぶん動脈をナイフで切り裂いているだけなんだろうが、その動きがあまりに早くて周りの人には銀色の鳥のように見えてしまうからそう呼ばれる。そいつの殺人は分かるだけで10件以上。被害者はどれも皆、動脈を切り裂かれたことによる失血死。これがまたプロでな……」と彼は被害者の首を見て言う。

「普通、動脈を切ると傷口が広いことが多いのだが、銀色の燕は傷口の幅が狭く最小限の力で動脈を正確に切り裂いている。これ

は人体をよく知ったものにも難しいだろうな。」

「じゃあ、ソナーパレカル集団は殺しのエキスパート集団なのですか？」と関根。

「さあ？それはどうだろうな？ソナーパレカルの殺しには色々な種類があるので何ともいえないが、銀色の燕は間違いなく幹部だな。でも・・・妙だな」と警部は3体の被害者を見る。

「どうしたのですか？警部。」と関根は尋ねた。

警部は真剣な顔で被害者達を見た。

「いや：銀色の燕ぐらいの幹部になると単独で犯行することが多いんだが：まあ鑑識結果が出ないと何とも言えないが長年の感からこつちの仏は窒息死後に頸動脈を切られて：こつちの仏さんは心臓を刺された後に頸動脈を切られているように見える：」と警部は電車の中央で殺された50代前後の男性を見て呟いた。

「犯人が複数いる：ということですか？」

「うーん：まあ、そういうことになる。ソナーパレカルの中には窒息で人を殺す奴がいる。窒息死というか：実際には脳に酸素を送れないように血管を押さえるつけるやり方で静かに人を殺す。ソナーパレカルで闇夜と呼ばれている人物だ。この仏さんの殺され方はその闇夜のやり方に良く似ている：それにこつちの心臓に穴があいている仏さんはたぶんフェイクの殺し方だな：まあ、こつちは司法解剖をしないと断定はできないが、フェイクの殺し方はナイフを心臓より少し下から横向きに肋骨の隙間から突き刺し、斜め上に付きあげ肋間神経をマヒさせ心臓にナイフを突き刺す。突き刺したナイフは少し動かし小さな穴を空け、そこから体内に血を流させ失血死させる。突き刺したナイフは抜くことなくに体内に全て埋め込む。そいつらの犯行によく似ているんだ」と警部は笑った。

「まるで殺しを楽しんでいるようなやり方ですね？」と関根。

「どうだろうな？」と警部は関根を見て笑う。

「こいつらは別に殺しを楽しんでいる訳ではないと思うぞ？ただ、殺さなければならぬ状況に立たされているということも考えられ

るぞ？例えば、周りを敵に囲まれた軍隊のようにな」と彼は笑った。
「それはどういうことですか？」という関根の呼びかけに彼は意味
深の笑いを返すだけだった。

『大学』

『大学』

黒服の集団に襲われた日から武は一週間、学校を休んだ。

別に怪我した腕が痛かったわけではない。ただ、あの日から外に出るのが怖くなってしまっていた。しかし、一週間も休むとさすがに大学でも出席日数が危ないわけで…ため息をつきながらのんびりと家を出た。

学校に着くともう既に一時間目の授業が終わっており、生徒は教室から外に出ていた。一人の男子が武に気づき近づいてきた。

「おはよー。やっと来たな。なんか自動車とぶつかったって聞いたけど大丈夫か？」

「えっ？」と武は声を上げた。黒服の集団に襲われてから武は一回もそとに出ていなかった。それに怪我をした話などだれにもしてない…ましてや交通事故にあったなんて言った記憶がなかった。

「それ誰から聞いたんだ？」と武は彼に聞いた。

「えーと…誰だっけな…あー上城教授^{わじょうけう}が言っていたような…」と彼はそう言った。

「上城教授ね…」と武は呟いた。上城教授とは生理学の教授である。金髪の伸び放題の髪を後ろで束ねいつも地味な分厚い眼鏡をかけ、いつも白衣を着て暗い表情で淡々と授業を進めていく教授だった。あまり人気のない教授である。

なんでそんな教授が自分が怪我をしたことをしているのか？なぜ交通事故ということになっているのかと考えていると、廊下の向こうから聞いたことのある明るい声が響いてきた。

「あー超 眠かった」

「ねえ、眠かったね」

「なんであんなぼそぼそしゃべるかな？もつとちゃんと話してほしいよね」

そこにいたのは6人の女の子の集団だった。すごく勉強熱心で真面目な集団でいつも教室の一番前の真ん中の席に座り熱心に授業を聞いていた。

その真面目な集団の中に一人だけ髪を明るく染め、やけにテンションの高い女の子がいた。

保坂 早奈という子だ。黒い髪の集団の中にいるだけあっていつも目立っており、人見知りの激しい学科の中で彼女は人見知りはいらないらしく、違う集団や違う学科の子達とも話をしている姿をちらほら見かけることがあり、男子の中でも有名な子だった。

あれ？と思って武は早奈を見た。

どこかで早奈を見たきがした。どこで会ったのだろうか？と武は考え込み。そして、はっ！と気づき彼女に近づいた。

早奈の腕をぐつと掴み。そして、「話しがある」と言った。

「えっ？」と彼女は武を見た。

「交通事故のことだ」と武は怪我した腕を見せながら言った。

早奈はいつもの明るいにこやかな顔から一変して殺気のこもった眼で武を睨みつけた。

武は気にせず彼女の腕を引き自習室へと連れてきた。

黒い集団に襲われた時、助けてくれた3人の中にいた女の子が早奈にそっくりだったのを思い出したのだった。

実習室へ向かう最中に2時間目の始まりのチャイムが鳴ったが武は気にせず、彼女を実習室へ連れて来た。

実習室には2時間目が始まったせいか誰一人、人がいなかった。

武は一番、奥の席に早奈を座らせると早奈の前に座った。

「なんで。おまえあの時あそこにいた？」

「何の話だ？」と早奈はいつも友達として話している時とは違う男のように低い声でそう言った。

「俺があゝの集団に襲われた時、お前助けてくれただろう？」

「だから、なんの話だ！」と早奈は怒りながら怒鳴った。

武は早奈のこんな姿をみたことは無かった。彼女はいつも誰にでも

笑顔で楽しそうに話をしていた。しかし、目の前にいるのは武の知
っている早奈とは全然違っていた。

「なぜ、あんな夜遅くにあんな公園にいた？それにあの二人は一体
なんなんだ？」

「なにが！？」と早奈はイライラしたようにそっぽを向いた。

武はその様子を見ながら続けた。

「この傷を治療してくれたのはお前なのか？」

その言葉に早奈は目を見開いて武を見た。そして、目をテーブルに
落とすと腕を組んだままため息をついて小さな声で言った。「違う。
それを治療したのは…」と早奈はそこまで言って席を立った。

「授業行かなきゃ」といつものものにやかな顔を武に向けた。

「おい！！待てよ！！お前ら俺を助けに来たっていったよな！！ど
ういうことだよ！！」と武は怒鳴りつけた。

その言葉を聞いた早奈は実習室の窓から青い空を見上げた。そして、
実習室を一通り見渡すと天井を見上げ深呼吸して言った。

「分かった。ちょっと待っている」と早奈は青い携帯を取り出した。

早奈の携帯は珍しいS O 9 0 2 i という手のひらサイズの白い携
帯だったはずだ。なぜその携帯なのか？と武は彼女に聞いたことが
あった。すると、彼女は笑いながら携帯をいちいち開くのがめんど
くさいでしょ？これならロックを外してすぐ電話出来ると笑ってい
た。

現にその携帯は彼女のジープンの後ろポケットに入っているようで
白い携帯につけられた可愛い人形が彼女のジープンのポケットから
ひょっこりと顔をのぞかせていた。

早奈は青い携帯でどこかにメールすると何も言わずに武の前のイス
に座りこみ、いつも首にかけているイヤホンを耳につけ、腕を組む
と「まっている」と一言武に言い、ポケットに入っているウォーク
マンの再生ボタンを押して目をつぶってしまった。

どのくらいたっただろう？早奈は話しかけるな！というオーラを全

身から醸し出しているため武は声をかけることなく長い間そこに座っていた。

30分ぐらいたっただろうか早奈が突然目を覚まし、実習室の入口を見て「来たな」と呟いた。

「へっ？」と武は実習室の入口を見たが誰の気配もなく静かだった。早奈はウォークマンのスイッチを切って耳からイヤホンを外してずっと入口を見ていた。

やがて、複数の人が階段を昇る音がして実習室のドアが開かれた。入ってきたのは3人の男だった。一人は赤い髪 of 青年で見るからに面倒臭いという顔をしている。もう一人は黒髪の男で武が黒い服の集団に襲われたとき早奈と一緒にいた青年だった。

もう一人は金髪の長いサラサラの髪を持った美青年だった。赤い髪の男も黒髪の男も綺麗な顔立ちをしているがこの金髪の男はどっちかと言うと異国のの人という顔立ちをしている。

金髪の青年が武をみてビククリしたような声をだした。

「あんね？加進 武君じゃない？もう学校出て来ても平気なの？じやあ、教務に連絡しとかないかね」と彼はふわりと笑って言った。誰だろうと思いいながら武は彼を見ていた。

すると早奈が赤い髪の男と同じような顔をして言った「なんで海聖かいせいも一緒に来るんだよ」

「何？僕来ちゃいけなかった？」と海聖かいせいは早奈に聞き返した。

「いや、別に来てもいいけどさー」と早奈は頭を掻いた。

「そう！よかった。早奈に嫌われたかと思ったよ」と海聖は嬉しそうにふわりと笑った。

「おい！海聖。お前のそういうところが早奈はいやなんだと思うぞ？」と赤い髪の青年は海聖にそう言って早奈を見た。

「早奈。さつき3人で話していたんだけどな、ここじゃあなんだからこいつの…」と赤い髪の青年は金髪の青年を指さしながら「研究室で話そうと思うんだが…」と早奈に相談を持ちかけた。

「海聖の研究室なら誰にも邪魔されずに話しが出来ると思うのです

が…」と黒髪の青年がそう続けた。

「お茶ぐらいはだすよ。早奈。」と海聖。

「いいよ。11階だったっけ？ここが7階だから…あと4階か」と早奈は立ち上がりながら嬉しそうにそう言った。

「そうだけど…早奈。階段は登らせないよ」と海聖が顔をしかめる。

「えー」と早奈はブーイングを飛ばした。

「階段だけはダメだ」と赤い髪の青年もそう言って早奈を見た。

「はあ？なんで？…なあ？いいだろ？弥譜音」と早奈は黒髪の青年にすぐるようを見た。

「早奈。名刀も海聖も早奈の事を思っているんだよ？いくら、俺でも階段は許可できないよ。まったく早奈のことだから俺達の目に見えないところでは上っているのだろうけど…俺達の前では絶対に上らせない。」と黒髪の青年はそう言った。

「分かったよ。エレベータを使えばいいんでしょ」と早奈は不服そうな顔で3人の元へ行った。

「良い子だね。早奈。」と金髪の青年が早奈の頭を撫でている。

そんな光景を武は不思議そうに見つめていた。

そこへ早奈の声が飛ぶ「おい！！武。早く来いよ」

「あつ！！ああ。」と武は早奈の所へ走りだした。

5名乗りの小さなエレベータ内で名刀が早奈に尋ねた。

「早奈、薬は飲んで来たか？」

「いや、あれ飲んで来たら副作用で学校に間に合わなくなるから飲んでない」と早奈は呟いた。

「お前…。薬はちゃんと飲めっていつも言ってるんだろ？おまえさ！。自分の体が今どんな感じが分かってないだろ？」と名刀は早奈を怒鳴りつけた。

「うるさいな！！自分の体ぐらい自分で管理できるよ」と早奈が名刀に怒鳴りつけていると海聖が早奈の額に手を置き、弥譜音は早奈の頸動脈を触った。そして、二人して顔をしかめる。

「うーん…早奈。貴方、今にでも倒れそうなんじゃない？薬飲まなかったじゃなくて飲めなかった…違う？」と海聖は早奈の顔を覗きこんだ、弥譜音がその言葉に頷き尋ねた。

「脈が異常に早いね。呼吸も乱れているし…早奈。頭ガンガンしているでしょ？」早奈は下を向いたまま頷いた。

そう、実は朝からひどい頭痛がしていた。頭痛があるため名刀がくれた薬を飲むことが出来なかった。名刀からもらった薬はかなり威力が強いため健常な時に飲んでもひどい副作用がある。だから具合が悪い時は飲むな！と口をすっぱかして名刀に言われた。無理して飲んで呼吸困難に陥ったことが何回かあるからだった。

仕方なく市販の持っていた頭痛薬を飲んだのだが…一向に良くならず、逆に悪化してしまっていた。

「おい！そういう時は俺の所に来てって言っているだろ？」と名刀が怒鳴りつける。

「だって…行ったら今日、学校行くなつて言うに決まっている」と早奈は小さく呟いた。

「あたりまえだ！」と名刀は早奈を抱きあげながら言った。「病人を学校送りだす奴がどこにいる？具合が悪い奴が学校に来ると他の奴らに迷惑がかかるんだよ」と名刀はそう言いながらエレベータを降りた。

その階には一つしか部屋しかなかった。エレベータを降りてすぐの扉には“上城 海聖教授”と書かれた古い木の板がドアの右上にかかっている。

それを見た名刀が呟いた。

「海聖：お前どれだけこの大学で優遇されているの？」

長い金髪をなびかせながら海聖が笑った「名刀と弥譜音も教授になればかなり優遇されるでしょ？なにせあの研究に関わっていたんだからね」海聖のその言葉に弥譜音と名刀は明らかに嫌な顔をした。

海聖はそんな二人などおかまなしに研究室の扉を開けた。

「ほら、ちゃっちゃっと入って！」海聖に促されるまま名刀と弥譜

音は中に入った。

しかし、武はドアの前から動けずにいた。

「うん？どうしたの？武。」と海聖が尋ねた。

「いや…勝手に上城教授の部屋に入っただけなんですか？」と武はそう呟いた。

「あーそうだね…いいんじゃないかな？」と海聖ふわりと武に笑いかけた。

中から早奈の声が響く。

「名刀、一旦降ろせ」

「はあ？」

「いいから！！」と早奈は怒鳴った。名刀は仕方なく早奈を下へ下した。

ふらふらした足取りで早奈は武の所へ行った。

「武。お前なんか勘違いしているみたいだから言っておく！」と早奈は武を睨みつけるように言った。「海聖は上城教授だ。だから、気にせず中に入れ。こいつは教授の時だけあんな風に暗く演じているだけだ。普段はこんなちゃらちゃらしたヤンキー教授だ！」

その言葉に武は心底ビックリした。あの暗い教授がこの金髪の美形だとは思わなかった。というより性格が180度違う。武がビックリしていると海聖は「ヤンキー教授はないだろ。早奈」と笑った。

武の表情を見た名刀が言った。「武がすごいビックリしているぜ、海聖。まあ、当たり前か」と言っただけで早奈を見た。「早奈。お前は海聖のベッドで寝ろ！そのままだと倒れるだろ？」

「いいよ。名刀。僕が連れていくからさ」と海聖は早奈を持ち上げ、部屋にある仮眠用のベッドに早奈を寝かせた。

武は信じられずに部屋の中に入ってきて早奈に聞いた

「早奈。本当にこの人が上城教授？あの生理学の？」

「そう。」と早奈は簡易ベッドに寝ながら頷いた。

「うそ…」と武は海聖を眺めた。

「そんなに教授の時と違うかな？」と海聖が呟いた。

「ああ。180度違うな」と名刀は早奈の寝ている簡易ベッドに座り込んで言った。

「弥譜音：名刀がいじめる」と海聖は勝手に皆分のお茶を入れている弥譜音にすぎるようにいった。弥譜音はそんな言葉など気にせず海聖の手にお茶を渡し近くのイスに座り込んだ。

「武もそこに座りなさい」と弥譜音は武に椅子を差し出して言った。武が椅子に座ると彼は武にお茶を渡して言った。

「で、武は何が知りたいんだ？」弥譜音は茶飲みを持ちながら武にそう聞いた。

早奈がその言葉に体を起こして言った。「たぶん全て……じゃないか？ 私たちがどうしてあの晩あの公園にいてどうして武を助けたか……」その言葉に弥譜音はため息をついた。「時がくるまで君に全てを話すこと出来ない。でも現時点までの必要最低限の話なら君には知る権利がある。そこまででもいいのなら話してあげてもいい、しかし、もし君が全てを望むなら帰ってくれ。質問には答えるが答えられないものについてはノーコメントで良いのなら話そう。選ぶのは君だ」武は早奈を見た。早奈は何も言わずに弥譜音を見ていた。

「勘違いしないで欲しい。俺達は君のために話すわけじゃない。本当は君には全て内緒にしなければならないことだ。でも早奈がどうしてもというから付き合ってやっているだけだ。君はこの話を聞けば不幸になる。知らないほうが幸せなんだ……」と言う名刀の顔は早奈からみてもつらそうだった。

武は知リたかった。自分の周りで起きていることを……でもこの話を聞いてしまったことで武がもっと深みに落ちていくことをこのとき誰もが予想していなかった。たった一人全てを知っている者を除いては……ましてやその人物でさえ武がそこまで重要な人物とはその時点では知らなかったわけだが。

「それでもいい。教えてくれ俺だけ蚊帳の外なのは嫌だ！！俺の問題なんだろう？」と武は弥譜音に言った。

弥譜音はビックリしたように早奈を見た。早奈は名刀の手を借りて

起き上がり壁に背中をつけ自分の体を支えてから弥譜音を見て笑った。

「早奈の言う通りだな。」と弥譜音は笑みを浮かべると怖い顔で武を睨んだ。

「青い…携帯を知っていますか？」と弥譜音は低い声を出した。

『青と赤』

『青と赤』

暗く狭い路地裏…。

赤い血の海で青い携帯が光っていた。

血だらけ制服を着た女の子が青い携帯を拾いあげた。

彼女の体からは血が滴り落ちている。

彼女は携帯を拾いあげ、ロックを外すと電話に出た。

「はい。こちらはSPB-1真良輝。獲物は仕留めた」と彼女は血だらけの男の上に跨ると男の鎖骨を覆う服を破り鎖骨にある刺青を眺めた。

「敵はPPCナンバー11。」と彼女はそう言うのと立ち上がった。そして、男の体を蹴りあげると薄い笑みを浮かべ言った。

「うん。分かっているよ。注意する」と彼女はそう言って電話を切った。

そして、しばらく男を眺めていた。その血のように赤い瞳に真つ赤は血だまりの中に浮かぶ自分より大きい男の姿を瞳に映していた。やがて、大粒の雨が降り出した。雨は彼女の体についた血を全て洗い流してくれた。

彼女は雨のなか暗い空を見上げた。吸い込まれそうな暗い闇を見つめていた。彼女のその姿は泣いているようにも見えた。やがて、体についた血がほとんど落ちると彼女は青い携帯を握りしめ、学校かばんを拾い上げその場から立ち去った。

その様子を一人の少女が闇の中から眺めていた。少女は彼女が去ったのを確認するときつねのぬいぐるみを血だまりの中に放り込んだ。そして、血だまりを見て笑うと赤い携帯を取り出し血だまりに浮かぶ男の鎖骨にある黒い蝶の刺青を携帯のカメラで撮影した。そして、男を見下ろしながらどこかへ電話した。

「あつ！真良？予定通りシンボル置けたよ。」と少女は楽しそうな声で電話の相手に言った。

「これでカモフラージュは完了だね。計画通りだよ」と少女は男の着ているスーツから黒い携帯を取り出し男の刺青のある鎖骨の上においた、そして、自分の学生かばんから液体の入った瓶を取り出すと男の体全体にその液体をばらまいた。

「うん？あと始末？今からやるけど？」と少女は電話の相手にそう言った。

そして、黒い携帯の上に銀色の筒を置き、男の血をいっぱい吸ったきつねのぬいぐるみを拾い上げ、男から少し離れコンクリートの上に置くと「準備完了！！」と声を上げ携帯を切り鼻歌を歌いながらスキップをしてその場を去っていった。

彼女が去った10分後、男の遺体が置かれた場所から爆発音が鳴り響いた。

少女は何十メートルも離れたところから爆発によって赤い炎に包まれる死体とそれを見守るように置かれた血まみれのきつねのぬいぐるみを確認すると嬉しそうに笑い、大雨の中楽しそうにかばんをぶんぶん振りまわして闇の中へと姿を消した。

『青い携帯』

『青い携帯』

「青い携帯？」と武は聞き返した。

「ああ。これだ」と名刀がテーブルの上に青い携帯を出す。

その携帯は公園の街頭の下に置いてあった携帯と同じ物であった。

「あの公園でこれを受け取らなかったか？そして、指示を受けたはずだ。」と名刀。

「はい、指示を受けました。黒い服の集団が来るから引越しをしと……」

「引越しか……考えたもんだな」と名刀は笑って弥譜音を見た。

弥譜音は真剣な顔で頷いた。

「武。落ち着いて聞いてほしい。僕らも君と同じ携帯を所持している。これがどういう意味分かるね？」

「な……仲間ってことか？」と武は尋ねた。

「君は思ったより頭がいいね」と海聖が彼の頭を撫でた。

「そうだ。僕達は君と同じ組織の人間だ。」と弥譜音。

「同じ組織の人間なら道霧兄さんを知っているんだろ？兄さんはどこにいる？」と武は喰いつくようにそう尋ねた。

「あー道霧か……」と名刀は嫌そうな顔で呟く。

「そうか、君は道霧の弟なのか……」と海聖がビックリしたように言った。

「道霧のことは話せない」と弥譜音が冷静にそう答えた。

「なぜだ？なんで話してくれない？」と怒鳴る武に対して早奈が静かに言った。

「武。私たちは道霧に時が来るまで武には何も言うなって言われているんだ。だから、道霧のことについては何も話せない」その言葉に弥譜音が声を上げた。「早奈……それを武に言うことも止められているはずだろ」「いいだろ？それくらい言っても……」と早奈は弥

譜音を睨んだ。弥譜音はため息をついた。弥譜音は早奈に呆れてしまったらしい。弥譜音がため息をつくのは大概呆れた時だ。早奈は長年の関係でそれを知っていた。

「あの黒い集団はどうして俺を狙ったんだ？それになんで貴方達はあんな深夜にあの公園にいたんですか？」と武は彼らに問い詰めた。

「それは…あれだ散歩だ」と名刀が頭を掻いて笑った。

「えっ？」と武が驚いた顔を見ると名刀は笑いだした。「そんな訳ないだろ？」と彼は武を見て爆笑した。

「道霧から私の携帯に情報が入ったんだ。まあ、ボスを通してだけどね」と早奈。

「あの黒い集団のことはまだ話せない。この組織のこともね」と弥譜音が早奈の言葉に続いた。「でも、これだけは言える。組織は武を何があつても守ることを決めたから君はその携帯に送られてくる支持通りに動いてくれれば良い。」

「なんで、組織は俺を守るんだ？」

「それは君が組織にとっていや、これに関係する全ての者にとって最初の切り札だからさ。君はこれからいろんな人に命を狙われるし、君の行動によつては組織の人間が死ぬこともあるだろう。でも君はどんな犠牲を払つても生きなければならぬ。何万人の若い命をまもるためにね」と弥譜音。

「どういうことだ？」と武。

まったく意味が分からない。自分はただの大学生だ。そんな自分に何万人の若い命がかかっているとはどうしても思えなかった。

「ごめん。その質問には答えられない」と弥譜音は下を向いた。

武は早奈を見た。

早奈は首を振った。教えることは出来ないということだろう。

「なんなんだ！」と武は怒鳴った。

しかし、名刀も海聖もバツが悪そうな顔で「ごめん」と呟くだけだった。

早奈だけが呟いた。「この情報…武に何万人の命がかかっているこ

とは私たち組織の中でも幹部しか知らない情報だ。組織は貴方を守るために幹部にしかその情報を漏らさないことを決めたの。たぶん貴方を襲った黒い服の連中もまだ知らない。」と彼女は自分の青い携帯を開きながらそう言った。

「貴方のその携帯に私のこの携帯のアドレスを入れとく。この話を聞いて貴方はじっとしていられないでしょ？組織の会議に参加できるようにどこにか手をまわしてみる。それまでは組織のC-3として携帯に送られる情報通りに行動してて。」と早奈は携帯を操作しながらそう言った。「あっ！！学校ではあまり話しかけないで質問があつたらその携帯のアドを使って私にメールしてくれてかまわないから」と早奈は武を睨んで言った。

「わかった」と武は返事を返した。

そのあと、武は早奈達と別れた。

『会議』

『会議』

早奈とその他男3人は武と別れた後、渋谷駅にあるお店に向かっていた。

人通りの多い道からちよつとずれたところに古びたカフェがあった。4人は無断で中に入った。

「さびれすぎじゃねえ？」と名刀が呟いた。

「本当だね」と海聖は呟いて本来マスターが座る位置に座って言った。「じゃあ、僕はここで待っているから、行っておいでよ。」

「よろしく」と名刀と弥譜音がそう言って店の奥に入って行った。早奈が「気をつけて」と海聖に呟いた。

「大丈夫。大丈夫。」と言いながら海聖は愛用の拳銃の入ったホルダーを触った。

店の奥には地下へと続く階段があった。

3人は白熱灯で照らされた階段を降りて行った。

やがて、階段の先に銀色のドアが見えた。ドアノブに青いモザイク模様がある以外は普通の鉄扉である。弥譜音は自分の青い携帯を取り出すとノブのモザイク模様に近づけた。

カチャリという音とともにドアが打つ側へ開かれる。

その先には灰色にコンクリートに覆われた地下室が続いていた。地下室の奥には段差があり、その段差の上に10人位の男女が座っている。

その男女の前には青い髪の男がいる。

名刀が大声で彼に謝った。

「ごめん。樹希翔！！遅くなった。」

「いいですよー。まだ、集合時刻の5分前ですし！！」と彼はそう返してきた。

3人はのんびりと人が集まっている場所へと歩いて行った。

「樹希翔。これで全員か？」と名刀は尋ねた。

「うん。君たちが来てくれたから幹部も皆集まったよ」と樹希翔は言った。

早奈は集まった男女の顔を見まわした。

「あれ？俊。久しぶり！」と早奈は前に座っている金髪の男を見てわざと驚いたように声を発する。

「あれ？じゃないだろ？俺が来るのを知っていたくせに……」と俊は苦笑いをする。

「まあね。だって俊が一番安心だからね」と早奈は笑い返して俊の近くに座り込んだ。

皆の前に立っている樹希翔が大声をあげた。

「今日、緊急招集してもらったのは君たちに幹部と手を組んである集団を追ってほしい。指示は携帯で促すが、チームを組むからには顔を合わせておいたほうが何かとやりやすいだろう？だから顔合わせに集まってもらった」と樹希翔がそう言った。

目的は違うけど理にかなっているね。さすが樹希翔と思いながら早奈は欠伸を殺して話を聞いていた。

名刀は煙草を吸い始めながらその話を聞き弥譜音を見る。

「おい、弥譜音。お前がこのメンバーを招集したんだよな？」と名刀。

「そうだけど？」と弥譜音が何？というように言った。

「理由あるのか？」

「ありますよ」と弥譜音は答えて前に立っている名刀を睨んで言った。

「彼らは実績の面から一番信用できます。と弥譜音。

「データか？」

「データです。」

「そうか。」と名刀は納得して言った。

「分からないことは幹部またはリーダーに聞いてくれリーダーには全て話してある。まあ、言えないことも含めてな」と名刀はそう言

って思い出したように尋ねる「そっいゃ、早奈、弥譜音。昨日の仕事は完了か？」

「けっこう楽でしたよ？」と弥譜音はそう言って早奈を見る。

「あのくらいはかるいね」と早奈はそう返す。

「難しいと思われる仕事は俺と早奈が全て引き受けましょう」と弥譜音。

「はぁ？仕事勝手に増やすな！！しかもまた弥譜音と一緒にやつ！！」と早奈は怒鳴る。

「お前が俺と名刀以外に従えるとは思わないかな？」と弥譜音が苦笑いを溢す。

「…武と俊なら平気だ！！」と早奈は強がって言う。

「こりゃ、おもしろい。じゃあ、武は弥譜音と早奈のグループな」と名刀が笑いながら言う。

「楓は紅黎と笙流がいれば平気ですかね？」と樹希翔が隣にいる茶髪青年にそう尋ねた。

「平気です」と茶髪の青年、楓はそう言って弥譜音に笑いかけた。

「じゃあ、頼んだ」

「仰せのままに」と楓。

「名刀は真良輝と歌乃に着いてもらうとして…」と樹希翔。

「えっ！名刀かよっ！！」と金髪の女の子が嫌そうに名刀を見た。

まだ、中学生の真良輝である。彼女は中学生のくせに結構頭がきれるが名刀との相性があまり良くない。なぜなら、名刀がからかうからである。

「おうっ！！おてんば娘。よろしくな？」と名刀が楽しそうに笑った。

「で、最初はどこへ行くんだ？」と真良輝。

「最初は俺と歌乃だけで行く」

「はぁ？なんでだよ！！」と真良輝は怒鳴りつける。

「お前、平日学校だろ？学校ちゃんに行けよ！！」

「なんだよ…お前まで義務教育とか言うわけ？」

「ああ。言っぜ？」と名刀は煙草に火をつけながら真良輝を見る。
「お前と同じ年齢で死んで行った奴らがいる…。お前だって知ってるだろう？そいつらは学校行きたくても行けなかった…。なあ？そつだろ？なら、そいつらのためにも学校だけは行けよ」と名刀は煙草の煙を真良輝にかける。

真良輝はゴホツゴホツと咳込みながら怒鳴った。

「死んでいった奴らは学校がどんなところかしらねえよ！！あんな箱のなかで何教われって言うんだよ！！」

「なんだろうなあ？人間関係？」と名刀はそう言っていると笑う。

「真良輝。お前は一人じゃねえんだ。何か悩みでもあるならいつでもここに来いよ。ここにはお前と同じ境地に立たされている仲間がいるんだぜ！！」

「う…うるせえ！！わかったよ！！学校行けばいいんだろ！！」と真良輝は半分投げやりになんて言い返す。

「お前が素直になるのは気持ち悪いなあ？」と名刀は今、言った言葉全てをひっくり返すようにそう言って笑った。

真良輝はムツとした顔で名刀を睨みつけた。

名刀は面白そうに真良輝の頭を撫でると樹希翔を見る。「樹希翔は寛隆と俊と組むってことになる方がいいのか？」

「何か不都合でもありますか？」と樹希翔は名刀に尋ねる。

「いや…3人とも短距離だな…って思っで」と名刀は煙草の火を消すと携帯灰皿の中に入れる。

「別に平気じゃない？」と早奈がやる気なさそうに呟いた。「こつちは武が戦力にならないし…べつに強いかもしれないけど、下っ端なら問題ないよ」

「早奈。それはどういう意味だ？」と名刀が焦ったように聞く。

「そのままだけど？」と早奈は膝をつきダルそうに言う。

「武はまだ使えないってことか？」と弥譜音が尋ねる。

「そついうこと…。」と早奈はそのままコンクリートの上に横になる。体が燃えるように熱い。灰色のコンクリートが冷たく感じる。

「早奈？」と早奈の異変に気づいた弥譜音が早奈に声をかける。

「なんか…気持ち悪い」と早奈はそう呟くとそのまま下へ真っ赤な血を吐く。

「ちよっ…！早奈…！」と弥譜音と名刀が駆けつける。

「名刀。俺、愛^{いっみ}呼んでくるな…！」と弥譜音が走っていく。

「ああ。」と名刀は短く弥譜音に返事を返すと「お前…！渡した薬全部飲んだか？」と早奈に聞いた。

「分かんない…」と早奈はポケットからケースを出す。

ケースの中には薬のゴミが12個入っている。

「全部飲んでいるみたいだな」と名刀が呟くと早奈は苦しいのか上を向こうとする。

「バカっ…！お前。横向いている…！肺に血が全部入るだろうが…！」と早奈を横に向かせながら早奈の体が熱いことに気づく。

名刀の頭に最悪なパターンが横切る。まさか…それはねえだろう？悩んでいると金髪の髪のアゲが大きな箱を持つてくる。

「なにボーっとしているのよ…！名刀…！」と愛にそう言われ名刀は我に返る。

早奈を見ると目に涙をいつぱいためて名刀のことを見ている。すがりつくように名刀の袖を握っている。

早奈は昔からの知り合いである、弥譜音と名刀と海聖ぐらいにしか弱みを見せることはしない。

「早奈…！」という弥譜音と名刀の声に「早奈ちゃん」という愛の声を聞きながら早奈の意識は暗闇へと落ちて行った。

『早奈の異変』

『早奈の異変』

気づいたのは次の日の朝だった。

早奈はソファーの上で点滴をされ寝かされていた。

窓の外からは日の光が入ってきていた。

体がだるくて動けそうにもない。ここはどこだっけ？と考えながら辺りを見渡す。

どうもまだS p o n r e の中のような。意識を失ったまま愛の仮眠室に連れて来られたようだ。

「あら？早奈ちゃん、気分はどう？」と愛がドアを入ってきてそう尋ねる。

「最悪。」と早奈は呟く。

「でしようね。」と愛は頷くとなにかのむ？と尋ねた。

「お茶：弥譜音の入れたお茶が欲しい」と早奈はそう呟く。

「何か飲みたいと思うなら大丈夫そうね。大学で授業中だった海聖に連絡したら吹っ飛んで帰ってきたから今、海聖と弥譜音と名刀の3人呼んでくるからね」と愛はそう優しく言うのと走って行った。

早奈は窓の外を眺めた。そして、ウィルスのもたらす症状に泣きだした。

これから自分はどうなるんだろう？不安が体を支配していく。怖くて仕方がない。逃げたくて……。名刀も弥譜音も平気だというが、何が平気なのか分からない。自分の体に症状がでるたびに自分が自分では無くなっていくような不安が募る。

「早奈？どうした？」と名刀が部屋に入ってきて来てそう尋ねる。

「早奈。何どうしたの？」と海聖が慌てて早奈の顔を覗きこんだ

「早奈。名刀にいじめられたか？」とあとから入ってきた弥譜音が机に飲み物を置いてから早奈の傍に来て尋ねた。

早奈は3人に手を回すと引き寄せて泣き始めた。

「おいおい！！どうした？早奈。」と名刀が焦って声をだした。

弥譜音は何も言わずに早奈の背中を擦ってくれた。

「早奈。大丈夫だよ」と海聖は安心させるように言った。

「怖かった…」と早奈は呟いた。

「早奈には俺がいるだろ？」と名刀が早奈の頭を撫でる。

「うん…」と早奈は頷いて手を放した。

「落ち着いた？」と弥譜音が暖かいお茶を早奈に渡しながらそう聞く。

「うん。」と早奈は涙を拭う。

「そう…」と海聖は早奈のそばで座りお茶を飲みながらふわりと微笑んだ。

「気分はどうだ？」と名刀が窓によりかかり弥譜音の入れたお茶をすすりながらそう聞いた。

「最悪だよ。ダルイ…」と早奈はお茶を少しずつ飲みながら言う。

「だろうな。まあ、お茶飲める元気があるなら大丈夫だろうがな」と名刀は笑った。

「そういえば、会議はどうなった？」

「会議はあのままだよ？何も変更ない」と弥譜音。

「なあ？早奈。」と名刀が早奈を見る。

「うん？」

「お前、もう外に出ないでいいから真護と愛と一緒にここにいろよ。」

「イヤだよ。真雅を殺した奴らを殺すまではやる」と早奈は名刀を睨む。

「お前な…体がどんな状態か知っているのか？苦しむのはお前なんだぞ？」

「自分の体くらい自分で分かる」

「とか言って倒れたじゃないか！！」と名刀。

「あれは名刀の薬が悪いんだ！！」

「はあ？なんだと！！」と名刀は怒鳴る。

海聖は二人の喧嘩を見ながら元氣だねーと二人の言い合いを止める
気がないようにそう溢した。

弥譜音は売り言葉に買い言葉の名刀と早奈の会話を聞きながら止める
気のない海聖を見ながらため息をついて言った。

「成長ないね？早奈。名刀は早奈が苦しんでいるのを見て心配だから
そう言っているのだよ？わかっていない？」

「分かっているよ。でも…」と早奈は弥譜音を見る。

「はいはい。」と弥譜音は早奈の顔を見て頷く。

「早奈が頑固なこといいかげんに理解したら？名刀。何年、早奈と
一緒にいるのさ」と弥譜音は名刀に言う。

「でもよ…」と名刀は口ごもる。

「はいはい。じゃあ、こうしようか。早奈は5日間に3回ここへ来る
こと。ちなみに土・日はここへ泊ること。任務の時は俺か名刀と
必ず行くことわかったね？」と弥譜音はお茶を飲みながら言う。

「はあ？そんなにくるのかよ！！それに土・日止まる必要あるのか
？」と早奈は口応えする。

「嫌なら、ここに住みなさい」と弥譜音はズバツと言う。

「お前の体は目が離せない状態なんだぞ！！」と名刀がそう怒鳴る。

「早奈。ここは聞いておくべきだよ」といまままで黙っていた海聖ま
でもが静かにそう言った。

「わかったよ！！」と早奈はさすがに3人に言われて渋々頷く。

「つてか、弥譜音。今、何時？」と早奈。

「今？今、9時になるとこだよ？」と弥譜音は腕時計を見て言う。

「学校！！」と早奈は立ち上がるうとする。

それを弥譜音が止める。

「学校にはもう連絡してあります。今日、一日ぐらい休みなさい。」

「でも…」と早奈は呟く。

「診断書ぐらい書いてやるから、今日だけは休め！！」と名刀が腕
を組んで言う。「今日は絶対に外ださねえ」と名刀が早奈を見る。

腕を組んでいる時の名刀は何を言っても聞いてくれないのをさすがの早奈でも知っている。

「分かったよ」とソファーに戻り、お茶をすすする。

弥譜音の入れてくれたお茶は優しい味がした。

「そういえば、武はどうなった？」と早奈は尋ねた。

「うん？あ…あいつまだ覚醒してないのか？」と名刀が尋ねる。

「それは…まずいね」と海聖が考えこむ。

「うん…。それにウィルスのこと話してない」と早奈はお茶の水面を見ながら言う。

「まだ、言わないでもいいじゃないか？」と弥譜音はどう思う？と言うように名刀を見る。

「そうだな。HKWのことはまだ言わなくてもいいだろ。でも覚醒してないのはまずいな。早奈、学校にいるときは出来るだけ武を見ている。覚醒始まったらここへ早く連れてこい。いいな？」

「うん。わかった」と早奈はお茶を飲み干す。

「武の武器は道霧と同じ銃かな？」と海聖が楽しそうに笑った。

「さあな」と名刀は自分の腰にある武器に手をかけてそう呟いた。

『カイキ』

『カイキ』

次の日、学校の廊下で武に会った。

「おはよう！！」と早奈が声をだすと武はおはようと声を返してくれた。

早奈は武に近づき「今日メールがあるからその場所にきてね」と小さな声で呟くと武に手を振り教室へ戻った。

授業が終わった後、メールが来ていた。

武は震える手でメールを開いた。そこには「午後4時世田谷線世田谷駅」と書かれていた。

武は十二条駅から電車を乗り継ぎ4時に世田谷駅に着いた。うろろろしているとサングラスをかけた男が武の肩をたたいた。

「武。ちゃんときてくれたんだね？」と彼はサングラスを外した。20代前後の男がそこに立っていた。武はその顔に見覚えがあった。それは弥譜音だった。

「弥譜音さん？」

「弥譜音でいいよ。」と彼はそう言って笑った。

「保坂は？」

「早奈は今、トイレにいます。」と弥譜音は時計を気にしながらそう言った。

その頃、早奈はトイレで胃の中のものを全て吐いていた。薬の副作用で早奈は食事を食べては吐いてを繰り返していた。この事はたぶん弥譜音も名刀も海聖でさえ知っているだろう。

体がだるい。それでも早奈はもう一度、薬を取り出しお茶で流し込むとふらつく足でトイレを出た。

ふらふらしているとトイレを出てきたところで誰かに腕を掴まれる。

「おい、大丈夫か？」と早奈の顔を覗いてくるのは弥譜音だった。

「大丈夫」と早奈はそう返したが見るからに顔色が悪かった。

「早奈。ベンチに座ろう」と弥譜音は早奈をベンチに座らせる。

早奈はベンチに横になった。

「すぐ良くなるからちよつと休まして」と早奈は目をつぶった。

「分かった」と弥譜音は早奈の頭を撫でると早奈の隣に座り込んだ。

「武！！座りな」と弥譜音はずつと突っ立っている武に声をかけた。

「大丈夫なのか？」と武は弥譜音に聞いた。

「いいから、俺の隣に座りなさい」と弥譜音は武に座るように促した。

武は弥譜音の隣に座り込んだ。

「早奈なら平気だろう。彼女がじきによくなると言っているんだから大丈夫」と弥譜音は早奈の頭を撫でながら言つと早奈を愛おしそうに見ていた。

「弥譜音。早奈は病気なのか？」と武。

「そうだね。持病と呼んでいいのかな？まあ、生活には何も保障はない」と弥譜音はそう武に笑顔で嘘をついた。

早奈の症状はもう立っているのもつらいほどの症状まで進んでいるはずだ。でも、早奈はそれを皆に隠している。早奈が隠しているかぎり弥譜音も名刀も嘘をつきとおすことにしている。

やがて、早奈は30分後に目を覚ました。

「もう、大丈夫か？」と聞いた弥譜音に対して早奈はいつも通りに

「ああ。大丈夫だ」と返して立ちあがった。

「今、何時だ？」

「今か？7時半だが？」と弥譜音。

「ちよつどいいな。」と早奈は立ち上がった。

「弥譜音。奴の情報だとあいつは8時に現れるんだよな？」と早奈は弥譜音にそう尋ねた。

「そついう情報がはいつている」と弥譜音。

8時に早奈達は練馬のある住宅街を歩いていた。

「こんなところで何かあるんですか？」と武は早奈と弥譜音にそう尋ねた。

「ああ。ある取引があるんだ」と早奈は武にそう呟くと近くの塀をよじ登った。弥譜音がそれに続く。

「ちよつと！何しているんだ？」と武は叫んだ。

「何って？奴らをここで待つんだよ」と早奈は勝手に他人の家の屋根に上って言った。

「ここで待つのか？」と武はしぶしぶ塀に足をかけながらそう尋ねた。弥譜音が武に手を出しながら言う。「そうだよ。ここがベストポジション」

「何の取引だ？」と武は尋ねた。弥譜音が困った顔をして早奈を見る。

「ある取引だ！！」と早奈はサラリとそう言っただけで登った屋根の前の道から見えないように身を低くした。

弥譜音と武も早奈の隣に隠れた。

やがて、目の前の道に黒いスーツの青年がやってきた。暗闇ということもあって男の顔は見えなかった。

反対側からは細い体つきの拳動不審の男がやってきた。拳動不審の男は黒いスーツの男に尋ねた。

「お、お前がカイキか？」

「ああ。そうだよ」と黒いスーツの男は彼に笑った。

「ち、ちゃんとわたしだからな」と彼は何かにかえるような眼できよきよしながら彼に黒いスーツケースを押し付け逃げるように去っていた。

スーツケースを渡された男はため息をつくと困ったように頭を掻いた。

そして、スーツケースを持って悠々と歩きだした。

暗闇の中、男の顔が街頭の光に照らされた。

短い黒髪がいまどきの若者のようにワックスで上に向かって立って

いる。まだかなり若い、まるで大きめの黒いスーツを着て大人ぶっている少年に見えた。

不思議な違和感が彼には会った。

「弥譜音あいつだ!!」と早奈が屋根から彼見て呟く。

「カイキに……。間違いなさそうですね」と弥譜音は彼の様子を見ながら早奈にそう返した。

「武。お前はここにいろ」と早奈は突然、青年の前に飛び出した。

早奈の背中を追って弥譜音も飛び出した。

「えっ!!ちよつと」と武は叫んだ。しかし、その声は早奈の声に消されてしまった。

「カイキ探した」と早奈は青髪の青年にそう言った。細い練馬の住宅街を歩いていたカイキはその言葉に口の端をつりあげた。

「久しぶりだね、僕を殺しに来たの?それとも……これかな?」と彼は持っているトランクを指して笑った。

「さあね」と早奈。

「早奈。創立者に歯向かうなんて君には出来ないね、お前の中には僕の遺伝子も含まれている。要するに君は僕のコピー、コピーは母体を殺せないよ?」とカイキは昔と変わることはないにくたらしい顔で、そう言った。

「やってみなきゃわかんねえだろ!」と早奈はズボンからナイフを出す。

弥譜音も武器に手をかけた。

カイキがその様子を見てにやりと笑った。

「ダメだな、早奈。ちゃんと相手の獲物を見なきゃ」とカイキは早奈と弥譜根の胸の前で手を広げた。

「バースト」とカイキが呟くと同時に早奈と弥譜根の体は宙に浮き、そして次の瞬間、家の塀を3つ壊し吹き飛ばされた。

そして、壁に強く背中を打った早奈と弥譜音はそのまま意識を失った。

武はその様子を屋根から息をすまして見つめていた。

「まったく…何の成長もしてないね」とカイキは意識を失った早奈と弥譜音を見てそうつぶやくと、塀の屋根でその様子を見ていた武を見て笑った。

「君が武君だね、久しぶり大きくなったね」

その笑みはなにかを企んでいる顔だった。

武は彼のその笑みを見ただけで屋根の上で気を失った。

「記憶は失っても身体のはうは全て覚えているみたいだね」とカイキはそう言々と携帯を取り出した。

「ニイ？俺だ。武を捕まえた。至急、人をよこしてくれ」携帯をしまうとカイキは住宅街へと姿を消した。

「早奈！」という弥譜音の声で早奈が目覚めたのはお昼すぎだった。

頭がくらくらする…と思いながら早奈は体を起こした。

「今、何時だ？」

「15時だ」

「くそ…頭痛い」と早奈は頭に手をやりながら弥譜音を見上げた。

「カイキは？」

弥譜音は首を降りながら「俺が目覚めた時にはもう…」と言った。

「そつか…」と早奈は呟いて下を向いた。

何か異変を感じ早奈は辺りを見渡す。何かが目覚める時と違う。

何が違う？早奈は記憶をたどった。

「弥譜音！武は？」と早奈は慌てて弥譜音に聞いた。

弥譜音は首を降った「分からない。愛に連絡したが戻ってはいないらしい…」

「カイキが連れ去った可能性は？」と早奈。

弥譜音は少し沈黙し「否定は出来ない。武の中にはダブーの一番が隠されているからな」と言って携帯を打った。

「今、武の行方を探すように指示を出しているから…」といつも冷

静な弥譜音がやけに焦っているように早奈には見えた

漆黒の闇。その中に見える赤い光。その光の中で一人の少年がこちらへ手を伸ばしている。

「お兄ちゃん！」幼い自分の声がこだまする。

傍に駆け寄ると少年の隣に髪の高い少女が赤い光の奥で武と少年に手招きをしている。

少年は武を見ると微笑んで少女の元へ走って行った。

「待って！行かないで！おいて行かないで！」と叫ぶ幼い自分が見えた。

また、暗闇が目の前を支配する。

やがて、水の落ちる音が聞こえてきた。どこかで聞いたことのある音……。

また、この音……と思いながら武は目を開けた。

灰色のコンクリートの天井が見えた。どこかで見たことのある風景だ。

武はデジャブ感を覚えながら「ここは……どこだ？」と呟いた。

「お久しぶりだね、武君？」と頭上から声が降り注いだ。

「おまえは誰だ？」と武は体を起こそうとした。

しかし、体はきつちりベッドに固定され動くことが出来なかった。

「あ、ダメダメ。君はここに捕われている身だから大人しくしててね、さもないと……」と彼は武を除きこんでニヤリと笑った。

突然、武の体に電気がながされた。

うああああっ……と武は悲鳴を上げた。体に酷い痛みが走る。

その様子を見てカイキは口の端をつり上げた。

「さあ、武君。武士を出してくれよ」とカイキは眩き痛み悲鳴を上げる武を楽しそうに見つめた。

『多重人格！？』

『多重人格！？』

ガタンと重い扉が開かれて名刀と真護と愛の3人は開かれた扉を見た。

「名刀！武は見つかったか？」と早奈が大声をだして部屋の中に入ってきた。

その様子を見た名刀は早奈と弥譜音の異変に瞬時に気づき心配するように駆け寄

って来た。

「おい！大丈夫か？」

「えっ？何が？」と早奈が呟いた瞬間、後ろにいた弥譜音の体が早奈に倒れてくる。

「弥譜音！？」と早奈は大声を上げた。

「おっと…」と倒れていく弥譜音の体を間一髪で名刀は支えると床に降した。

ぬるっとした感触がして名刀は自分の手を見た。手はべっとりと赤い血に濡れていた。

名刀はそれを見て眉を潜めると弥譜音の着ている服を慌てて破いた。傷だらけの肌の中に血だまりが浮いていた。ちょうど、みぞおちと呼ばれる場所に…

愛を呼ぼうとした次の瞬間、聞こえてきた悲痛に近い悲鳴に名刀は早奈を見た。

早奈は頭を抱え悲鳴でも叫び声でもない声を発した。その声に名刀は早奈に駆け

寄り、慌てて口を塞いだ。赤い瞳に変わりつつある早奈がそこにいた。ぎゃああああ！！人間が発する声ではない声が早奈から発される。

名刀は早奈の腕を掴み叫んだ。

「海聖かざと！！早奈が！！早奈が！」

「早奈ちゃん！！」と愛が駆けつけようとした。それを名刀が止める。

「来るな！！早奈に殺されるだけだ」

早奈の髪と瞳が真っ赤に染まった。

異常に気づいた海聖が駆けつけた。

「どうした？名刀……」と海聖は早奈と名刀を見て大声を発する。

「なにしているんだ！！名刀。早姫さぎが来る！早く離れる！！殺されるぞ！」

「なら、俺も名輝めいきを出すまでだ！！」と名刀は怒鳴る。

「本気か？」

「ああ。」と名刀は海聖をみる。その瞳は赤い目から青い瞳に変わっていた。名刀の髪が海聖のように金髪に変わる。

「おい！！やめろ！戻れなくなる……」という海聖の声はもう名刀には届かなかった。

早奈がもう一度悲鳴を上げた。

そして、海聖を見て笑った。

その笑みがあまりに薄気味悪くて海聖は背筋が凍える気がした。

「ここに出てきたのは何年ぶりだろうな？なあ？海聖。海人は元気か？」と早奈がしゃべった。しかし、それは早奈ではない。早奈の中にいるもう一人の早奈、早姫だった。

「海人は死んだよ」と海聖は震えながら呟いた。

「ははっ！！死にやがったか！だから、今はお前がそいつの支配者か！」と早姫は笑った。

「うるせえぞ。早姫。」と金髪になった名刀が静かに言った。

「俺の眠りを覚ますな！！てめえが出て来たから名刀が俺を起こしやがったじゃねか」と名刀が早姫を睨んだ。

「あら？名輝じゃない」と早姫は赤い瞳で彼を睨んだ。

「呼び捨てか？てめえ！！」と名輝は握っていた早姫の手を掴み、片手で早姫の体を持ち上げ壁へと投げつけた。

早姫の体はひどい音を立てて飛んで行った。

早姫は壁にぶつかる前に壁に足をつくと人間とは思えないジャンプ力で名輝に早奈、愛用のナイフを握って襲いかかった。

ダルそうに名輝は頭を掻き彼女の攻撃を避けると隙が出来た彼女の胸に手を当てた「バースト」と名輝が呟くと小さな爆発が名輝の手で起きた。早姫の体から血が噴き出す。しかし、早姫は怯むことなく。ナイフを名輝の首に走らせようとした。間一髪でそれを避けるように名輝は後ろに下がった。名輝の顔に一筋の赤い線が走る。床に足をついた早姫は胸から大量の血を流しながら笑った。

「やつぱり、お前に痛みがないんだな？」と名輝が呟く。

「お前にだって痛覚がないだろ？」と早姫は血を舐めながら言った。「俺には痛覚はあるさ。ただ、視力がない。目に映る怖さを知らないために俺は視力を取られた」と名輝は笑った。「まあ、そのおかげで恐怖がないんだがな」と早姫の元へ走ってくる。「その体は早奈のものだろ？あまり傷つけるわけには行かないからな。もう決めさせてもらうぜ」と彼は名刀の愛用の刀に手をかけた。

「望むところだぜ？」と早姫が真つ正面から突っ込んでくる。

早姫は名輝の間合いに入ると天井へジャンプする。それを追いかけるように名輝が地を蹴って飛び上がった。

それから、何があったのか海聖には分からなかった。

気づけば跳び上がった名輝が早姫の足を捉え早姫の体を力いっぱい地上に投げつけた。

そして、早姫が地上に落ちて気を失ったようにしか海聖には見えなかった。

しかし、地上に降りた名輝はキンと刀を鞘に収める音を出した。

いつ彼が刀を抜いたのか海聖には分からなかった。早姫を地上へ投げる時には確かに刀は抜けてなかった。

早姫が気をうしなったのを見ると名輝は一息ついて血を流し、虫の息となっている。

弥譜音の傍に座り込み血の溢れる傷口に右手を当てた。

青い柔らかい優しい光が弥譜音の傷口を照らす。

やがて、名輝は立ち上がり海聖に言った。「致命傷となる傷は癒した。あとを頼む」

「あゝありがとう」と海聖は彼の顔を見た。

「なんて顔しているんだ？海聖。」と名輝は笑って言った。「久しぶりだな？もう会えないとおもっていたよ」と彼はそう溢した。

「僕もさ」と海聖はふわりとほほ笑みかえした。

「じゃあな。俺はもう役目を果たしたから寝る。もう二度と会えないかもしれない。海聖、名刀を頼むな」と名輝は笑った。「やつぱり、戻るのか」と海聖。

「ああ。そういう約束だからな。」と名輝は苦笑いをして目を閉じた。名刀の髪や瞳が元の赤い色へと戻った。

その体を海聖は支え、床に寝かせた。

『武士』

『武士』

水の音がする…。

その恐怖の音…。武は赤い光の中で目を覚ました。

ここにきてどのくらい立ったのだろうか？口の中が血だらけで…頭がくらくらしてなにも分からない。

ここ何日、武の世界はコンクリートの世界…。天井に吊るされた腕が千切れそうに痛い。もう全てが痛くてしょうがない…。足の切り傷からも血が流れ出て行く。

一人の男が黒い鞭を持って部屋に入ってきた。

「いつまでも武士を出さない気か？武？」とカイキは彼にそう聞いた。

「武士なんて知らないって言っているだろ？」と武は怒鳴った。

「まだ分からないの？君の中にいる。もう一人の君をだしてくれてたのんでいるんだよ」と男は武の髪を掴んで言った。ずっとこの男は武士を出せと言っては鞭で武を叩きまくった。こいつは頭がおかしいんじゃないか？と思いつつ武は彼を睨みつけ、彼に顔にもう血とあまり変わらなくなった唾を吐いた。彼の顔に血が噴きかかる。

彼は怒り、武の顔を思いつきり蹴りあげた。歯が2、3本と治療した歯が折れたのを感じながら武はその歯を彼に向かって吐きだした。彼がくそっ！と言つてナイフを出したのを見て武は目をつぶった。もう終わりだと思ったからだ。考えればつまらない人生だったな。と彼は思いながら死を覚悟した。

しかし、帰ってきたのは痛みではなく聞きなれた声だった。

「おい！！生きているか？待たせた」という早奈の声だった。目を開くと早奈の顔がそこにあった。

さっきまで彼を殴っていた男は樹希翔のそばで気を失っていた。

名刀が武を見ながら呟いた。

「お前は本当に良く歯を折るな」

「あらま、見ないうちに男らしい顔になったね」と海聖が笑った。

「おい！！バカな話しないでこれ外すのを手伝え！！」と弥譜音の声が頭上から聞こえた。「はいはい」と名刀は武の後ろ側へと廻る。

「ちよつと痛いが我慢しろよ」と名刀の声が頭上から聞こえた。

次の瞬間、両手首に痛みが走った。「つう…」と武は叫び声をあげるのを我慢すると重たかった両手の枷が外されたようだ。突然、腕が楽になった。

がたとと体から力が全て抜け膝から床に落ちる。

そんな武に名刀は来ていた上着をかけると身長170cmの19歳の大学生をで名刀は軽々と持ち上げた。そして「もう大丈夫だ」と言った。

「良く頑張ったな」と俊が武の頭を撫でた。

真良輝が腕を組みながら名刀に言った。

「早くしろ！！敵が来る」

「早く行きましょう！敵が気付いたみたいです」と楓が叫ぶ。

「俺が足止めしてきますでしょうか？」と紅黎の声が響いた。

「いや、面倒は避けよう。」と弥譜音がそう言っているのを聞きながら、武は名刀の腕の中で睡魔に襲われ目を閉じた。

目の前に灰色の天井が見えた

目を覚ました武は体を起こした。体のほうは不思議ともう動けそうだった。

武は立ち上がった。まだ、頭が少しクラクラしたが立っていられないほどではない。

廊下の壁に手をつきながら進むと廊下の向こうから弥譜音がやってきた。

彼に気づいた弥譜音は微笑んだ。

「体はもう良いのか？」

「ああ」と武は短い返事を彼に返した。

「助けにいくのが遅れてごめんよ」と弥譜音は彼に謝った。「俺も名刀も早奈も怪我をしてね、3日ほど寝込んでいたから君を助けに行くのがおくれてしまったんだよ」と弥譜音は心底申し訳そうな顔をした。

「いえ、いつか助けに来てくれると信じていました」と武。

なぜ、信じていたのかは分からなかったが捕まっている間、いつか彼らが来てくれると思っていた。いつの間にか武は身も心もこの組織の一員になっていた。

弥譜音はその言葉に心底驚いた顔をしたが、やがて笑って言った。

「いつの間にか成長したみたいだな、海聖の診断だと君の怪我は全治1週間。海聖が公欠をだしてくれたから、学校の方は気にしなくて良いよ」と彼は武の頭を撫でた。

その手の感触に武は頭を抱えそうになった。この優しい手の感触も知っていた。しかし、思い出せない…。いや、彼の過去の記憶はある理由である人物によって抹消されているので武がどんなに考えても思い出せるはずはなかった。そのことを武はまだ知らなかった。

「おっ！！武！目え覚めたのか？」と早奈が廊下の先から武を見つけて駆けつけてきた。

「大丈夫か？」と早奈は武の表情に疑問を感じ彼の顔を覗きこんだ。

「あっ！ああ。大丈夫だ」と武は早奈に苦笑いを返す。

「そうか…？」と早奈はまだなにか引つかかっている顔で武をみる。

「本当に大丈夫だ。心配してくれてありがとう」と武は早奈の不安を消すように言った。

早奈はその言葉にいつも学校で見せてくれる明るい笑顔を武に返した。

「そっいえば、早奈。おれあいつに武士を出せと言われたんだけど…」と武はずっと引つかかっていた事を早奈に聞いた。

「武士をだせ？武士って…戦国時代にでてくるあれか？」と早奈が

眉をひそめ弥譜音を見た。

「カイキがそんなことを？」と弥譜音が考えこむ。

「なあ？早奈。武士って誰のことなんだ？」と武は早奈に尋ねた。

「さあ？誰って聞かれても私の知っている武士は戦国時代に刀を振りまわしているあの武士だけだぞ？」と早奈はそう苦笑いを溢した。

「そうか…」と武は腕を組んだ。

「武の聞き間違いじゃないの？」

「うん。かもしれない」と武は早奈にそう返すと笑った。

弥譜音だけが厳しい顔をして武を見ていた。

『武士』（後書き）

こんにちは！！

天海 聖哉です。

ここで第1章は終わりですよー。

書けば書くほど勉強しなきゃー！！と思ってしまいますよ。特に文章なんて、ひどいものですよね。こんなに苦勞するなら文系に行けば良かったと思ったり…。いつもどうすれば人に伝わるのか必至に考えています。私は表現が少ないらしいので…これから少しずつ勉強していきます。

さてここからは第2章となります。

やっと、話が始まった！！って感じです。

さてさて、ここからどうなるやら…この頃、実習に追われて続きがなかなか書いていませんが継続は力なり！！始めたものは何が何でも書き終えなければ！！と思っっています。徹夜しながら頑張ります！！

それでは！また第3章の始まりでお会いしましょう！！

第2章の始まりです。

第2章『黒い携帯』

『黒い携帯』

現場は大泉公園の隅だった。人気のつかないような街灯もない噴水のすぐちかく。

その公園には大きな池があったがそこから見ることも出来ないようなおくまった場所にそれは異様な気配をまきちらしてたたずんでいた。

発見したのは消防士達である。午前4時に近くに住む住人から公園でなにか爆発音があり火の手が上がっていると連絡があったそうだ。消防士達が駆けつけると赤い炎の中で人が燃えていたのだ。

それはかなり異常だがもつと異常な物がそこにはあった。そう、男の血をベツトリ吸い込んだパレカルの紋章が刺繍されたきつねのぬいぐるみが燃えている男を見るように置かれていたのだ。

「また、パレカルですね」と関根は遺体を見ながら警部にそう呟いた。

警部は首を捻り言った。

「どうだろうな？」

「えっ？だつてきつねのぬいぐるみもありますし……」と関根。

「パレカルの連中がわざわざ遺体を焼くだろうか？彼らは今まで殺人を犯して来たが死者を焼くなんてことはしなかったえ？」と警部は言った。

「でも、手口は彼らの手口に違いはないんだがな」と彼は考えこみながらそう言った。

「警部は殺したのは彼らで燃やしたのは違う人物だと言いたいのですか？」と今

日の関根の勘は冴えていた。警部は驚いた顔で彼を見て「おまえも一人前になったな」と笑った。

「まあ、俺の考えはだいたいそう言うことだ。どうせ、また捜査は

打ち切りになるだろうがな」と彼は悔しそうにそう語った。

「一つ聞いてもいいですか？」関根は何かがひっかかて仕方なかった。

「なんだ？」

「パレカルが彼を殺したと過程すると燃やした人物は燃やす理由が存在する。燃やす理由を考えると何かを隠したかったと考えるのが普通ですよ？それはなんですか？」

「それはな……」と警部は遺体のちょうど鎖骨をゆび指し言った。

「ここだけ、異常に焼けているのは分かるか？普通に考えて良いとすれば犯人は彼の鎖骨にある何かを隠したかったことになる。」と警部は立ち上がり鑑識に尋ねた。

「被害者の鎖骨に何かなかったかえ？」

「あーそこには携帯がありましたよ。」と尋ねられた背の低いちよつぷり太った鑑識はそう答えてまるこげの黒い携帯電話を彼に見せた。

「携帯……その携帯はデータ解析できるのかえ？」

「出来ますけど……この事件の捜査はどうせ打ち切りですよ？」と彼は不思議そうにそう返した。

「それでも、やるだけやってみてくれないかえ？長い付き合いやろ？」

「貴方の頼みなら断れないですね。いいでしょうやるだけやってみます」と彼はそう言った。

関根は被害者を見ながら考えていた。犯人が携帯を隠すために彼を焼いたとは思えない。わざわざ証拠を残すように鎖骨の上で携帯を焼くぐらいなら携帯を違うところに捨てたほうが早いだろ？そんなことを考えていると警部が声をかけてきた。

「君も不思議に思ったかえ？」

「はい」

「不思議に思ったなら調べてみると良い」と警部は笑った。

「警部。パレカルの過去の殺人の被害者の画像って残っていますか

？」と関根はとっさにそう聞いていた。

警部はその言葉に一度ビクリしたような顔を見ると関根にどこかのロッカーの鍵を渡した。

「東京駅の東口の34番ファイルNo.12と15だ」

『銀色の燕』

『銀色の燕』

29日の朝、早奈は学校へ行こうと学校までの道を歩いていた。

ちょうど学校の前の横断歩道へ来た時、ふと、早奈は不思議な気配を感じて後ろを見る。

「おう！おはよう」と後ろにいた武が早奈にのんびりと声をかけた。

早奈は「おはよう」とにこやかに返すと被っていた帽子のツバを触って前持ってメールで決めておいた合図で誰かに追けられていることを武に教えた。

みるみる武の顔が恐怖に満ちた色に変わっていく。

武は分かったというように耳に付いているピアスを触った。

「怪我はもう良いの？」と早奈は武に尋ねた。

「もう、ばつちり治ったぜ」と武がいつも通りに笑った。

「そう、良かった…あっ！！私こっちの道から行くからじゃあね、また」と早奈はいつもの笑顔で武にそう言った。

「おう！！またあとでな」と武は元氣そうに早奈に手を振った。

武がカイキから救出されて2週間が立っていた。もうすっかり顔の傷が癒えた武は元氣に学校に通っていた。

この2週間はそれといってなにも起こらなかった。敵が武や早奈を尾行している気配はかなり会ったがなにもしてこなかった。まるで武の体が癒えるのを計算されているように…。

早奈は武と別れて横断歩道を渡った。

追跡されているのになりうんざりしていた。今日こそ決着をつけてやると思いつながら早奈はジーンパンに隠したナイフに触り、人のいない道を探した。

早奈は人気のない路地裏に入り込み立ち止まった。

「どこからでもかかっておいでよ。プロなんでしょ？私を殺れと言

われた：ねえ？そうだろ？」と彼女はそう彼らを煽った。

誰もいないはずの路地裏から6人の武装した男が飛び出て来た。

「お前が早奈だな？」

「そうだよ」と早奈はふかぶかとかぶっていた帽子を取った。

「悪く思ふなよ」と男が刃物や銃を構える。

それらはどれも長距離の武器でまるで早奈の使う短剣の欠点をついたようなものばかりだった。

「何が悪く思ふなよ、だよ。か弱き女の子6人相手です」と早奈はジーパンの裏ポケットからサバイバルナイフを一つ取り出すと左手に構えた。

「もうこうなると自分ではどうにも出来ないから：そちらこそ悪く思わないでね」と早奈はリーダーらしき人物を見て笑った。

その瞳はもう人の瞳ではなかった。まるで、獲物を見つけた野生の肉食獣の瞳だった。

早奈の抹殺を請け負ったリーダーのパナはその瞳を見た瞬間、もう終わりだ、こいつには勝てないということを悟った。

しかし、彼はプロの暗殺屋、依頼から逃げ出すことなどしない彼は彼女が放つ重々しい殺気の中、彼女に銃を向けた。

彼女に狙いを定め引き金を引こうとしたが、彼女はもうそこにいなかった。

次に彼女を見たのは自分の首にサバイバルナイフを滑らす女の子だった。

彼女の赤い髪がふわりと彼の顔を撫でる。

若い女の子の付けている香水の薫りがほのかにした。

そして、彼女と目が合った整えられたキリツとした眉毛の下におくぶたえの細い眼：その眼の瞳は真っ赤に染まっている。それはどう見ても人間の眼ではない。

彼女はニヤッと悪戯そうに笑った。

そして、彼女はパナの首にナイフを当て手前に思いつきり引いた。パナは自分の動脈を切り裂こうとする彼女の腕を掴もうとした、

しかし、早奈の切り裂くスピードはコンマ単位だった。

普通の人間であるパナには成すすべが無い。

自分の首から血が吹き出るのを気付いた時にはもう早奈の姿はなく真っ赤な空だけが見えた。

早奈はナイフを持って一息ついて空を見上げた。早奈の周りには6人の血まみれの死体が転がっている。

彼女はナイフには少しも血が付いていなかった。早奈はナイフをジーンパンにしまい込みカバンを持ち帽子を被り直しその場から走り去った。

その時、早奈は目撃者がいたことに気づきもしなかった。

その出来事から2〜3分ほど遡る。

関根は病院に入院している叔父のお見舞いを終わらせ十二条の駅に向かっていた。

横断歩道であの殺人現場となった電車の中で被害者の隣にいた女子大生と偶然すれ違った。

それだけなら普通に良くあることだが、彼女は目の前で人が血を出して倒れていったというのに表情一つ変えず、悲鳴もすこしも上げずに倒れていく男を黙って見ていた印象が強かった。

その後、彼女は彼が引き止める前に渋谷駅で降り、人ゴミの中に消えて行った。

関根はその時の話を聞こうと彼女を追いかけた。

しかし、彼女は急いでいるようだった。

やがて、彼女は人気のない路地裏に入って行った。そして、路地裏で立ち止まり後ろを向いた。

関根は家の影に隠れた。

「どこからでもかかっておいで。プロなんですよ？私を殺れと言われた…ねえ？そうだろ？」と彼女がそう言う。

すると、どこからか武装した6人の男達があらわれ、彼女を囲んだ。
「お前がサナだな？」とリーダーらしい人物がそう尋ねた。

「そうだよ」と彼女は帽子を取ってリーダーの顔を睨む。

「悪く思ふなよ」と男が刃物や銃を構えながら言った。

彼女は今から悪戯をする子供の様な顔で「何が悪く思ふなよ、だよ。か弱き女の子6人相手でさ」と言うところからサバイバルナイフを一つ取り出すと左手に構えた。

ナイフを持った彼女の顔がみるみると変貌していくのを関根は見ている。いた。

彼女の瞳は真っ赤に染まって行く。眼はまるで人の眼とは違うもつとまがまがしい…そう、鬼の瞳に似ている。

変貌を遂げた彼女は次の瞬間、地を勢いよく蹴り、姿を消した。

すると、次々と銀色の鳥の様な物が武装した男の周りを飛び回り彼らから大量の血が溢れた。

「銀色の燕…」と関根はそう呟いた

その言葉を呟き終わらないうちに彼女は最後の二人が血を噴き上げる前に武装した男達の真ん中で空を見上げて立っていた。

だらんと下へのぼした手にはナイフが握られていたがそのナイフには血一つついていない。

彼女はゆっくり深呼吸をした。すると最後の2人の首から血が溢れ床に落ちて行った。

その光景に関根は寒気を覚えた。

それはたぶん彼女が自分と同じ人間であることを拒みたかったからだろう。

彼女はその血しぶきに動揺することなく、ナイフを素早くしまいこむと何かに弾かれたように突然、走り出した。

関根はその後を彼女に気付かれないようにについて行った。

やがて、彼女は細い小道と入り込んだ。

関根物陰に隠れて様子を伺った。

そして、小道に広がる死体の数に息を飲む。

7、8人の武装した男達が道端に転がっている。

死因はたぶん銃に打たれたことによるものだろう。どの死体も綺麗に脳天を日の下にさらけだしている。

その中心にサイレント銃を片手に佇む少年。

女の子は彼に近寄った。バツと男が彼女にサイレント銃を向ける。

彼の瞳はさっきの彼女のように赤く染まっている。

関根には彼がまるで鬼に取りつかれているように見えた。

彼は関根のいる場所からでも分かるぐらいの強く重々しい殺気を放っていた。

銃口を頭に向けられた彼女は至って冷静だった。

脅える素振りはない。

彼女は頭に当てられた銃口を左手で掴むと彼から銃を取り上げた。

すると彼の態度がみるみる変貌していった。

瞳は正常にもどり殺気は無くなった。

さっきそこに立っていた人物とはまるで別人である。

彼は辺りを見回し、そこに転がる遺体を見てから彼女の顔を見る

「サナこれ…俺が？」

「そう！」と彼女はそう呟くと「窮地にたたされて体が暴走したみたいね？もう錠剤じゃ止まらないよ」と彼にそう告げた。

彼は自分の両手を見つめた。

「俺が…俺が…」

うわああああ…

両手で顔を覆い悲痛な声を上げながら彼はその場に膝をついた。

早奈は空を見上げると呟いた。

「ねえ？その貴方はパルパックの残党？」

関根は慌てて物影に隠れる。

「ねえ？どうなのよ！！！」と女は大声でそう怒鳴りつけると、いつのまにか関根の隣で関根のこめかみに銃を向けていた。

「ねえ？お前だれ？」と女は低く静かに言った。

その声は女の子の出す低い声の域を遥かに超えていた。

「お…俺はけ…警察だ」と関根は声を絞りだしながら手を上に上げる。

「へえ…お前なにも出来ない警察か…」と彼女は銃を下ろすとそう言って声を上げて笑った。

「おまえ…ソナーパレカルの銀の燕だな？」

「そうだけど…あれ？もしかしてずっと見ていた？」と彼女は上目使いで関根の顔を除いた。

関根はゆっくりと頷いた。

「お兄さん。私を捕まえにきたの？」

「いいや。」と関根は慌てて否定した。

ここで捕まえにきたなど言ったらなにされるか分からない。

「お兄さん。他の警察の人とは違うね。他の人は捕まえに来たとか言うのに…」と彼女は銃を持って遊びながら言った。

「ひとつ聞いていいか？」

「いいよ」

「お前らは本当に人間か？」という関根の質問に彼女は即答で「人間だよ。」と答えた。

「じゃあ、あいつらを殺した時の赤い瞳と人間とは思えない素早さはなんなんだ？何かにとりつかれている訳ではないだろう？」と関根。

彼女は下を見て考え込み「ねえ？パルパックって知っている？」と真面目な顔でそう彼に尋ねた。

「パルパック？」と関根は聞き返す。

「知らないならいいよ」と彼女は関根に背を向けて去ろうとした。

「まて！！」と関根は彼女を呼び止める。

「お前らは誰かに狙われているのか？」

「なぜそう思う？」と彼女が振り向き彼に聞いた。

「おまえが殺したさっきの男達はお前を狙っていたそうだろう？」
と関根は彼女に尋ねた。

「お兄さん。世の中には知って良いことと悪いことがあるんだよ。
知らないほうがお兄さんは長生き出来るよ」と彼女は言つと関根の
方を向いた。

そして、「この世は矛盾しているんだ！生きていたい人が生きられ
ない世界なんだ！貴方に一生は分らないよ！！」と彼女は関根に
銃を向けた。

「バイバイ、お兄さん」と彼女は楽しそうな顔で引き金を引いた。
サイレント銃のバースーンという独特な音を聞きながら関根の意識は
暗闇へと落ちて行つた。

関根が目を覚ました時にはもう二人の姿は無かつた。

銃で撃たれたのに体に外傷が一つもないところをみると銃の弾が耳
元を通り失神していたようだ。

関根は頭を抱えながら立ち上がった。

そしてゆつくりと辺りを見回した。転がっていたはずの死体や血の
跡は一つもなく、静まり返った住宅街の小道が続いている。

あれは…あの二人は夢だったのだろうか？と関根は思った。しかし、
その道に静かに立ち3人を見ていた電柱には弾痕のあとがくつきり
と残されていた。

『覚醒』

『覚醒』

薄暗いがらんとした部屋で名刀^{めいと}はいつも通りにパソコン画面を眺めていた。

「パルパック研究所のことを調べているのですか？」と黒いフードを深くかぶり車いすに座った人がそう名刀に声をかけた。声の低さからして男であろう。

「ああ。見取り図があつたほうがなにかと便利だろ？」と名刀は煙草を吹かす。

「パルパックにいたのに覚えていないのですか？」とフードの男はそう彼に尋ねた。

「そんな10年も昔のこと覚えていられるはずないだろ!!」

「そうですね？ 私は覚えていますがね」と彼は四肢のなかで唯一切断を免れた左手で自動車いすのレバーを操作しパソコンに近づいた。

「ってか、真護。俺お前に今日は血圧高いからじっとしていろって…そう言つたよな？」と名刀。

「じつとしているのは苦手なので…」と黒いフードの中で綺麗な顔立ちの美少年が悪戯そうに笑った。

ガツシャーンという重たいドアが開く音ががらんとした広い部屋に響いた。

「あれ？ 誰か来たみたいだよ？」と真護がのんびりと言った。

「こんな時間に来客なんてめずらしいな」と名刀は煙草を灰皿で消しながらそう言った。

「名刀：いるか？」と女の声が響いた。

「うん？ 早奈か？」と名刀は呟いた。

「みたいだね」と真護。

薄暗い部屋のなかで唯一光を放つパソコンのディスプレイの光に照らされ早奈が名刀の前に姿を表した。

「どうした？」と名刀。

「愛いづみはいるか？」と早奈。

「愛いづみさんなら仮眠中ですよ」と真護。

「お前、血の匂いにするな？」と名刀は眉をひそめる。

「大学に行く途中でパルパックが雇った暗殺者に襲われて…」と早奈は後ろにいる武を名刀の前に連れだす。

名刀の前に出された武は力なく床に膝をついた。武は目隠しをされその上からサングラスをされていた。体は異様なほど震えている。

それを見た名刀が叫ぶ「真護いづみ！愛と樹希翔じゅきとと弥譜音みふねいるよな？呼んで来て！！」

「分かった！！」と真護が慌てて車いすを動かした。

「早奈！こいつの覚醒が始まったのは何分前だ？」

「1時間もたっていないと思うけど？」と早奈は淡々と語る。

「血は吐いたか？」

「2回ぐらい…嘔吐も4〜5回…」

「目隠しをしたのはお前か？」

「最初、サングラスさせていたけど…人を襲いそうになったから…」と早奈。

「名刀！！どうしたの？」と女性が走ってくる。

「おう！！愛いづみおはよう！」と名刀は軽くそう言つと武を見ながら言う。

「武が覚醒した」

「覚醒？早奈が連れてきたの？」と愛いづみ

「そう。早奈の大学の同級生だ」と愛の後から来た弥譜音がそう言う。

「名刀！！タンカー」と最後に駆け付けた樹希翔がタンカーを武の隣に置く。

「静かに行くよ！1、2、3」と名刀が掛け声をかけ武をタンカーに乗せた。

心配そうに見ている、早奈の背中を戻ってきた真護が後ろからポン

と叩く。

「大丈夫。愛と名刀いつみ めいとに任せておけば平気だから…」

「ねえ？真護。なんで私達がこんな目に合わないとならないの？私達は何をしたって言うの？私達だけこんな…」突然、息苦しくなり早奈は床に膝を着いた。

そして、頭の後ろからふつつと沸き起こる痛みで床に倒れ込む。

「早奈！！」と真護が早奈に声をかける。

「名刀めいと！！早奈が！！」と真護。

真護の声で早奈の異変に気づいた名刀は愛いつみを見た。

「任せていいか？」

愛は何も言わずに頷いた。

名刀は息が上手く吸えず動きの小さな肺と早奈の額を触り発熱を催すウィルス性の痛みが早奈の頭の中で蠢いていることをある程度確認すると早奈の右腕を左手で強く抑え右ポケットから小さな黒いケースを取り出すと蓋を開けた。その中には6本ぐらいの注射器が並んでいるそのなかから早奈の症状に効果のある薬の入った注射器を取り出し、キャップを素早く口でくわえ取ると早奈の腕へ注射した。「これで治まるはずだけど…」と心配そうに名刀は早奈の様子を注意深くみつめた。

早奈の体はウィルスによってかなり破壊されていることを名刀は知っていた。薬が効かないということがいつか起こるのでは？と名刀はいつも怯えているのだ

やがて、痛みが治まり息も楽に吸えるようになってきた早奈はそのまま寝息をたてて寝始めた。

その様子に名刀めいとは一息つくとも早奈をソファのある部屋に運び、ソファに寝かせた。

武の様子を見に行こうとすると後ろから心配そうに着いてきた真護が名刀に聞いた。

「早奈のウィルスはどこまで進行している？発作の起こる感覚が狭まってきているから相当なものだろう？」

「早奈の場合、進行速度はかなり早い。それにもう臓器はほとんど機能してない。早奈は気力で体を動かして生きている。俺と愛の意見だ^{いつみ}ができれば一時も目を放したくないな」と名刀は言う^いと走って行った。

『パルパック』

『パルパック』

パルパック：どこかで聞いたことのある名だな？と関根は自分のデスクに座り考え込んでいた。「この世は矛盾しているんだ！生きていたい人が生きられない世界なんだ！貴方には一生分からない！！」
と言い放つ彼女の顔はどこか怯えていた。あの場で関根を殺すのは彼女にとってたやすいことだっただろう。なぜなら、彼女が関根に銃を向けた時、彼女と関根の距離は2メートルも無かった。1秒ほどで6人を殺した彼女がそんな近距離から撃つて外すはずがない。
もし万が一、外したとしても失神した関根を撃つチャンスがあっただろう。

しかし、彼女はそれをしなかった。考えられる理由は二つ。一つは死んだかどうか確かめなかったということ、しかし、それは考えにくい。なぜなら、証拠を残さずに人を殺すとして有名なソナーパレカルの一味である彼らが死んだかどうか確かめずに行くとはかかんがえにくい。

もう一つは、最初から殺すつもりはなかったということ、最初から耳の傍を撃ち関根を失神させるつもりだった。そうだとしてもなかおかしな点が浮かび上がる。ソナーパレカルはいままで何百という殺しをしてきた。しかし目撃者はいない。たぶん目撃した人は皆殺されているのだろう。ソナーパレカルとはそれほど非道で残酷な組織だと言われている。

なら、何故？俺は生きているのだろうか？傷つけられることもなく脅されることもなく失神させられる程度ですんでいる。俺になにかやらせるつもりなのだろうか？と考えて背筋が凍りそうになり関根は考えるのを止めて、デスクのパソコンを眺めていた。

すると、パソコンの画面にパルパックという文字が浮かび上がっている。

関根は驚いてその字を見つめた。その字はパソコンの右端でばやけている。パソコンの中の文字ではなさそうだ。

関根は後ろを向いた。関根の後ろの遙か遠くにある応接間のテレビ画面が関根のパソコンに反射していたのだ。

テレビには大きくパールパツクの謎という題名が並んでいた。

関根は立ち上がり応接間へ行くとテレビの前に置かれたソファーに座り、隣でタバコを吸っている同僚に尋ねた。

「このパールパツクってなんですか？」

「あれ？おまえ知らないの？」と同僚は煙草を吸いながら言った。

「10年ぐらい前に大騒ぎになった事件だよ。パールパツクっていう国のウイルス研究所で人体実験がされていた！？という。ある日突然、大怪我をした15歳の少年が警察所に飛び込んできて助けを求めてきたんだ。彼の後ろからは白衣を着た男達が5、6人追いかけてきていた。警察官は男の子を保護し白衣の男達を捕まえた。そして調べていくうちに白衣の男たちがパールパツクの研究者ということが分かったんだ。まあ、ここまでは普通なんだが保護された男の子が警察官に「僕はずっと実験に使われていた。ほかにもたくさんの子がいる」と言うから、警察がパールパツクに捜査に踏み込んだんだ。まあ、研究所には人体実験に使えるであろう道具は残っていたが、研究職員どころか人一人いなくなっていた。しかし、その施設の庭から小さな遺骨がたくさん出てきて本当に人体実験をやっていたのではないかと大騒ぎになったんだ。そして、保護していた男の子に詳しく事情を聞こうとしたところ彼は警察官の目を掻い潜りいなくなっていたんだよ。その後、マスコミは国に事実関係を訪ねたがすでにパールパツクは閉鎖されてなに一つ情報が残されてなく、今でも真相が分からない事件だよ」

「そのパールパツクがあった場所ってどこですか？」

「あん？練馬区大泉3丁目って…今、テレビで言っていたじゃないか聞いてなかったのか？」

「練馬区大泉3丁目ですね。ありがとうございます」と関根は彼に

頭をさげると走りだしていた。

『快哉』

『快哉』

さな、早奈！と大声で呼ばれて早奈は振り返った。

そこには早奈の顔を覗きこむ赤髪に赤眼の20代前半の男がいた。

「聞いていたか？」と赤眼に赤髪の名刀めいどは早奈の顔を覗きこむ。

「あーごめん聞いてなかった」

「まったくおまえは…」と名刀は頭を搔くと「だからな…パルパツクが本格的に俺達をねらいだした」と名刀は面倒くさそうに言った。
「パルパツクか…あの大人め！」と幸哉が怒りの色をみせる。

「そうそう。皆に注意して欲しいことがあるんだ…パルパツクや政府の他に僕らを狙う集団が現れた。一昨日から名刀に調べて貰っていたんだけどね、とうとう彼らが牙を向いて来たから」と大学生の樹希翔じゆきとがそう言った。

パルパツクはとうとう私達を殺すきかねと思いながら早奈は他人事のようにつまない話を聞いていた。

「彼らが言うには政府は高いお金を払う代わりに裏の殺し屋どもを集めてパレカルパレカルの暗殺屋集団を作ったらしい。まあ、ご苦労なことだった」と名刀

本当に御苦労さまでと早奈はパルパツクを哀れに思いながら赤髪に赤眼の名刀の話を聞いていた。

「ちょっとまって！彼らが言うにはって名刀やつらと話したのですか？」と弥譜音

「話して言うか集団内に入って聞いた」と名刀はタバコに火をつける。

「真斗が行方不明で連絡もつかないんだ。他の奴らも多忙で行く奴がいないだろ？だから、俺が忍びこんだんだよ。ちょうど、体もナマっていたしな」と名刀

「バレてないのか？」と弥譜音

「バレてはいない…ただ、今日その集団に優梨ゆうりと快哉かいやが襲かわれた。快哉は相手を二人殺った後ふいうちにあって即死。優梨は重傷…」
名刀が吸っていたタバコの煙が静かに風に乗ってなびく。

一瞬の沈黙があった。

早奈もこのときばかりは欠伸をするのを止めた。

快哉と優梨の強さを早奈は知っている。あの二人が倒されるなんて信じられなかった。

「快哉が死んだ？」と幸哉

「ああー。連中はそう言っていたぜ？」

「そんなの嘘だ！快哉はそう簡単に死ぬ奴じゃない！」と幸哉が怒鳴る

「幸哉…快哉は死んだんだと」名刀は冷たく言い放つ

「この集団に入る時に聞いたはずだ、死ぬかもしれないがいいか？と…これから死ぬ奴はもつと増えるぞ！おまえはそのたびにそうやって怒鳴り散らすのか？」

ああー名刀…いくらなんでも快哉と兄弟の幸哉にその言い方はないと早奈は「名刀言いすぎ…」と二人の間に入った。

「私達は確かに死を覚悟で入ったわ、でも、他人の死を覚悟で入ったんじゃない」と早奈。

そんな話をしていると樹希翔じゅきしやうがマイペースに名刀を言った。「名刀、快哉は死んでないよ？」

「確かに現場には快哉の血痕が残っていたけど遺体は見つかっていないでしょ？」と樹希翔じゅきしやう

「でもよ…」と名刀めいと

「生きている可能性は限りなく0に近いけど俺は快哉があのかくらいで死ぬなんて思えない。それに…快哉から今メール来たんだよね」と樹希翔はさらりと言う。

「そういう大事なことは早く言えよ！」と名刀

「だって、今来たんだよ」と樹希翔はマイペースにそう返して、携帯を見せる。

「快哉からのメールには2・5Dにいるって」

「2・5Dって…」

「そう。パルパック研究所のあった場所」

「おかしいだろ？快哉はあの場所が一番嫌いなんだこれ畏なんじゃね？」

「畏かあるいはその場所ではなくてはならない理由があるかのどちらかだね」

「どうする？」と樹希翔は楽しそうに名刀の顔をのぞく。

「俺は真斗がいないからここから動けないんだけどな？」

「分かったよ。行けって言っただろ？」と名刀。

樹希翔は笑うと早奈を見た。

「早奈！！」

「なに？」と早奈は樹希翔を見る。

「名刀の護衛を命ずるよ。」

「なんで私？幸哉を指名するべきじゃない？」と早奈。

「幸哉を連れて行ったら冷静な判断が取れずにHKWに飲み込まれるだけでしょ？」

「私も飲み込まれるかもよ？」と早奈は皮肉を返す。

「早奈は絶対に飲み込まれはしないだろ？今もその状態でここに立っているんだからね？」と樹希翔はニヤつと笑いを返す。

こいつ全とお見通しかよ！！と早奈は思いながらため息をついた。

「はいはい。で、何日に行くの？」

「明日」と名刀。

「明日？じゃあ、現地集合ね」

「ああ」と名刀は適当にそう返事を返す。

「なあ？二人じゃつらくない？なんなら助太刀する」と弥譜音。

「たしかにそうだな。畏だった時のことも考えると二人じゃ辛いな」と樹希翔は少し考え言った。「じゃあ、弥譜音と楓。お願いします」

「分かった」と弥譜音。

「仰せのままに」と楓は頭を下げる。

「名刀。4人で平気か？」と樹希翔は隣の名刀に尋ねる。

「俺、一人で十分だよ！！お前ら足でまといになるんじゃないぞ！！」と名刀。

「そう。じゃあ、楓。皆を呼んできてくれる？」と樹希翔は楓にその指示をだした。

「分かりました」と楓は走って行った。

「名刀が一番足でまといだよ」と早奈は名刀の言葉に小さく呟く。

「なんだと！！早奈！！」と名刀。

「なに？」と早奈は名刀を睨む。

「本当のことだろ？」と早奈は名刀に喧嘩を売るように言う。

「殺るか？」と名刀。

「上等だよ！！」と早奈はジューパンの短剣を掴み名刀へと走り出す。名刀は日本刀を構える。

キーンと耳障りな音が部屋に響いた。

「血の気多いですね」と咄嗟に二人の間にすべりこんだ弥譜音がその洩らす。

弥譜音は左手に持つサバイバルナイフで早奈の短剣を抑え、右手の細長く大きい銀色の毒針を名刀の首に近づけている。

「動くなよ。動いたら殺しますよ？」と弥譜音は殺気を放ちながらそう言う。

名刀も早奈も弥譜音が放つそのものすごい殺気に動けずにいた。

まるで大きな岩盤に全てを押しつぶされそうなかなり重々しい殺気だ。

2人を包むその殺気は重力のように2人を襲った。

「そのままゆっくりと武器から手を放しなさい！」と弥譜音。

早奈も名刀も逆らうことが出来ずに武器から手を放した。

二人の武器が床に落ちたのを見て弥譜音が武器を閉まった。

「まったく…僕が止めなければ樹希翔に失神させられていましたよ？二人とも」と弥譜音が二人の肩を叩く。

樹希翔は名刀と早奈の後ろに回していた手を下げながら苦笑いをし

た。

「それだけは勘弁だな」と名刀は笑って日本刀をしまう。
弥譜音は床に転がった早奈の短剣を取り上げると早奈に渡し、早奈の頭を撫でた。

「その力を使うのは明日だよ。早奈」

早奈は黙って悔しそうに頷いた。

『灰色の牢獄』

『灰色の牢獄』

「ここに本当に快哉はいるのかね？」と名刀は目の前にある建物を見上げて言った。

その言葉に「さあね」と海聖は返した。

パルパック研究所という名の灰色の大きな箱の建物は昔と変わらないままそこに存在していた。

「昔と変わらないな…この牢獄」と名刀が呟く。

「小さい頃はここから抜け出すのが夢だったね」と弥譜音は名刀に笑いかけた。

「これがパルパックですか？」と楓。

「そう。」と海聖はそう返す。

「思っていたより大きいですね。俺はもっと小さいのかと思っていました。」

「中はずっと広いよ。それにひどく入り組んでいる。連れて来られた子供が外へ逃げたりしないように部屋分けが複雑になっているんだよ」と早奈。

「そうそう。だから、楓。僕たちから離れないでね。」と海聖はふわりと笑った。

「迷子になったらたぶん楓の力ではでられないと思いますから」と弥譜音

「この施設で逃げることでできたのは一人だけ…俺らだって彼に逃げ道を教わらなかったら一生出ることができなかったぜ」と名刀

「その彼って誰ですか？」と楓。

そんな楓の言葉に4人は顔を見合わせて苦笑いをした。

そして楓に“真雅^{しんが}”と彼の名前を教えると4人は顔を見合わせ笑い、パルパックへと近づいて行った。

その30分前に関根は大泉3丁目に着いていた。
そして、街の住民にパルパツクの場所を教えてもらい初めてパルパツクの建物を目にした。

それは関根の目にも灰色の監獄に見えた。

人の声がして関根は林に身を隠した。

二人の男がパルパツクに向かって歩いていく。一人は黒いフードを深くかぶり顔を隠している。

もう一人の男は青い髪の少年だった。

関根は彼らに気づかれないように着いて行つた。

早奈達はパルパツクの入り組んだ部屋の中をすすると進み地下1階へとたどり着いた。

「なあ？早奈：なんかおかしくないか？」と名刀。

早奈は頷き「部屋の位置が変わっている」と呟く。

「うん。僕もそんな気がする…」と海聖が考えこんだ。

「やっぱりそう思った？」と弥譜音は頭を掻きながら言った「なんか違う気がしたのですね」

「お前、分かっているなら早く言え！」と名刀は弥譜音に怒鳴る。

「まあ、簡単なトリックだね」と弥譜音はそう言つてズボンからナイフを取り出すと目の前の壁に突き刺す。

「この部屋は偽物」と弥譜音はそう言つと突き刺したナイフを引き抜き閉まつた。

弥譜音の突き刺した壁はべにや板で作られた偽物の壁だった。

「ああ、そういうこと…」と名刀は苦笑いをすると大声を出す。

「おい！！樹希翔。そこにいるんだろ？道教えろよ！」

すると、どこからか笑い声がする。
早奈がそばにあったガラスの破片を天井に向かって放り投げた。
すると、笑い声が止み「いたいっ！！」という樹希翔の声が聞こえた。

「殺されたい？」と早奈が低い声で言うと「さすがだね？名刀に弥

譜音。それに早奈…痛い！！」という樹希翔の声が返ってくる。

「なあ？俺忘れてない？」と海聖が呟く。

「あれ？海聖いたの？」と樹希翔は笑った。

ひどい…。と呟く海聖を気にせず名刀が笑って言った。

「お前らスパイ組がやりそうなことは分かるさ」

「で、地下3階への階段はどこにあるんだよ？」と早奈。

「後ろにある消化器をどかすと出てくるよ。」とそう言つと樹希翔の気配は消えた。

「ああ。だから、楓を連れて来たのか…」と名刀はそう言つて楓を見る。

「へっ？」と楓は驚き名刀をみる。

「お前、得意だろ？こういう重たいもの退かすの」

「えっ？まさか…」と楓はそう言い4人の顔を見る。

4人は楽しそうに笑った。

「火薬の量だけは間違えるなよ」と名刀が楓の肩を叩き降りてきた階段を上っていく。

一人残された楓はため息を一つ吐くと身につけているコートからダイナマイトを取り出した。すると、みるみる楓の瞳が赤い色に変っていく。

手の中のダイナマイトを見た楓は楽しそうに笑い、消化器の近くにそれをセツトし配線をめぐらせる。

そして、4人のいる1階へ上る。

「終わったか？」と名刀。

「ああ。人がいないのが残念だな」と楓は人が変わったようにそう言つと手の中のスイッチを押した。

地下1階からズドンと地響きが響く。

「たまんねえ」と楓

「お前さ…本当に爆弾の時だけ性格かわるのな」と名刀は彼の手からスイッチを取り上げる。

楓の瞳がいつもの色を取り戻す。

「火薬の量間違えなかったかな？」と楓が名刀に尋ねる。

「そんなの知らねよ。お前が仕掛けたんだろ？」

「なんか自信無くなってきた」と楓は呟いて階段を降りる。

「あー…うまくいったみたい」と楓は部屋の様子を見て言う。

あとから来た名刀が楓に言う。

「お前さ…やりすぎじゃね？」と名刀はダイナマイトで吹っ飛ばされた部屋を見て言う。

「これは…これは綺麗さっぱり」と海聖が楽しそうに言った。

地下1階にあった家具は爆発によって全て奥へ押しやられている。

消化器はバラバラになり無残に床に転がっている。

「すごい威力ですね…火薬使いすぎじゃありません？」と弥譜音が呆れたように言った。

「まあ、いいんじゃない？消化器なくなっただし…」と早奈は消化器のあった場所の床を探り、床にあった扉を開けながら言う。

「まあ、そのおかげで階段が顔を出したね？」と海聖が扉の中を覗きながら言う。

「本当にこの階段地下3階に続いているのかね？」と名刀。

「畏つてこともありますね」と弥譜音。

「行ってみれば分かるじゃない？」と早奈は扉の中にある人が一人しか通れそうにない階段を下ろうとする。

「おい！！早奈。これが敵の罠だったらお前が前だとヤバイだろ？」と名刀が階段を降りようとする早奈の腕を掴む。

「おっ？お前また痩せたか？」と名刀は早奈の腕の細さに心配そうにそう聞く。

「早奈。ちゃんとご飯食べている？」と弥譜音が心配そうに尋ねる。

「早奈ちゃん。ダイエットなんてしてないよね？」と海聖までもが心配そうに尋ねた。

「してないよ！ちゃんと食べている！！」と早奈は名刀の手を振り払う。

「そつか」と弥譜音は早奈の頭を撫でる。

「弥譜音。俺が先に行くな？早奈が前だと近距離の早奈には勝ち目がないからな」と名刀は弥譜音を見る。

「分かった。俺は一番後ろから行きます」と弥譜音はそう名刀に返事を返すと楓を見る。

「楓は早奈の後ろから行きなさい」

「分かりました」と楓は早奈の後について階段を降りる。

名刀の心配とは裏腹にその階段は無事に5人を地下3階へと案内した。

地下3階に最初に降りた名刀がその様子を見て「昔と何も変わんねえのな」と呟く。

「変わっていたら逆に怖いさ」と弥譜音は名刀の肩を叩く。

地下3階は大きな広場になっている。

ここが使われていた時はミーティングルームとなっていたが今は研究員が逃げた際にいらぬものを積み上げていったためところどころにある大きな段ボールの山ができ、ホール全体を見回すことは出来ない。

「まるで迷路だな…」と早奈がそう呟いた。

「確かに…」と楓が早奈の意見に賛同する。

「パルパックも御苦労なことだ。こんなに積み上げやがって」と名刀は段ボールの山を見上げて言った。

「これ落ちてきたらひとたまりもないね」と弥譜音は楽しそうに名刀をみる。

「だな」と名刀は笑って言った。

『快哉と真斗』

「快哉が待っているって言っていた場所はここのはずなんだが…誰もいないみたいだな？」

「いるよ」と楓が4人の後ろからそう言うのとダイナマイトを出して笑った。

楓は4人にダイナマイトを見せて言った。

「ここからは俺に従ってもらおう」

「あらま」と海聖は呟いて余裕そうに笑いまいったというように両手を上げた。

「お前…」と名刀が刀に手をかける。

それを弥譜音が止める。「名刀。ここは従うべきだ」と弥譜音は二ヤつと名刀に笑いかける。

なにかあるなと感じいた名刀は「分かったよ」と刀から手を引く。

「ありがとうございます。では、そのまま段ボールの間を進んでくれますか？」と楓。

「分かった」と弥譜音は歩きだす。

その後から早奈が歩く。

「なあ？なんで従うの？」と早奈が弥譜音に近づいて静かに聞いた。

「こりゃ、真斗と快哉の仕業だ」と弥譜音は楽しそうにそう笑うと早奈は「真斗らしいや」といって納得したように大人しく弥譜音の後について行った。

楓に言われるままに段ボールの中を行くと目の前に二人の男が現れた。

一人はマントで体を隠しフードで顔を隠している。

もう一人は黒い短髪の男で片腕を首から吊るし残った片腕で松葉杖を持っている。

「快哉！！」と早奈はそう叫ぶと突然走りだした。

「早奈！！」と弥譜音がそう叫び走り出す。

「おい！！」と名刀の音がホールに響く。

キーンという剣の音が響く。

気がつけば早奈の間に弥譜音が入り込み早奈へと向けられている刀を間一髪で受け止めていた。フードの男が早奈に向かって刀を振り下ろしていた。

それを弥譜音が間一髪で受け止めたのだった。

早奈の頬に赤い線が一本入る。

名刀は刀を抜いて楓の持っていたダイナマイトを切り落とし、首に刃を向けていた。

海聖が名刀と弥譜音を補うように愛用の二丁拳銃を引き抜き、一つを快哉にもう一つを楓に向けていた

一瞬の沈黙が走った。

最初に動いたのは早奈だった早奈は自分の頬をさわり、手についた血を見ると静かに快哉の顔を見る。

そして、ニヤッと笑った。その瞳は赤く輝いていた。

そんな早奈の顔を見た弥譜音が叫ぶ。

「早奈から離れる！！」

早奈はジーパンの裏にあるポケットからナイフを2本取り出しニヤツと笑った。

「早奈！！やめろ！！」と名刀が早奈へと走り出す。

早奈は快哉の首にナイフを振り落とそうとしていた。

早奈は正気を失っていた。

このままだと銀色の燕と言われたほどの早奈のナイフ裁きでここにいる3人の命をたやすく取り去られてしまう。早奈はナイフの早さに関してはソナーパレカルの中でも名刀と同じくズバ抜けている。

早奈が快哉の首を切り裂こうとしたまさにその瞬間、突然、早奈の手からナイフが滑り落ちる。そして、早奈の体からも力が抜ける。

弥譜音はとっさに早奈の体を片手で受け止め、後ろを見る。そこには樹希翔が苦笑いをして立っていた。

「危なかったな」と樹希翔は弥譜音にそう言った。

「早奈は…」大丈夫なのか？と聞こうとする前に樹希翔が言う。「10分もすれば目覚めるさ。危うく本気出して殺してしまいそうだったがな」

「お前達がふざけるから悪いんだろ？」と名刀がそばに来て弥譜音から早奈を受け取り床に寝かせる。

海聖も拳銃を閉まって早奈のところへ駆け寄った。

「ごめんなさい」と楓が土下座を言う。

「ごめんじゃすまねえよ。なあ？真斗？」と名刀はフードの男を見る。

フードの男はフードとマントを静かに取り去る。

フードの中からは青い髪に赤い瞳の美少年が現れる。

「名刀。その早奈は本物か？」と彼はそう言った。

「はあ？本物だよ！！」と名刀は早奈の脈を測りながらそう返し樹希翔に尋ねた。

「おい、樹希翔。早奈の脈をどれだけ抑えた？」

「ほんの少しだよ？」と樹希翔はそれがどうしたの？と言いそうな顔で言い返す。

「早奈にとってはそれが命とりなんだよ！！」と名刀は怒鳴りつけた。

「お前、こいつがどんな状態か分かってないだろう？こいつはな！！」と樹希翔の襟を掴み名刀は大声を出した。

「名刀！！」と珍しく海聖が大声をあげて名刀を止めた。その言葉に弥譜音が「名刀！それ以上言ったら、早奈のプライドが傷つくよ。」と静かに言った。

「でもよ…」と名刀は弥譜音の顔を見る。

「気が治まらないなら殴るだけにしときなさい」と弥譜音は拳を握り締めて言った。

「はいよ」と名刀は樹希翔を殴り飛ばした。

殴られた樹希翔は床に転がり下を向いたまま黙り込む。

「真斗。早奈や俺達を本物かどうか試すなんてどういうことですか？」と弥譜音は真斗にそう聞いた。

「偽物が出たんだよ」と樹希翔が口にたまった血を吐きながらそう呟く。

「なるほど、それで快哉は怪我を……」

「ああ。それにそいつは俺がスパイってことも知ってた。」と快哉が重い口を開く。

「ってことは、幹部ですね。それは誰になりすましていたのですか？」と弥譜音。

快哉は早奈を指さす。

「早奈ですか？」と弥譜音はそう聞き返す。

「ああ。まるつきり早奈だった。でもなんかナイフ裁きはさつきよりは遅かった気がする」と快哉。

「本物の早奈のナイフ裁きはマネできねえよ」と名刀は早奈を見ながらそう呟き笑った。

「パルパックの者でしょうか？」と弥譜音は名刀を見る。

「どうだろうな？新種のウィルスかもな」と名刀。

「その可能性もありますね」と弥譜音は考えこむ。

「でもおかしいな……俺、今リーダーのいないスパイ組の変わりに敵陣に忍び込んでいるんだが、全然攻撃受けないぞ？」

「たしかに……おかしいですね。快哉は知っていて名刀を知らない？そんな人物いますかね？」と弥譜音。

「いるよ」と早奈が海聖の手を借りて起き上がりながら言う。

「大丈夫か？」と名刀が尋ねる。

「うん」と早奈は名刀に頷き樹希翔を睨む「樹希翔！！あとでタイマンね」

「上等！！」と樹希翔。

「天の使者なら快哉の顔を知っていて名刀の顔は知らないはずよ。」と早奈は立ち上がる。

「早奈！」と海聖が心配そうに早奈に声をかけたが早奈は海聖に大

丈夫と言うと立ち上がった。

「でも、それじゃ…」と弥譜音は早奈を見る。

「そう、それでも幹部に情報を漏らしている者がいるのには変わらない」

「なるほどね」と名刀。

「なにがなるほどなんだ？」と快哉が4人に尋ねる。

「そうか、快哉がどこに行くかは僕が会議で決まった内容を快哉だけにメールで送るからスパイ組から情報を漏れることはない。知っているのは…会議に出る幹部組だけっていうことか」と真斗。

「そういうこと。さすが！！真斗だね」と名刀はそう言っ慌てて早奈を見る。

早奈は名刀のその視線でなにを言いたいか感づくと思を振り、パルパックをイメージする。早奈の頭の中にホールの天井でひっそり早奈を見つめている男が一人浮かぶ。その人物の気配は早奈の会ったことのある男の気配だった。早奈はその男の正体を気配で思い出すと危害を加えたりしない仲介者ということを確認し安堵する。そして、もう一人このパルパックの中にいる人物に気づく、それは早奈の知らない気配だった。

その人物は早奈達の様子を段ボールの隅から息をひそめ聞いているようだった。

「おい！！お前何者だ？」という名刀の声で早奈は目を開けた。

名刀が段ボールの裏に身を隠している男を引きずりだす。

「お前、パルパックのものか？」と名刀が彼に刀を向けながらそう聞く。

早奈はその男を見てビククリした。

その男はあの時の警察官だった。なんでお前がここにいる！！と思ひながら早奈は自分の言った言葉を思い出した。「ねえ？パルパックって知っている？」早奈は確かその男にそう尋ねた。早奈は笑いそうになりながら言った。

「名刀。そいつはソーナーパレカルだ。私が快哉と真斗を探るように

呼んだ。」

彼はそうだというように何回も頷いた。

「そうなのか？」と名刀は刀を収める。

「たしか：E-12だったっけ？」と海聖。

「そうです」と関根は慌てて頷いた。

「ところで…」と名刀が早奈を見る。誰かいたか？と名刀は声を出さずに聞いた。

早奈は首を振る。

「大丈夫。ここには私たちだけだ」

その様子を弥譜音は黙って眺めていた。

「弥譜音。俺と快哉はいままで通り行方不明ということにしてくれ。そのほうが裏切りものの尻尾が掴みやすいだろ」と真斗。

「分かった。でも、真護だけには名刀を通して伝えておきます。」と弥譜音はそう返事を返す。

「なあ？楓も死んだってことにしたほうが良くねえ？」と名刀が言う。

「そうですね。快哉の体がその調子だと楓に死んでもらうと非常にいいですね」と弥譜音は笑う。

「賛成！！」と海聖は面白そうに声を上げた。

「じゃあ、殺すか」と名刀が刀を取り出す。

「えっ！？そんな冗談…」と楓。

「これが冗談に見えますか？」と弥譜音が真剣な顔で言う。

「ほんじゃあ、バイバイ」と名刀が楓の傍を走り抜ける。

うわあああああ！！と楓はお腹を抱えて倒れ込もうとし、自分の手をみて血が出てないことに気づく

「あれ？切られてない？」と楓はキョトンとした顔で名刀を見る。

「ぶっ」と名刀が笑いだし、その場にいたものの全てが笑いだす。

笑っていなかったのは楓と関根だけだった。

「本当に切るわけないだろ。バーカ」と名刀が楓の頭を叩き言った。

「でも、今のでお前は死んだこれからは人目に触れないように行動

しろ。お前は今、ここで死んだんだ」

「真斗。何か動きがあったらまた、俺に連絡してくれ。俺がこいつらにメールする。それでいいだろ？ 弥譜音、名刀、海聖、それに早奈」 樹希翔

「いいだろう」と弥譜音と名刀。

「おっけー」と海聖。

「分かった」と早奈。

「じゃあ、俺らは行くぜ」と快哉。

「ああ。」と名刀は返事を返し、「俺らも行こつぜ」と言う。

「さきに行ってくれ。私はこの新人と話がある」と早奈。

「分かった」と弥譜音と名刀はその場から去る。

『博士』

『博士』

ホールには関根と早奈だけになった。

「どうやってきたの？」と早奈は聞いた。

「あの2人に着いてきた」と関根は怯えながらいった。

「お兄さん私が助けなかったら殺されていたよ？名刀はだれよりも短気だからね」と早奈は淡々と語る。

「お…お前達はいったい何者なんだ？さっきも赤い目で…」と関根は怯えた表情でそう聞く。

「人間よ」と早奈はスラリと言うと関根を見る。

「ねえ？お兄さん」

「宿題の答え…わかった？」

「宿題？」

「私、お兄さんに出したじゃない？パルパックって知っている？って…」

「分かったからここいるのだろう？」

「…お兄さん何も分かってないよ」と早奈は首を降ろす

「パルパックは場所じゃない。組織名よ」

「組織名…」

「パルパックは12年前、この場所で人体実験とウイルス研究をしていた研究者やその他、周りの関係者からなる組織をパルパックと呼ぶのよ。」

「ここはパルパックって言う名前だろ？」

「ここはパルパックが使っていた施設だからパルパックと呼んでいいにすぎないの。」と早奈は積み重なっている段ボールに腰を降ろしながら言った。

「まあ、でもパルパックでここまで辿り着いただけで上出来ね。お兄さん私達が何者か教えてあげる」と早奈はニヤツと笑った。

「そのかわり、お兄さん助けてあげたのだからお返ししてよね」

「わ…分かった」

「お兄さん警察官なら人探しは得意よね？探して欲しい人がいるの。」

「それは誰なんだ？」という関根の言葉に早奈が答えるよりも早く誰かが「伊藤 風幸博士って言うつもりだろ？早奈」と尋ねた。

段ボールだらけで死角になって見えなかった場所から一人の男が現れる。

「弥譜音！」と早奈は驚く弥譜音と呼ばれた男は黒い短い髪にメガネをかけ、腰に銀色の短い棒を3本ぶらさげている。背は高くすりりとしている。

「話はほとんど聴かせてもらった」と彼は早奈の隣に座って言った。
「伊藤 風幸博士はウィルス研究の第一人者。」

「ワクチンも彼の発明だぜ？」とどこからか声がする。

弥譜音は驚いて早奈を見る。

早奈は私が言ったんじゃないと首を振り苦笑いをした。

「久しぶりだな！早奈に弥譜音」と彼は隠れていた天井から飛び降り、関根の隣に着地すると早奈と弥譜音に「よっ！」と左手を軽く上げて挨拶をする。

「その声、道霧^{みちきり}だな？」と弥譜音。

「ご名答。さすが、記憶力はいいな」と彼はそう言うのと深く被っていたフードを外し体を覆っていた黒いマントを取り去る。

フードの下からは赤い髪に赤い瞳に褐色の肌の青年が現れた。

青年は赤く長い髪を持っていたゴムで束ねながら二人を見る。

「いつからいた？」と弥譜音。

「そうだな」関根さんがここに着いたぐらいからいたかな？」と道霧は笑い関根に視線を移すと「こいつらの仲間の橋本 道霧です。どうぞ宜しく、関根 隆太郎さん」と彼は関根の手を握りながらそう言った。

「なぜ？僕の名を？」と関根。

「ずっと狙っていたからな。貴方は俺らの最後の望みなんだ」と道霧。

関根にはこの男の言っている意味が理解出来なかった。

「どういうことだ？」と関根は彼に尋ねた。

「早奈と貴方が接触したところからずっと追っていた。それに素性も全て調べさせてもらったよ」と道霧はそう言って笑った。

この男何者だ？と関根をみた。

道霧は関根がそう思っているのを察したらしく笑った。

「俺はただの人間だぜ？」

「関根：。って言うんだお兄さん」と早奈はそう溢すと関根に写真を渡した。

「これが博士の写真だ。」

そこには白衣を着た黒い髪メガネの男が金髪に青い瞳の可愛い男の子と手を繋いでいた。二人とも楽しそうに笑っている。

「この白衣の人物をさがしてほしいの」と早奈は関根にそう言った。「なんで、俺にそれを頼むんだ？人探しなら他の奴でもできるだろ？」と関根は写真を受け取りながら言った。

「博士は貴方にしかみつけれられない」と早奈は関根に紙切れを渡した。

「博士を見つけたらここへ連絡頂戴」

関根は早奈から受取った紙を開いた。そこにはメールアドレスがつづられていた。

「私のメールアドレスだ」と早奈。その言葉に弥譜音が「早奈！！」と声を上げた。

早奈は分かっているように頷いて言った。「黙っている。弥譜音」

弥譜音は決心したような顔をしている早奈を黙って見守っていた。

「私は保坂 早奈。よろしく」と早奈は関根に遅い自己紹介をした。「これが私の正体」と彼女は関根に悪戯そうな顔をして来た道を戻っていた。

弥譜音と道霧もそれに続いた。

「じゃあねー関根！！また会おうね」と早奈は関根に楽しそうに手を振った。

一人残された関根は早奈から渡された写真と紙切れを長くながめていた。

地下室から上に上る階段を上りながら弥譜音が言った。

「なんで、あいつにメールアドレスを渡した？」

「いいじゃん。減るものじゃないし…それに連絡取れた方がいいでしょ？」と早奈は笑った。

「それはそうだけど…メールアドレスまで教える必要ないだろう？」と道霧までもがそう言った。

「メールは罠にハマる可能性があります」と弥譜音。

「そのときは弥譜音と海聖と名刀が助けしてくれるだろう？」と早奈はニヤッと笑って弥譜音を見た。

「それはそうですけど…」と弥譜音はなにも言えずに押し黙る。

「それより関根。喰いつくかな？」と早奈はのんびりと言った。

「喰いつくだろ？あいつが喰いつかないはずがない」と道霧は自信があるように言い切った。

『優梨』

『優梨』

重く硬い扉が開かれた。

いつもより早く学校が終わった早奈は弥譜音と海聖と名刀が住む家にいた。誰かいるかな？と思ってインターホーンを押すと眠そうな弥譜音の声がドアの向こうからしてドアが開かれる。

「はい」と頭を掻きながら出てきた弥譜音は半そでに短パンという秋には似つかない格好をしていた。

「早奈！」と彼は少しビックリした顔をしてから優しく言った。「学校帰りかな？紅茶でも飲んでいく？」

「うん」と早奈は部屋に入った。

さすが高級マンションのだけあって早奈の部屋とは比べ物にならないほど広い。

早奈はリビングにあるソファーに座り込んだ。

「やっぱ、いつみてもひろいね」と早奈がそう言つと弥譜音は紅茶をいれながら言った。

「早奈。いつでも引越してきていいんだよ。一つ部屋が空いているからね」

「あれ？名刀はいないの？」と早奈は話しを変えるように言った。

「名刀なら優梨の様子を見に言ったよ」と弥譜音が言い終わるか終らないうちにカチツとドアのロックが外される音がして大きなカバンを持った。金髪の美青年が部屋に入ってきた。

「あんれ？早奈。来てたんだ」と彼はそう言つと自分の部屋にバツクを置いて、手を洗い早奈の横に座った。

「今日は調子が良いみたいだね」と海聖は早奈の顔を覗きながら言った。

「今日はいいいみたい」と早奈が返すと海聖は「そう……」といつていつも通りふわりと笑った。

「ところで、名刀は？」と海聖も弥譜音にそう聞いた。
弥譜音は紅茶を早奈の前に出しながら「優梨を見に行ったよ」と彼に返した。

「何か、もう退院してもいいとか言ってたね」と海聖は弥譜音にそう返す。

「ええ、なんでも容体は落ち着いたと言っていましたか…」と弥譜音は海聖の分の紅茶をコップにつきながらそう言った。

「優梨どうだった？」と早奈は名刀に尋ねた。

名刀は暗い顔で黙ったまま小さく「死んだ」と呟いた。

「えっ？」と早奈が聞き返す。

「午後3時45分息を引き取った」と名刀は静かに言った。

その言葉に早奈は動揺しながら彼に聞いた。

「なんで、退院出来そうだったんじゃないの？」

「俺もそう思ってたよ」と名刀は悔しそうな顔でそう溢す。

「脳炎か？」と海聖が聞いた「ああ、なんでだ？俺の治療は完璧だったはずだ…」と名刀は頭を抱えながらソファに沈んだ。

「容態が悪化したからよ…」と名刀が二人に彼女の起こした症状や使った薬剤をことこまかに説明しているのをなんとなく感じながら早奈の世界はあまりのショックの大きさに真っ白だった。

優梨が…優梨が…死んだ？

優梨は黒髪に緑色の瞳を持った女の子だった。早奈とは2つほど年上で可愛いらしい笑顔が印象的だった。

早奈が困っているいつも手を貸してくれた。

早奈の目から一筋の涙が溢れ落ちた。

それが一本から二本になりやがて大粒の涙が落ちていった。手で掬いあげても次から次へと溢れ落ちていく。

「早奈…。」と名刀が心配そうな顔で覗いてくる。

早奈は名刀に「大丈夫」と笑顔を作った。

「早奈。大丈夫そうな顔してないよ」と名刀の隣海聖はそう言う
と早奈の前に座り早奈の顔を見上げるようにして早奈の涙を掬いあ

げる。

早奈は我慢出来ずに海聖に抱きついて大声で泣いた。

「海聖。優梨が…」と泣き叫ぶ早奈を海聖は抱きしめ背中を擦ってくれた。

なによりもあんなに優しい優梨がもうこの世にいない…優しい優梨の笑顔がもう

見られない。

それが悲しくて…涙が出る限り泣きつくした。

やがて、泣くだけ泣いて落ち着いたところに名刀が静かに声をかけた。

「あの子…早奈。こんな時にこんな話をするのもなんだが…」と名刀は複雑そうな顔をして言った。

「すぐに病理解剖をして貰ったんだ…まあ、普通の人には分からないことなんだが…」と名刀は小さな声で言った。

「優梨は…殺された可能性が高い。」と名刀はタバコに火をつける。「不可解なんだよ。元々、脳や髄液の中にいる慢性のウイルスに感染している優梨が脳炎で死にいたるなんてさ、脳炎で死ぬならもっと前に死んでいるはずなんだ。考えられるのはひとつ」と名刀は口からタバコの煙を吐き出した。

「優梨は誰かに殺された？」と涙を拭いた早奈が呟いた。

「その可能性は高い」と名刀は煙草を灰皿に置く。「誰かが優梨の体に優梨の持っていたのとは違うウイルスを入れた。それによって彼女は脳炎を起こし、死に至った。」

「なあ？なんでそう言い切れるのですか？彼女の免疫力がさがって彼女の中のウイルスが活動し始めたと考えられる…」弥譜音のその言葉を名刀は真っ向から否定した。

「それはないな。なぜなら…」と名刀は3人の前にポケットから透明なビニール袋を取り出し、テーブルに置いた。

「病理解剖の際、彼女の体に真新しい手術痕を見つけたので開いて

みたらこれが埋まっていた。奴らも手の込んだことをしやがる」と名刀は怒りを露わにしながら3人の目の前にそれを出した。

それは優梨の血に塗れ赤く染まった5センチ四方ぐらいのきつねのぬいぐるみだった。きつねの右頬にはソナーパレカルの紋章が大きく刺繍されている。

「流穩るおんだな」と海聖。

「おそらく…」と名刀は目を伏せた。

「流穩るおんとは誰だ？」と早奈は尋ねた。

「僕達と一緒にパルパックで半年間知能選抜を受けた後、僕たちと一緒にパルパックでウイルス研究をした者の一人だ。」と海聖がたばこに火をつけながら言う。

「パルパック崩壊後は行方不明だが、おそらく天の使徒にいる」と弥譜音は紅茶を飲みながら言った。

「流穩るおんは自分達の力以外のものはいらないという思考だからな。真し良んらと意見が一致してもおかしくはない」と名刀はきつねのぬいぐるみを握りしめた。

「おそらく、優梨の体にウイルスを入れる時に一度、麻酔で彼女を眠らして脊髄からウイルスを注入した後、これを埋め込んだんだろうね、惨いよ…可哀想に…」と海聖が目をそらした。

「天の使徒…。優梨の死を無駄にしない！あいつら絶対に許さない！！」と早奈は手を握りしめた。

『ルオン』

PCに浮かぶ点滅した黒い文字を眺めながら彼はそばにある角砂糖を5〜6個掴み口

に放りこんだ。

ガリガリと派手にそれを噛み砕きながらPCに表示された黒い文字の上にある色とりどりの図形に目を凝らす。

「あー、やっぱわかんねー」と彼は大声を発して漆黒の様な黒い髪頭を掻きむしった。

「俺が分からないのに、てめえが分かるはずねえだろ？」とそんな彼に青い髪の少年が彼の肩に手を置いて声をかけた。

「いや、出来るかもしれないだろう？」と彼はそう返した。

「君には無理だね。」と青い髪の少年は鼻で笑うと続けた。「これは博士にしか解けないようになってるのさ」と青い髪の少年はあきらめろという様に彼の肩をばんぽんと叩いた。

「ところでルオン、あれの始末は出来たのか？」と黒髪の青年は彼にそう尋ねた。

ルオンという青い髪の少年は無表情で「ああ。あれね、簡単だった」と言った。

「彼女も馬鹿だね。彼らの本拠地を教えなければ楽に死ねたのにねえ？」とルオンは面白いおもちゃで遊び終えた子供のような顔で言った。

「例の奴を使ったのか？」と彼はPCをもう一度見つめながら恐る恐る聞き返した。

「まあね。」

「ほどほどにしておけよ。例のやつは現存する残りが少ないからな」

「大丈夫、大丈夫」とルオンは笑った。

「まあ。これであのバカ組織も少しは本気になるだろうね」と黒髪の青年はPCの電源を落として伸びをした。

「やめた、やめた。ルオンの頭で無理なもの俺が解けるはずがねえ」
「そりゃそうだ。俺とお前じゃ、遺伝子の配列が元々違うんだよ」
とルオンはニヤリと笑った。ルオンという少年の瞳は青い静かな色の頭とは違い、まるで地に落ちた血のように暗褐色に光っていた。

『対談』

赤い光が点滅している。

その横で舞台の上にいるスーツ姿の男が赤い光が点滅したマイクに向かつて大声を発していた。

「なぜ、12型が逃げたのだ！ 守備は完璧と言ってなかったか？」と灰色の防音壁に囲まれた部屋の中に声が響き渡る。

「それは奴らが…」と舞台の下でそれを聞いている男がもごもごと言った。

「そんな言い訳聞いていない、早く、伝播主を生きたまま連れてこい。何型でも良い。後は抵抗したら殺しても構わぬ！」と彼の声は壁を揺らした。

「このまま奴らを野放しにしておいたらいつ政府とのことがバレるのか分からぬ。早くしろ！」と舞台の上の男は声をいつそう張り上げた。

そこへ一人の男が駆けこんで来た。

「社長、田中首相がいらっしゃいました」

舞台の上の男の顔がみるみるうちに青ざめた顔に変わる。

「い、いいな！ さ、最低でもソナーパレカルに逃亡した検体S-4をここへ連れて来い！」と彼は弱々しそう怒鳴ると舞台を降りた。

「中川君」と国のトップ田中首相は黒い革でできたソファーにどっぷり腰を埋めながら彼を見下すように目の前に小さく座る頭のとっぺんが禿げた中年の小太り男に声をかけた。

「どういうことかね？ 僕は確か君に伝播主を全て捕らえよと言ったはずだが？」

「それがですね…普通の人間である我々が奴らを止めるのは無理があります…捕まえに送りこんだ精鋭部隊が全て抹殺されてしまひまして…」と中川という男はぼそぼそと言ひ返した。

「感染者達が感染しているウイルスより攻撃力が上回るウイルスを作り検体を生み出せばいいんじゃない？」と田中は椅子の肘かけに手をつきながら言った。

「いや…そのためにはですね、伊藤 風幸博士が最初に作り上げたウイルスの伝播主と最後のウイルスの伝播主が必要です」と彼は流れ出る汗をハンカチで拭きながら言った。

「うん？君、一人だけ彼らより強い能力を持った少年がいなかったかね？」と彼は首を傾げる。

「カイキのことですか？しかし、彼でもソナーパレカルトップにいる。真護を倒すことは不可能です」

「真護？あの…真雅のクローンで一番出来そこないの真護かね？」

「は、はい。彼の遺伝子は出来そこないですが、事故によって彼の中に埋め込まれた超能力を生み出す遺伝子は誰よりも強力な力をもっています。カイキの超能力遺伝子も元を辿れば真護のものです」

「しかし、彼はあの時でかなりの遺伝病を発生していたらう？もう死んでいるのではないのかね？」

「彼の周りにはE-5、F-6 型ウイルスを持ったもの達が守っています。」

「伊藤 風幸博士と一緒にウイルス研究をしたあの天才達かね」

「はい。彼らの手は一流です。さすがウイルスで知能を上げただけがあります。彼らの傍にいれば真護は生かされている可能性は非常に高い」

「真護が生きているね…」と田中は少し考えて何か企んだように笑うと彼に目を映した。

「まあ、良い。どっちにしてもさつさと伝播主を見つけれ！！これが社会に出るのは非常にマズイ。少しの無茶はこっちで圧力をかけてもみ消すことは出来るがそう長くはもたぬぞ、タイムリミットは近付いている。急いで現存するHKW-gtkウイルスの伝播主である8人の検体をここに連れてくるんだ！！」

「はい」と中川は震える声で返事をした。

『対談』（後書き）

正直、ここまで読んでくれている人いるのかな？と思いながら書いております。

ちよつとここから先は長い文章になるので俺は1か月に1話載せられるか？どうかというところです。俺も天海同様毎日の様にレポートに追われている身なのでここからのくらのペースで載せていけるか、分かっておりませんが天海と共にがんばりますので今後ともよろしく願います。

前の話で海聖と弥譜音がごちゃまぜになっていたので訂正しておきました。

金髪が海聖で弥譜音が黒髪の青年です。皆様を混乱させてすいませんでした。

by 成田 慎也

『黒イ』

- 爆破テロ(1) -

関根は警部からもらった鍵で東京駅にあるロッカーから取り出した資料を眺めていた。

その黒いファイルにはパレカルが起こした事件の被害者のことが鮮明に書かれていた。

黒井 達夫 40歳。 国家公務員。

軽動脈を切られたことによる失血死。

依田 隆 39歳。 国家公務員

全身を刺されたことによるショック死。

金田 純 20歳。 無職。

毒針を刺されたことによるアナフィラキシーショック。

と被害者の名前や死亡原因も簡単に記されていた。 もちろん被害者の写真も残っている。

関根はそれらを見ながら首をかしげた。

国家公務員がやけに目につく。 それに失血死、ショック死という文字列が多く並んでいる。

殺人は絞首が一番多いと思ってきた関根の考えが全てひっくり返された。 ソナーパレカルの殺人はどれも被害者を苦しめているように思えた。

中には体が分離している被害者いた。 関根はあの早奈という少女のそばにいた赤髪の男を思い出した。 彼の手には確かに日本刀が握られていた。

そう、彼は関根の前で仲間を切るふりをして見せたのだ。 異常な光景だと関根は思ったが彼らは笑っていた。 あの場合で笑える彼らが恐ろしかった。

これはあの男の仕業だな。 と関根は思いながら、写真に変に違和感

がして全ての被害者の写真を何回も見た。そして、その違和感に気づくと関根は彼女の言葉を思い出した。

「パルパックは建物じゃなくて組織よ？」と早奈という女の子はそう呟いていた。黒いファイルに閉じられた被害者達の鎖骨には漆黒の闇を優雅に飛び回っていきそうなリアルな黒い蝶の刺青が彫られていた。

そして、彼らの所持品を取った写真には黒い携帯が映っている。彼女が言っていた組織……。パルパックとは彼らのことなのだろう。

人体実験とウイルス研究をしていた研究者やその他、周りの関係者からなる組織をパルパックという。じゃあ、彼らは俺に探せと言ったウイルス研究の第一人者。伊藤 風幸博士はパルパックの指揮を取っていた人物？とすると博士を見つけたら彼らパレカルは博士を殺す気なのか？ありえなくはない。しかし、関根は伊藤 風幸博士の名前を言う時に早奈が一瞬だけ見せた嬉しそうな顔が忘れられなかった。あの顔は博士を憎んでいる顔には見えない。ならパルパックを彼らは恨んでない？ってことはこの黒い蝶の刺青を持った組織はパルパックではない？なんか全ての謎がスタート地点に戻った気がして関根はため息をついて、彼女がくれた博士の写真を眺めた。

「あれ？この顔どつかで見た気がする……」と関根はまた首をかしげ写真に写っている白衣の男を見つめた。

そんなことを考えていると携帯が鳴った。

関根は慌てて携帯に出た。

「はい！関根です」

電話の向こうで男が喋っている。

「本当ですか？」と関根は大声を上げ「今からそちらに向かいます」と返事をする。携帯を切りファイルを持って大泉公園にあるカフェをかけ足で出て行った。

彼はデスクの上にある写真を眺めていた。その写真には一人の小さな女の子が映っていた。今、この子は25歳になっているはずだ。

14歳に失踪して以来、彼女とは会ったことがない。今、どこでなにをしているのか？それさえ分からない。

「警部！！携帯の解析が終わったって聞いて」とドアが突然開かれて彼は慌てて写真を引きだしの中に入れた。

「おう。早かったね」と警部は声を漏らした。

「ええ。走ってきたんで」と関根は息をつきながら言った。

「携帯の損傷が激しくてほとんどの情報は破損していたのだから」と警部は関根に一枚の紙を渡した。

「最後に被害者と電話をした人物だけ割り出せたえ？」と警部。関根は渡された紙を睨んだ。

そこには聞いたことのある名前が浮かんでいた。

「被害者は保坂 早奈という大学生と午前2時に最後に会話をしている」と警部は言った。

「保坂 早奈！！」と関根は声を上げた。

「どうした？知り合いか？」

「いいえ。知りません」と関根はとっさにそう嘘をついた。

「そうか。まあ、そこに彼女のことを載せておいた。どうも彼女はあの医療技術で有名な帝東大学の医療学部臨床検査技師学科に在中しているらしい話を聞いてみたらどうかえ？」と警部はそう言った。「はい」と関根は返事を返ししながら早奈からもらったアドレスを思い出していた。

「そういえば…被害者の身元は分かったのですか？」と関根はそう尋ねた。

「被害者の身元かえ？判明出来なかった。解剖に回す前に上から捜査中止の申し出がきてな」と警部は残念そうに言った。

「そうですか…」

警部にお礼を言つての部屋から出た関根は早速、早奈から貰った。

アドレスにメールを送った。「話しがある。時間ありますか？」

早奈から返って来た返事は「時間ない。博士のこと以外話すことはない」という返事だった。

『黒イ』（後書き）

長く滞っていてすみません。

レポートが一通り終わったので一気にアップしておきましたあ！！

「継続は力なり！！」

誤字脱字多いかもです。

これからもどうぞよろしくお願いします。

b y , 天海聖哉&成田慎也

『爆八』

(2)

それは次の日の朝10時のことだった。

関根は早奈に会おうと帝東大学に行こうと池袋を歩いていた。

池袋駅は平日の昼間だというのに人通りが多くて人とぶつかった。

「すいません」と関根はぶつかった人に謝ったその瞬間、彼の鎖骨から黒い蝶が見えた。

関根は一瞬のことに立ち止まり後ろを見た。

「お兄さん！」と誰かの叫び声がして関根の体は床にうつ向けに転がるその上から誰かが覆いかぶさってきたと気付いたと思った途端黒い蝶を持った人物が歩いていった方向から爆発音がした。激しい爆風が人々をまるで紙切れのように吹っ飛ばした。

爆風が止むと上から声がした。

「危なかったな」体を起こすとそこには嫌そうな顔をした赤い瞳に赤い髪が特徴的な男が膝をついていた。

「間一髪だね？」と金髪の青年が彼にそう尋ねた。

「皆。怪我不い？」と黒髪の男がそう尋ねた。

「お兄さん。怪我不いか？」とあのパレカルの女の子が彼に声をかけた。

「ああ……」と関根は呟いた。

やがて、鳴き声や悲鳴が駅を覆って行った。

「早奈。俺らちょっと人助けしてくるな」と名刀はそう断り弥譜音と海聖と共に走っていった。

「お前らがやったのか……」と関根は震えながら声を出す。

「だったらどうする？」と早奈は笑った。

「許さない」と関根は声を絞りだした。

「早奈！武！手が足りない。手伝え！」と名刀の声がした。

「今、行くー」と早奈はどこにいるか分からない名刀に向かって大

声を発した。

「お兄さん。もし、私が犯人だったらあのバカ3人が人を助けているのって変に思わない？」と彼女はそう言つと戦場とかしている現場へ走つて行つた。

爆心地近くはまるで地獄とかしていた。

『生シ』

(3)

鳴き声があちこちからする。倒れて血を流してるい人が多すぎて混乱していた。

早奈は途中で名刀の指示に従っていた。

一人の男が足元で言った。

「あの子を助けてくれ」

男のゆび指す方向には女の子が転がっていた。その子はかるうじで息をしている状態だった。

「名刀。この子を見てやって!!」と早奈は名刀に言った。名刀は駆けつけてきて女の子を見ると言った。

冷たく言い放った「こいつはだめだ。早奈、あきらめろ」

「でも、まだ息をしている。助かるよ」と早奈。

「いや、じきに止まる」と名刀は溢した。

「助けてよ」

「無理だ」

「なんで? いつもなら助けるんでしょ?」

「いつもならな」と名刀はそう呟いた。

「名刀は生きている人を見捨てるの?」と早奈は目に涙を溜めながら言った。

バチンと名刀は早奈を殴った。

早奈の口から血が出る

「お前、これが現実だ!! 見たくないなら邪魔だ! 手伝わないういから外で終わるまでまっっている!!」

それを見ていた弥譜音が駆けつけてくる。

「名刀!! そんなことしている場合じゃないでしょ」ふんと名刀は治療に戻った。

早奈は床に尻持ちをついたまま殴られた頬を押さえていた。

弥譜音が早奈の頬をみる。「あーあ。こりや口の中切れているね。あとで縫ってあげるから、俺の手伝いしてくれる？」

「その前にあの子助けてよ」と早奈は言った。

弥譜音は首を振った。

「早奈。こういう災害の時は命の選別をしないと出来ない。出来るだけたくさんの人を助けるためには怪我が軽い人から助けるのが一番早いんだ。分かる？要するに治療しても助かると思われる人からね。あの子はもう虫の息で意識もない助かる見込みは薄い」と弥譜音。

「弥譜音もパルパックと同じように命の選別をするの？」と早奈は尋ねた。

「そうだね。医者なんてそんなもんだよ。」と弥譜音は暗い顔をした。

「早奈。俺だってできるなら全員助けたいよ？死んだ人だって助けられるなら…でも、出来ないそんな時間はないしリミットは限られているそれなら俺は出来るだけ多くの人を助けたいと思う。一人を助けようと時間を割くならたくさん救った方が良く…分かる？」

早奈は頷いた。弥譜音が言っていることは最もだった。今の状況で助けられる人には限界がある一人の人を犠牲にして100人助かるならそれの方が良いに決まっている。

「ごめんなさい。私、なにも考えてなかった」と早奈。

「分かればいいんだよ。」と弥譜音は早奈の頭を撫でると言った。

「すこし時間を無駄にしたね。取り返さないとね。」と弥譜音は早奈を立ち下からせると手伝うように促した。

(4)

だいたいの負傷者を捌き終わると5人は駅の傍にある椅子に座りこんだ。

他にも偶然通りかかった看護婦やら医者やら薬剤師などの医療関係者が10人ほど負傷者にあたっていたが負傷者はかなり多かった。今は爆心地近くで警察が遺体を回収していた。駅は爆発された時に閉鎖され今は治療にあたっていた関係者や警察官のみがいるだけで駅だというのにがらーんとしている。

早奈は動きすぎてガンガンしている頭を抑え椅子に座っていた。現場で動いている時はなにも感じなかったが落ち着くと疲労で体が重くダルくて気持ち悪いと思った瞬間、下を向いたままその場に嘔吐をした。

「うわっ！ー！ちょっと早奈！ー！」とそばにいた海聖が駆け寄ってくる。

「おい！！」と駅のイスに足を上げていた名刀も慌てて駆け寄ってきた。

海聖は早奈の背中を撫でてくれた。

名刀は早奈の右手で取り脈を測ると早奈の額に手をあてる。

そして、眉をひそめ早奈を見た。

「早奈……。泣いているのか？」

「へっ？」

名刀にそう言われて早奈は初めて自分が涙を流していることに気づいた眼から涙が溢れていく。

「名刀……。たくさん人が死んだ……。死んだ人はどこに行くんだ？」と

早奈はそう聞いていた。

名刀は海聖と顔を見合わせ何も言えずにいた。

早奈の心はあの爆発事故で折れてしまったようだ。

「早奈。死んだ人は空から早奈を見ているんだよ？」とどこかへ行っていた弥譜音がそう言いながら椅子の上で疲れてしまった武に毛布をかけながらそう言っていると早奈の前にボロボロのぬいぐるみを見せた。

ソナーパレカルの紋章が刺繍されたきつねのぬいぐるみだ。

「それ…どこにあったんだ？」と早奈はぬいぐるみを睨みながら彼に聞いた。

「爆心地を見下ろすように所々に置かれていた」と弥譜音。

「天の使徒だな？」と早奈。

「おそらく…」と弥譜音は早奈にぬいぐるみを渡す。

早奈はそのぬいぐるみを受け取り両手で愛おしいそうに抱きしめた。「そのぬいぐるみを抱きながら何人の子が天に召されたんだろうな？」と名刀がぬいぐるみを触りながら微笑む。

「死んでいく子の心のよりどころはここで看取る子達の心のよりどころもここだったな」と静かに海聖が呟く。

「弥譜音…。これ…死の紋章だけ？」と早奈は彼に尋ねた。

「うん。レッドフォックスのみ」と弥譜音は険しい顔でそう語った。

早奈は小さく「最悪」と呟いた。

「これは天の使徒の宣戦布告だな」と名刀。

「吐いている場合じゃないね、奴らを止めることが出来るのは私たちしかないんだよね」と早奈がきつねのぬいぐるみを抱きしめて言った。その早奈の瞳はさっきまでの瞳とは違っていた。自分がやらないとならないという芯の強い力が瞳に宿っていた。

この瞳が早奈の強さなのだろう。彼女はもし味方が全滅した戦場にいてもこの芯の強い瞳と生きようとする気力だけで敵に向かっていくだろう。血へどを吐いても絶対に倒れることはないのだろうと名刀はそう思いながらなんだかそれが嬉しくて「そうだな」と早奈の頭を撫でた。

早奈は名刀に頷くと立ち上がった。

椅子の向こうのロッカーの横から関根がこちらに来るのが見えたか

らだ。早奈は寝ている武の前に回った。寝ている武を起こさないためだ。

関根は怒りに満ちた顔でこちらに向かってくる。早奈はぬいぐるみを武の上に静かに置くと関根を睨みつけた。

関根は早奈の前に立つと白い紙を見せて言った。

「保坂 早奈この事件に対する事情を聞きたい動向願おう」

早奈は意味も分からず頭を捻った。

「お兄さん…良く許可とれたね」と早奈は少し呆れながらそう言った。

「おい！！お前。早奈は今疲れている。今連れていったりしたら…」と名刀が関根に怒鳴る。

「名刀。いいよ。すぐ戻ってくるから」と早奈は名刀に笑って関根について行った。

『護ル』

(5)

灰色のコンクリートに囲まれた部屋、パルパツクにいた時の部屋と変わらないなーと思いながら早奈は案内された小さな机に備え付けられた椅子に座りこむ。ヤバい頭痛い…薬飲むの忘れていた、名刀に薬貰うんだった。目の前が暗いな…視界が狭くなってきたなーと感じながら早奈は机に肘をつく。これ立って帰れるかな?とか、あつ!!貧血始まってきたと早奈はそんなことを考えながら関根の質問に答えていた。

「あの爆発事故を起こしたのはおまえらだろ?」

「だから!!違うつて言っているじゃん」と早奈は暇だと欠伸を噛み殺しながら言った。

「じゃあ、なぜこのぬいぐるみがあつた?」と関根は早奈の前にあのかつねのぬいぐるみを取り出す。「これはお前たちの組織の物だろ?」

「違う」と早奈は首を振る。「それは私達の組織の者ではない」

「しかし、ここにソナーパレカルつて…」と関根はきつねのぬいぐるみにある刺繍を指さす。

「お兄さんだけに教えてあげるから盗聴しているなら切つて」と早奈は腕を組んだ。

「いいだろう」と関根は外にいる者にも聞こえるマイクを切った。

早奈はそれを確認して口を開いた。

「パレカルは暗殺者の集団って言われるけど、ほとんどは正当防衛。パルパツク

が私達を殺そうとするから殺してきた。事実、私達の組織はきつねぬいぐるみな

ど置いたりしない。」

「そんなワケないだろう?きつねのぬいぐるみにはソナーパレカル

って書かれて

いるんだぞ」

「お兄さん。ソナーパレカルの意味知っている？」

「暗殺集団だろ？」

早奈は頭を振る。

「分かってないよ、ソナーパレカルはSonnerPerroAggressivoRomperEstableChildAggressorに冷静の頭文字Rと嘘つきのUで、SonnerPARECARUなのよ。単語を適当に並べただけだから分かり憎いけど（安定した侵略者を壊すために冷静で嘘つきな子供が攻撃的な犬のように音を立てる）という意味よ。侵略者とはこの国を収める日本政府のこと。子供とは若者のこと。音を立てるとは革命のこととすれば攻撃とは戦争のこと。野生の犬は集団内で動く集団以外は敵だと考える。だから、ソナーパレカルの意味は反政府の若者達が立ち上がりこの国全ての人を抹殺するという意味。」と早奈はそこまで言って突然何かを察したように席を立った。

「お兄さん。机の下に隠れて！！早く！」と早奈が言ったのと同時にドアの外からうめき声や悲鳴。銃が連射する音が聞こえてきた。
「早奈！！奴らか！」とどこからかマントを着た男が地上に降りる。
「ああ、道霧。奴らだ」と早奈がどこからかナイフ取り出しぐるぐる回し両手に収める。

「関根！俺の後ろにいろ！」とマントを脱ぎ棄て赤い長い髪を結びながら男が言った。それはパルパックにいた道霧という男だった。彼は背中に背負っていた黒い布の中から大きな銃を取り出す。彼は関根を部屋の端に追いやりその銃を構えてドアを見た。早奈は彼の隣でナイフを構えていた。

「関根！！銃持っているなら構えておけよ」と早奈が緊迫した空気の中でそう言った。

ドアの外では未だ悲鳴が聞こえている。やがて悲鳴が止み、ドアノブがゆっくり回された。

ドアが開いたのと同時に早奈が入ってきた6人の黒服の男達の動脈を切り裂く。その姿は関根の目には銀色の燕としか見えなかった。燕が男の周りを飛び、やがて彼らから大量の血が飛び散るそれらは宙を舞い関根の顔にまでかかった。

しかし、奴らを切り裂いた張本人の早奈は返り血を一つも浴びていない。

彼らを倒した後、早奈はドアの後ろに身を隠す。

ドアから銃を持って入ってこようとする男達を道霧が一発の銃弾次々と仕留めて行く。

目の前にいた男が3人脳漿をぶちまけて床に落ちていく、すぐに真っ白だった床は赤い湖と化して行った。その映像は現実とは思えなかった。いや、日本だとは思わなかった。

「お兄さん。絶対、守るからね」と早奈がそこで血を吐きながら言った。

「早奈。お前薬を…」と道霧が次々と湧いてくる黒い男達を仕留めながら少し余裕を持ってそう聞いた。

「ああ。飲むの忘れた。でも、大丈夫」と早奈は血を左手で拭きながら言う。

「お前が大丈夫って言うなら平気なんだろうな」と道霧は少し笑うと「早奈。道を開いてくれねえと入口が死体で埋まる」と言った。

「どんだけいるんだよ！パルパックの手下どもはよ！！」と早奈はナイフを白いナイフに持ちかえた。

「関根、なにがあっても道霧の後ろを離れるな。死にたくないだろ？」と早奈は関根を睨んだ。関根はなににも言えずにこくんこくんと震えながら頷いた。

「絶対を守るから安心しろ！！」と早奈は関根に明るい幼い笑顔を見せると道霧に言った。「合図をくれ出る。護衛頼むぜ？」

道霧はドアに来る黒いしっこいゴキブリに弾丸を食わせながら叫んだ「今だ！！早奈」その声に早奈がドアを出る。

早奈のあとに道霧が続いた。関根はその後に外に出た。

そして、廊下の光景に眩暈を覚えた。そこには現実とは思えない光景が広がっていた。

前にいる早奈が襲いかかってくるゴキブリを切り裂き床に落として行く。道霧が遠くで銃を連射するスナイパーを次々と床にねじ伏せていくのだ。

赤い物がまるで絵の具のように散っていくもう現実とは思えない…なにが起きているのか分からない。それでも関根は道霧の後を着いて行った。

しかし、床の血に足を滑らし転んだ。床は絵の具のような液で滑りやすかった。右腕から転び腕を強打した。起き上がった瞬間に目の前に濁ったビー玉が詰まった人の顔が赤い中に浮いていた。脳天に一発銃弾痕があったどろつとした感触がして、自分の両手を見た。頭に詰まってなければならぬ物が手の中で蠢いていた。

遺体を見なれている関根でもその光景には耐えられず

うわあああつ!!!

彼は悲鳴を上げたその声もう自分のものかも分からなかった。

その声に道霧は後ろを見た。その瞬間、早奈の右腕に銃弾が喰い込む。

くっ…と彼女は唇を噛みしめ目の前の敵を切り裂いた。

「関根!!!」と後ろで道霧が声を上げる。床に転がっていた男が悲鳴を上げている関根に最後の力を振りしぼって銃口を向けていた。

関根はそれに気づいていない。道霧は男に銃口を向けようとした。道霧が叫んだのを後ろで聞いていた早奈は一瞬で関根がピンチだということを理解したと同時に道霧の援護は来ない殺られるということを理解した。左足に散弾銃を食らったのだ。骨が碎ける感触があった。

体を支えられず前に倒れるところに敵の太刀が見えていた。しかし左手のナイフがそれより1コマ遅い。ダランとした右腕は狙撃手達の餌食のように何発もの銃弾が通り抜けて行く。全てがスローモーションに見えた。

人が死ぬ時は全てがスローに見えるというのは本当なんだなと早奈は死にそうなのにも関わらずそんなくだらないことを思った。

『危キ』

(6)

キーンという音が2つたぶって聞こえた。

早奈は床の上に落ちながらその音を聞いた。

道霧は自分のすぐ後ろでその音を聞いた。

早奈を殺そうとしていた男が床に倒れていき、早奈は不思議に思つて床から体を上げて自分の前に立つ男を見上げた。

「間にあつた！」とその人物はニヤつと早奈に笑顔を向けた。そこには赤い髪の方が立っていた。

早奈は自分の前に落ちている黒い服の男の死体を見つめた。それは綺麗に真つ二つに切り裂かれていた。その切り口には焼かれたような焦げた跡がある。

「名刀……」と早奈は力なく呟いて座り込んだ。

早奈の後ろで道霧が「弥譜音……」と呟く。

黒髪の弥譜音は道霧の死角から道霧の首に剣を向けて来た男に大きな銀の針を指していた。

道霧の頬にうつすらナイフの傷がつく。

「注意力散漫ですね？道霧。」と弥譜音が彼に笑いかけた。

関根に向けられていた銃口は床に転がっている。

銃口を向けていた男の上には真良輝が乗っていた。「関根は殺すわけにはいかないの。ごめんね」と真良輝は遺体の上に乗ったまま呟いた。

「ねえ？海砂希。ガード出来そう？」と真良輝は名刀の前で手を広げ敵からの銃弾を全て紫のカーテンのようなもので受け止めている、青い透き通るような髪を持つ小さな女の子にそう尋ねた。

「うん。大丈夫」と彼女は呟き後ろにいる名刀に「名刀。人は切つてね」と言った。

「楓の爆破は終わったかな？」と真良輝は呟きながら未だに悲鳴を

上げている関根をみる。

「こりゃ、完全にこわれたね。どうするの？良雅」と真良輝は隣にいる青い髪に黒い瞳の男に目をやる。

良雅と聞いて早奈は慌てて振り向いた。いままで外に姿をあまり見せることのなかった良雅がそこに立っていた。彼はパルパックから皆を救いだしてくれた真雅の弟である。年齢は15歳と真雅とは10歳も差がある。まだ幼い左瞳には光が指してはいない、しかし、その左眼には現実とは違うものが見えているらしい。彼は寮制の中学に通いこの組織には何の興味もなかったため、いままで何の関与もして来なかった。

その真雅が今ここにいる。良雅は「真護が連れて来いって言うていた」と興味がまるで無さそうな顔でそう呟いた。

そんな彼を早奈は眉をひそめ見ていた。

そんな早奈に海聖は声をかけた。

「早奈。傷口見せて」

「あつ。うん」と早奈は真雅から目を放した。

その後、良雅が早奈を睨んでいたのを弥譜音と道霧だけが見ていた。海聖は早奈の傷を手当てしながら呟いた。

「弥譜音。肩に弾が一つ入ったままだ」

弥譜音は「見せてください」とすぐに駆けつけ、傷を見ながら考えた。

「どうします？弾、出してしまつていい？」と弥譜音はポケットから四角いケースをだしながら聞いた。「いいよ。あんまし痛くしないだね」と早奈。

「どうだろうね？」と弥譜音は笑うと言った。「見るない方がいいですよトラウマになりますからね。海聖。早奈押さえておいてね？」

「行くよ」と言われて早奈は傷から目をそらして目を綴じた。

軽い金属音がして「終わり」と弥譜音の声が聞こえた。痛みは一つもなく驚いた顔をしていると弥譜音が傷に包帯を巻きながら隣で苦い顔をしている海聖に笑った。「ねっ？トラウマになるでしょ？」

「初めて弥譜音を尊敬した！よくもあんなことが出来るもんだね」と海聖が苦笑いを彼に返した。弥譜音は苦笑いをして早奈に手を貸す。

「さあ、立って。帰るよ」

早奈はその手を取ろうとしたが視界がさつきよりも一段と狭くなっていて距離感がつかめずその手を取ることができずに手が下に落ちる。見ていた弥譜音と海聖が顔をしかめて早奈の顔を覗いた。

「名刀。早奈の様子がおかしいよ」と海聖が海砂希の援護をしている名刀に声をかける。

「変わる」と弥譜音は銀の針を出しながらそう言つと名刀の変わりに海砂希の援護に入る。「俺も手伝う。命を助けてもらったからにははたらかなきゃ」と道霧がそう言つて海砂希の後ろから銃をぶつ放す。

その時、地震に良く似た地響きが響いた。

「芽生が爆破に成功したようだね」と真良輝が呟く。

「芽生と合流しないと」と海砂希が前線でそう返した。

海聖は壊れた関根を担ぎあげ「こっちは準備いいよ」と言った。

「名刀！早奈ちゃんは？」と海砂希は前を向いたまま聞いた。名刀は早奈を片手で担ぎあげると片手に刀を握った。「名刀。私にも前を向かせる」と早奈が怒鳴る。「ほとんど目見えてないんだろ？やめておけ」と名刀は担ぎあげた早奈の背中をポンポンと叩く。

「それに足手まといだ」と名刀はビシツと早奈を黙らせると海砂希に「こっちも準備いいぜ」と言った。

「おっけー。今から大きなガードは外すからダッシュで突っ込んで一階まで降りて、芽生と合流。仕方ないから海聖は私の後から来てね？銃弾くらいは弾けるから、あとは個々で守ってね」と海砂希。

「はいはい！！私、一番に行きたい！！」と真良輝がぴんぴんとはねる。

「はいはい」と海砂希は呆れたようにそう返すと「ではマラソン開始！！」と声を上げた。

「よい。どん」と真良輝が一人で海砂希のガードを飛び越して行く。「行くよ」と弥譜音が早奈の頭を撫でた。「ああ」と名刀が返事を返す。

名刀は次に飛び出した弥譜音の後を走りだした。まるで人間とは思えないスピードで走りぬけながら邪魔な奴を切り裂いていく。早奈は名刀のその剣捌きを眺めていた。やはり早い…彼が持っているのは円動作を使った日本が誇る殺人道具。これがあつたおかげで日本は他の国に支配されることがなかったという鍛え抜かれた物、しかし、長さや重さの上に達人であつても早く動かすことはなかなか難しい。人間の限界を超えた彼にだからこそ…いや、刀を使うために作られた彼だからこそできる技。それに彼は瞬発力、洞察力、といった感覚が元々人一倍ずば抜けている。これは元々持つて生まれた能力であつて作られたものではない。

名刀はその力で人を容赦なく真つ二つに切り裂いていく。容赦がないのは名刀が生きたいと望んでいるから、少しでも容赦したら自分が殺られることを知っているから、見てきたからそうやって生きてきたからだつた。

赤い血が粉塵の中に散っていく。その光景はまるで真つ赤な赤い花びらが桜の花びらのように散っていく姿にどこか似ている。

『守』

(7)

キーンと名刀が刀を鞘に収める音がして早奈は床に下ろされた。どうやら、芽生と合流したようだ。芽生は茶髪がみの若い少年だ。いまどきの若者の服に身を包み傍から見ればチャラ男と呼べる。しかし、見た目と違い中身はすごく真面目である。

「芽生。おとりの爆破は完璧みたいだな。おかげで少し敵が減った」と名刀。

「うん。確かに減ったけど……この量ないよ」と芽生はそう言いながらダイナマイトを敵に向かって投げている。

芽生は楓の弟であり、プラスチック爆弾の得意な楓に比べて彼は地雷など対人用の武器に精通している。楓はたった一人の家族の彼が可愛いらしくかなりの過保護のためあまり芽生はこういう危険な場所には現れなかった。会議の時さえ楓が勝手に欠席届を出していたくらいの過保護ぶりだ。楓が死んだフリをして情報収集をしているため、彼の変わりに芽生が出てきたのであろう。

紅黎と笙流は楓に弟を頼むとでも言われているのだろうまだあどけなさの残る芽生を支えるように援護をしている。早奈はその3人の間で壁で体を支えながらその様子を見ていた。体が自分のものではないように重い。視界は狭いし頭はクラクラする。今、自分に銃口が向けられたら避け切れる自信がない。

「早奈は？」と口数の少ない紅黎が珍しく名刀にそう尋ねた。

「無事だ。そこにいる」と名刀はそう返した。

「そうか」と紅黎は早奈の存在を確かめることなく言った。

「援護するよ」と弥譜音が紅黎と笙隆を手伝う。

「名刀！お前は早奈を頼む」と海聖の声が響いた。

「言われなくとも」と名刀は海聖にそう返すと早奈の所へ来てしゃがみこみ目線を同じにする。

「早奈、薬飲めるか？」と聞いた名刀の顔がいつもより焦っていた。早奈は小さくうなづいた。

体はダルいし頭も痛い…飲めるかどうかは正直分からない。でも、一刻も早くこの症状を止めたかった。

名刀が差し出した薬と水を受け取ると薬を水で流しこもうと試みる。しかし、体が拒否を示して戻ってしまった。

「やっぱりダメか…」と名刀は呟いて言った。

「芽生！早く脱出経路開けろ」

「はいはい。そう言うと思って仕掛けはばっちりだぜ？」といつもよりウキウキした様子で芽生がそう言った。

「早奈。水飲んでおけ、吐いてもいいから」と名刀が水のペットボトルを渡す。

目の前が霞んでそれすら見えない。

「名刀。私どうしちゃったの？」と早奈は彼に尋ねた。

「大丈夫だ」と彼はそれだけ言うと言珍しく黙り込んだ。

後から来た海砂希達が合流した。

関根は海聖に支えられながら自分の足で歩いて来た。どうやら正気に戻ったようだ、それでも瞳にはまだ暗い闇が見え隠れしている。

「お前らは何故、俺を助ける？お前らは暗殺組織だろ？」と関根は下を向いたままそう聞いた。

「貴方の命には私達にとって価値があるから助けるの。ここに転がっている人の誰よりも未来に必要な物を持っているのよ」と海砂希が静かにそう呟いた。

関根は顔を上げどういいうみだと聞こうとして声が返ってきた方を見て目を丸くした。

目の前にいる少女の体全体から紫の光が漏れている。

「その青い光はなんだ？お前らは何者なんだ？」と彼はそう聞いていた。

「命光が見えるの？」と海砂希が無表情のまま関根の顔を除き「何色に見える？」と尋ねた。

「む、紫の光だ」

「正解」と彼女はそう言う続けた。「すごいわね、貴方。私達の中でも見える人が少ないのにね」と彼女はその紫の光でその場一体を包み込んだ。

「この光に包まれているうちは敵の銃弾を防げるのよ」と彼女はそう静かに説明すると突然、なにかを察した様に立ち上がった。その途端、地響きがした。

「芽生！」と海砂希が彼の頭に呼びかける。

少したつて楓の声が彼女の頭に響く「俺の起こしたものじゃないぜ？。奴らの起こした物だつて…。つてか、4時の方向から熱を感じるだよね。たぶん閉じ込められた」と芽生の声が帰ってきた。彼は楓とは違い海砂希と同じようにテレパシーが使えた。能力は楓よりかなり上である。だからこそ、楓はあまり彼を外に出すのを嫌がるわけだが…。

「奴らは味方と一緒に私達を閉じ込めたの？」

「…そういうことになるな」と芽生の返事は少し戸惑いがあった。海砂希はその返事に何も返さずに辺りを見渡した。名刀が見ている早奈の様子は相当悪いようだ。ぐったりとしている早奈の体が見える。敵からの銃弾は止まらない。逃げようにも逃げられる道は塞がれてしまった。これこそ絶対絶命と言えるだろう？しかし、ここで死ぬワケには行かない。

「何？海砂希。ピンチみたいだね？」突然、ききなれた声が頭の中でして海砂希は驚く。

「真斗。貴方、生きて…」

「優梨のおかげだね。ところでその角を曲がったところに地下通路がある。そこから地上に出られるよ。案内者を行かせたから彼に聞いてそれじゃあ。幸運を！」と真斗からのテレパシーは切れたと同時に名刀の「樹希翔！」という驚いた声が響いた。

『逃』

(8)

「早奈。つらい？」と樹希翔は急いできたように息を弾ませぐったりした早奈に尋ねる。

早奈はこくんとうなづく。

「どこが辛い？」

そう聞かれても体全てが重い…まるで自分の体じゃないように…。

「名刀。早奈、熱があるのか？」

「ああ。かなり熱がある」

「一刻も早く熱を下げたい感じ？」

「まあ、このままだと脳がやられるだろうな」と名刀は心配そうに言った。

「ふーん。じゃあ熱を一時的に下げていいんだね」というと樹希翔は早奈の額を一度人差し指で突いた。

ぱーっと体の温度が引いたのを感じて早奈は樹希翔を見る。

「肩痛いでしょ？」と樹希翔はそう言うのと今度は早奈の傷口よりちよつと上を中指で突いた。肩の痛みが引く。

「おい！樹希翔。お前何を…」と名刀が怒鳴る。

「そんなに怒鳴らなくてもいいだろ？ツボを突いて神経を麻痺させたの。早奈。ちよつと楽になったでしょ」と樹希翔はイタズラそうに笑った。

「体に負担はないんだろうな？」と名刀が彼を睨む。

「うーん…負担はないよ。ちなみに効果は約一時間…まあ、単なる気休めだけど変に体力使わなくていいんじゃない？」

「ありがとう」と早奈が小さく呟くと樹希翔がびくりして言った。「名刀。なんか早奈が素直すぎる…本当にヤバいみたいだね」名刀はぐったりしている早奈を両手で持ち上げながら言った。

「ああ。薬を飲んでいないから病原が暴れだしている。今はまだ少

し体に残っている薬が免疫を上げているが消えた瞬間、病原が第2ステージに移る危険性がある」

「なんか良く分かんないけど早く脱出しないとならないんだろう？」
名刀はうなづいた。「じゃあ、地下通路に案内する。」と樹希翔はそう言った。

カンカンという足音がコンクリートで出来た地下通路内に響く。切れかかった電球がバチバチ頭上で音を立てている。樹希翔の案内で早奈達はあの地獄から奇跡的に脱出した。ここに潜った後、一応楓が地下の入口を爆破して奴らを足止めしたが彼らは全速力で走っていた。

「樹希翔、なんでここにいと分かった？俺達は早奈達を助けに行くとお前には言ってないぜ？」と名刀が尋ねた

「うん？道霧からヘルプメール貰った」と樹希翔は携帯を出して笑った。

「道霧が携帯のGPSをonにしておいてくれたから見つけやすかった」

名刀は道霧を見た道霧は舌を出して笑った。

「俺らより樹希翔を信用したのかよ」

「いや、名刀達が早奈を助けにくるのは分かっていたがな、スパイに慣れている樹希翔を呼んでおけば何かあったら抜け道を教えてくれるかな？」と保険かけておいた」と道霧。

はあと名刀はため息をついた。「おかげで助かった」と名刀はそう溢した。

「樹希翔もたまには役に立つんだねえ？」と海聖がからかうように言った。

「たまには…ってなんかひどくない？」と樹希翔はそう言いながら地上への階段を上った。

やがてどこか森の奥のトンネル内に出た。月の光を便りに彼らはトンネルから外に出る。

外は暗闇でまんまるの月だけが光っていた。獣声が響いている。

「樹希翔。ここはどこだよ」と名刀が呟く。

「えっ？十二条神社の境内だよ」と樹希翔はそう言って笑った。

「なんでこんなところと警察署がつながっている？」と真良輝が伸びをしながら尋ねた。

「下水道の神秘だね」と樹希翔は笑うとその声にこたえるように「なんだー生きていたんだ！ー」という声が暗闇の森の中から響いた。

『討ッ』

(8)

バサツと何かが複数落ちる音がして近くの木が何本か風がないにも関わらず揺れる。

どうやら木の上に何人か人が乗っているようだ黒いマントに身を包んでいるのか月明かりだけではどこに誰がいるか分からなかった。

早奈を抜かせばだが…。

早奈だけが彼らの存在を感じていた。

「囲まれた4時の方向に3人。8時の方向に4人。2時の方向に5人。10時の方向に3人。12時と6時の方向に7人」と早奈がぼそりと呟く。

「さすが早奈だね？こつちに来ないか？」と森の中で男の声が聞こえる。

「真路。お前と話す理由はない」と早奈。

くつくくつと笑いを噛み殺す声が森に響く。

「早奈は俺となら話すのか？」とさっきの男とは低い声が響いた。

「真良。ひさしぶりだな？元気そうだな」

「早奈は死にそうだね？」と声はからかうように言った。

「まだ死ぬわけにはいかない」

「くつくくつ。本当に早奈は強いね？俺は君が欲しいよ。伝播主をそちらに取られてしまつて俺らは出鼻を挫かれた気分だよ。君が来てくれたら俺らの計画は全てうまく行くんだけどね？」

「私はお前らにはつかない」

「じゃあ、戦うしかないけどいいの？」と真良は低い声を出す。

「今の君たちに勝ち目ないよ？真斗も優梨も快哉もない。どうするの？」と違う声が聞こえる。

「ルオンだな？」と名刀が低い声を出す。

「そうだよ」とルオンは殺気を放ちながら名刀に返事を返す。

「僕からのプレゼントはどうだった？あの女、最後の最後までお前の居場所を覚えてくれないからさー痛めつけてやった。」とルオンは笑った。

「ルオン。お前だけは許さない」と名刀がルオンの殺氣に負けないくらいの殺氣を放つ。

「なんで？俺がやっていることは昔のお前達と何も変わんない！！」とルオンは大声を上げた。

その瞬間、名刀からみて8時の方向から銀色のナイフが飛ぶ。とつさに刀を抜いた名刀は銀のナイフを一振りですべて払いのけナイフの飛んできた方に刀を向けた。

「ルオン。お前は俺がいつか倒す」

「はっ？今すぐお前を倒してやるよ」とルオンはそう言うのと殺氣を上げた。そこに静止の聲が飛ぶ。

「ルオン。止める！！」その声でルオンの殺氣が消える。

「早奈。10日やるよく考える！あの死にそこないの真護について俺らと戦争をするか、俺らの方に来て戦争をしないか、お前の体のことは心配しなくていい、ルオンとカナミが見てくれる」

「断る。」と早奈。

真良はまたのどの奥で笑いながら言った。

「本当にお前は頑固だな。まあ、よく考えるんだな」と彼はそう言うって暗闇の中に氣配を消した。

早奈ははりつめていた神経を吐いて息を吐いた。

「奴らは消えた」と早奈はそう皆に伝えた。

ピンと張りつめていた空氣が治まり、樹希翔が呟く。

「なんで彼らは俺らの場所が分かったんだ？俺は誰にもこの道を通るなんて言っていないぞ」

その言葉に誰も返事を返さなかった。早奈はこの言葉で確信がついた。

この中に彼らと繋がっているものがある。弥譜音も海聖も名刀もそれに気づいて何も言わないのだろう。

早奈は暗闇に浮かぶ月を見上げた。その月はまんまるではあったものの赤く染まりつつあった。月の中にあのきつねのぬいぐるみが見えたそれは戦争が始まったことを彼らに示していた。

『銘子』

(9)

幻を見た。

小さい時の記憶だ。

彼の世界は全て白黒だった色など見たこともない。

「と彼は白黒の世界で男の顔を見あげた。

ひどく懐かしい顔のはずなのにまるで波打つ水のように揺らいで輪郭さえ掴めないそれは誰だったのだろうか？いつから自分は色を知ったのだろうか？黒い闇が目の前を包んでフラッシュバックの様に写真が流れる。白い部屋と白いベッドに横になっている子供が見える。彼の瞳には何も映っていない。ただ、人形のように天井を見つめている。

次の写真は灰色に染まる空。

空以外に何も無い。白い雲がわたあめのように浮いている。次は写真ではなかった彼はうつぶせでベッドに寝ていた。白衣を着た男がこちらに注射器を向けているその注射器の中には赤い液体と黒い液体。その液体だけリアルに色がついている。

男は彼の体にそれを打つ気らしい。「やめて」と彼は呟いた。

彼にはそれが自分を化物にする薬だと知っていたから…必死に逃げようとした。しかし、体はおるか声すら出せない。

嫌だ嫌だ…彼は泣き叫んだ。しかし、声も体も動けない。彼の体にそれがいれられた。ひどい痛みがした。

いやだああああ…

と関根は飛び起きた。

「びつくりした！お兄さん…びつくりさせるなよ」とお茶を飲みながら早奈は関根にそう怒鳴った。

「名刀。関根が目覚ましたよ？」と早奈はお茶をすする。

「うん？ちよつと待て今、手はなせない」と普通の日常的な言葉

が返ってくる。

ここはどこだっけ？と思っていると早奈がお茶を眺めながら言った。「ここは私の家、お兄さん意識朦朧としていたみたいだから覚えてなくてもおかしくないね」地下通路から抜け出し、見知らぬマンションまで車で移動したところまで覚えていて。

ここがあの大きな高級マンションのようだ。「今日は何日だ？」ここに来たのは深夜だったはずだ。

「今日？4日よ。あれから3日たった」と早奈は左の頬に大きなガ―ゼを貼った顔でそう言った。彼女の顔にはたくさんの切傷が残っていて一瞬である時、自分を守るために負ったものだと分かった。

「その傷…」と関根がそう呟いた瞬間、「ほれ、お昼出来たぞ」と赤い髪の男が部屋に入ってくる。

彼は関根を見るとエプロンを外し早奈に渡すと早奈の座っている椅子の隣にある戸棚から何かを取りだそうとして「まあ、いいか」と呟いて戸棚を元に戻して言った。

「関根も食うか？」何を？と関根が聞く前に早奈が言った。

「お昼に名刀がとまとスパゲッティ作ったから食べるか？」なるほどと思った瞬間、関根が返事をする前にお腹が返事を返すようにぐうと鳴いた。

「食べるみたいだよ」と早奈は名刀にそう返した。

「じゃあ、下に降りて来い。」と彼は面倒臭そうに用件だけを言うのと部屋を出ていった。

「うん」と早奈は返事を返し松葉で体を支えながら立ち上がる。

関根も立ち上がった。3日も寝ていたせいかな頭がクラクラする。

足元がおぼつかずよろめき傍にあった椅子に手を着くと早奈が言う。「人って長く横になっていて突然起き上がると貧血起こすんだって気をつけて」はやく言って欲しかったと思いつながら椅子にしがみつき頭に血がまわるのを待つ。

貧血が去った頃、早奈が尋ねた「もう平気か？」どうやら早奈は関根の貧血が治まるのを待ってくれていたようだ。関根がうなづくと

早奈は関根に背を向けて部屋を出る。関根は彼女の後について行った。

第3章『人は見かけによらない』

リビングに降りるとテーブルの6つの椅子の内3つの椅子の前に一つずつスパゲッティの載ったお皿が置いてある。早奈はテーブルの一番左端の椅子に座りこんだ、

そして右隣の椅子を引くと「関根。座れ」と言いキッチンに向かって叫んだ。

「名刀！アールグレイのミルクティー飲みたい！」関根は早奈の隣に座りながらその会話を聞いていた。

「あん？いつもの分量でいいのか？」

「うん。あと粉チーズがない」

「ちよつと待て！一度に言うな！」と名刀はそう言いながら手にサラダを持って出てきてサラダを二人の前に置くと早奈の頭をこづいた。

「関根。こいつのことは気にせず冷めるまえに食べ」

「お兄さん。名刀の料理は世界一だよ」と早奈が嬉しそうに行った。

「世界一って…早奈。大袈裟すぎないか？」と名刀が困った顔で頭を掻いた。

「確かに名刀の料理はおいしいよね？」と後ろから声がする。

誰よりも早く振り向いた早奈が声を出す「お帰り」

「ただいま」と金髪の男が黒髪の男とともにリビングに入ってくる。

「なんで、海聖も返ってくるんだ？」と名刀が頭を抱える。

「なんで？僕帰ってきたらダメだった？」と海聖は机にバックを置きながら尋ねる。

「そうじゃなくて…」と名刀は早奈に紅茶と粉チーズを渡した。

「海聖の学校、閉鎖したそうです」と弥譜音がスーツを脱ぎながら言う。

「閉鎖って言うか…爆破されて授業ができない」と海聖はソファア

に座り込みながら言った。

「なんで？」と早奈がスパゲッティを頬張りながら聞いた。

「はあ？」とキッチンから名刀の声が飛ぶ。

「あのさー二人とも二ユースくらい見ようよ」と海聖がたばこに火をつけながら言う。

「あのなー」と名刀が顔の前にかかった前髪を掻きあげながら言う。
「朝から掃除に洗濯して早奈と関根の面倒みて、飯作って、俺が二ユースを見る時間があつたと思うか？お前らそんなこと言うなら少しは家事やれ」

「ごめんなさい」と海聖が名刀に頭を下げる。

「分かつたならいい。ところで飯食う？」と名刀はキッチンに入りながら尋ねた。

「とまとスパゲッティか…食べる」と海聖は嬉しそうな顔をする。

「弥譜音もたべるだろ？」

「食べます。」と弥譜音はそう返事をしネクタイを外しながら弥譜音が早奈達の後ろのソファの前にあるテレビをつけた。

突然テレビに映つたのは炎上する駅だつた。

リポーターらしい男がヘリコプターの中から中継をしている。

「今、東が丘駅上空です。見てください！すごい煙が上がっています。」男がそう言っている傍からドーンとすごい音とともに駅が爆発する。

「すごいなー」と名刀が弥譜音と海聖の前にスパゲッティを出しながら言った。

早奈も二人の間に座り込みスパゲッティを頬張りながらテレビに見入った。

「テロかね？」と早奈は折れた足をテーブルになげだしながら言った。

「そのとおり」と海聖は言つてチャンネルを変えた。

ニュースキャスターが深刻そうな顔でテレビに映つた。

「政府は今、この一連の爆発事件が反政府組織。ソナーパレカルに

よるものだと発表しました。ソナーパレカルとは渋谷、新宿を拠点とした暗殺集団で殺害現場にきつねのぬいぐるみ置いていくことで有名な集団であり、犯行声明は出されていませんが専門家によると4日前にあった214人の死傷者を出した池袋駅の爆破事件で彼らが使ったきつねのぬいぐるみが置いてあったという事件と爆破の仕方が似ていることから間違いないということです。この事件により交通機関が乱れ死傷者も多いことから都内全ての学校が休校となっております。危険ですので爆破された箇所には近づかないでください。また、不審物を見つけた場合は近付かずかないようにお願いします」

「なんか…大変なことになったね」と早奈は紅茶を飲みながら言った。

「爆破されたのは約100か所。どこも駅や病院などの比較的人が集まりやすい場所」と弥譜音が名刀の作ったスパゲッティを食べながら話す。

「お前らが起こしたのか？」と関根はテレビを見ながら言った。

「お兄さん。私たちはこんなことしないって、これは天の使徒の仕業だって」と早奈はサラダを頬張りながら言った。「ってか、お兄さん。落ちていてスパゲッティ食べな」と早奈。

こんな時に落ち付いてられるか！と思いつつ空腹には勝てないもので…関根はスパゲッティを口に運んだ。一口食べて思わず声を出す「おいしい…」今まで25年間、色んなところでまとスパゲッティは食べてきた。しかし、このスパゲッティはそのどれよりもおいしかった。

「でしょ？名刀のスパゲッティ食べると他のスパゲッティ食べられなくなるんだよね」と早奈が嬉しそうに笑った。

関根はつい名刀を見てしまった。そして、人は見かけによらないと思った。

「ひとは見かけによらないよな」と関根の隣にいる海聖が関根の気持ちを讀んだように言った。

「それどういう意味だ？」と赤い髪青年が金髪青年の首を締め

る。早奈はその様子を笑いながら見ていた。

「ところでさー」と名刀が海聖の首を絞めたまま言う。

「俺達、指名手配されたりしないよな？」

「そんなことしている暇ないんじゃないか？パルパックだって馬鹿じゃない。この事件が天の使徒が起こしたものだと思っ
ているはずだからな、するなら私たちより天の使徒を指名手配するさ」と弥譜音。

『黒い蝶とタトウ』

しばらくしてテレビを見つめたまま早奈が言った。

「名刀、ベランダ開けて」

「うん？暑いのか」

「ううん。そうじゃなくて…」と早奈は言葉をつまらす。

何かあるなと思って名刀はベランダを開けた。冬の冷たい風が部屋に入ってくる。

さむーと思い名刀は体を震わせた。

「道霧。樹希翔」と早奈がいるはずもない名前をあげた。

バツと音がしてベランダに二人が立っていた。

「うわっ！」と名刀が悲鳴に似た声を上げた。無理もない名刀が窓を開けた時、そこには誰もいなかったのだから…

「今日は寒いな」と道霧が震えながら言った。

「何かあったの？」と早奈が名刀にスパゲティのおかわりを要求しながら冷静に聞いた。

「奴らが俺らを捕まえに来るぜ？」と道霧は勝手に上がり込みソファーに座り込みながら言った。

「隠れ家が彼らに知られたみたい…軍団がこちらに向かっているよ」と樹希翔。

「奴らとは黒い蝶のタトウを持った集団か？」と関根は彼らの話に割り込んだ。

彼らは関根のその言葉に一度沈黙を示した。

やがて、早奈が「そうだよ」と一言呟いたが奴らは何者なんだ？という関根の言葉は「そんな…そう簡単にあそこは気付かれる場所じゃない」と叫んだのは海聖の言葉に消された。

「その通りんだけど…」と樹希翔は言って早奈を見る。早奈はおかわりのスパゲティを口一杯に頬ばっている。

「ほれで、真護達は？」と早奈はスパゲティに集中しながら聞いた。

「Dのところへ避難させた」と道霧。

「Dの…所ですか…」とその場に居る誰もが嫌そうな顔をする。パレカルという組織は集団で出来ているAは楓をリーダーとする男だけの集団。Bは真良輝を中心とする女のみの精鋭集団。Cは俊を先頭とする集団。そして、Dをまとめている人物を組織の中では通称Dと呼ぶ。Dをまとめているだけあつて能力はズバ抜けているが少々、性格と行動に問題があり属に言うヒツキーの分類に入る。

「Dの所なら逆に安全かもね」と早奈は食べ終わり弥譜音のお茶を飲みながら言った。

「真良輝には言いましたか？」と弥譜音。

「いや、敵の場所によつてこちらを優先した。」と樹希翔。

「あらま、この場所もバレたのね」と海聖が呟く。

「じゃ無かつたらここには来ない」と道霧はそうきっぱり言い放つと「伝えることは伝えたからな」とベランダから飛び降りた。

慌てたのは関根だ。人がベランダから突然落ちるなんて予想してなかったから彼は慌ててベランダに出て下を除いた。頭がクラクラするほどの高さだ下に歩く人が黒米に見える。

「関根さん。ここ21階だよ」と樹希翔が隣でそう教えてくれた。

「心配しなくても大丈夫。いつものことだから…」と彼はそう言った。

「本当に大丈夫なのか？彼はこの高さから飛び降りたんだぞ？」と

関根は大声をあげた。

一瞬の沈黙が流れた。

その場にいた全員が関根に注目した。気まずい空気が流れる。どうやら彼らの地雷を踏んでしまったようだ。

やがて、ソファアに座っている男がぼつりと呟いた。「関根さん。部屋の中に入ってきてくれますか？」

この状況で中に入って命の保証があるのかと関根は考えた。

彼らは殺人のプロ。今だって普通に銃刀法違反ぐらいやってのけるだろう？中に入ってベランダを閉められたら逃げ場などない。さ

つきまでは何も怖いとも思わなかったが、今は彼らが非常に怖く見えた。関根はまるで狼の集団の中に入っていく羊の気分だった。

「早く入れよ」と赤い瞳の青年が関根を睨みつけた。関根は逆らうことが出来ずに家の中に入る。

次に入ってきた樹希翔が後ろ手で窓をきっちり閉めた。部屋の中の空気はピーンと張っている。部屋の中にいる全ての者が関根を見ていた。

「お兄さん。」と早奈がその空気の中で彼を呼んだ。関根はソファに座っている女子大生に視線を移した。

「どこまで知っている？」と彼女は彼を見たまま尋ねた。

一瞬、彼女の瞳が赤く光った気がした。たぶん彼女は自分たちのことをどこまで知っているのかを聞いたのだろう。

関根は恐る恐る口を開いた。

「お前らが暗殺したと思われる人達の資料を見せて貰った。」その言葉に早奈は目を丸くした。

「良くそんな資料残っていたね？パルパックにそれが見つかったらお兄さん殺されるよ？」と彼女は困った顔をする。

その早奈の言葉で関根の頭の中にパルパック＝黒い蝶の集団という法則が成り立った。

彼らの敵は関根の予想通りあの刺青を持つものたちなのである。

「黒い蝶のことはどこで知った？」と樹気翔が尋ねる。

「資料を見ていて一つの共通点に気付いた。被害者達の鎖骨には黒い蝶の刺青がある」と関根は気づいたことをそのまま告げた

「このタトゥーか？」と金髪の男が左の鎖骨を見せて関根に尋ねた。男の鎖骨には火傷のあとの上につすらと黒い蝶のような模様が残っていた。その蝶はまるで彼の鎖骨の上に止まっているように見える。今にも空に向かって羽ばたきそうな漆黒の黒蝶は火傷のあとを除けばまさしく被害者達と同じタトゥーである。

「そうだ」と関根は返事を返ししながら頭の中に一つの疑問を浮かべていた。関根の考えが正しければ黒い蝶の刺青を持った集団は彼ら

の敵のはずだ。

「このタトウーはパルパックの配下または部下の証。」と海聖は少し視線を落とす。「僕は元・パルパックの一員だ…。」と海聖の綺麗な顔が歪む。

「このタトウーが赤と黒があって赤は組織に重要な人の証。幹部の人はこの鎖骨の蝶が真つ赤なんだ。僕の鎖骨のこれも最初は赤かったんだ。」と海聖は自分の刺青に爪を立てながら言った。

『HKW - g t k』（前書き）

ここから先は最終話まで書いてからUPしようか？途中でUPしようか…迷っているところです。

でも、一つだけ言えるのはこの作品はフィクションであり、作者の妄想で占められています。出てくる人物名（珍しい名前から抜粋してきたのでたぶん本当にいらっしやる人の名前…）は一切現実のものではありませんし、出てくる行政機関や話。これは決して現実ではありません。ただ、作者の勝手な妄想でございます。

天海 聖哉。

「お兄さん…。パルパックは10年前何をしていたか知っている？」
「人体実験とウイルス研究をしていたって…」貴方が言ったのでしょ？という顔を見ると早奈は可愛らしく笑って「そう。私はそう話したわね。どんな実験だったか？知っている？」

「いや、そこまでは知らないが…」と関根。

「そうよね。知らないわよね。知っていたら抹殺指令がくだっているはずだもの」と早奈がそう呟いた。

「抹殺指令？」と関根は聞き返した。

「そうよ？10年前に警察がパルパック事件の真相を明かさなかったのはなぜかわかる？」

「真相を明かさなかった？」真相が分からなかったんじゃない？と関根は思った。

「まさか、お兄さん。警察は真相が分からなくて捜査を打ち切りにしたと思っていたの？」と早奈がそんな関根をみて馬鹿馬鹿しいとでも言うように笑った。

「警察は全てを分かっていたでしょうね？パルパックは証拠隠滅なんてするはずがないですからね。真相はたぶん捜査に入った警察官は全て中にいたナリソコナイに殺された。そして、多数の殉職者を出した警察は捜査を打ち切るしかなかった」と黒髪の弥譜音がテレビの電源を落とした。

「弥譜音の言うとおりだよ。10年前に警察が来た時、パルパックの研究員はあの研究所から一人も逃げてない。ただ、捜査に来た連中にナリソコナイを向かわせただけなんだ」と海聖が震えながら言った。「日本のために研究していると思っていたのに…」と海聖が涙を流しながら言った。

早奈は海聖を抱きしめながら小さく「海聖のせいじゃない」と呟き関根を見る。「お兄さんは私が覚醒した所みたことあるよね？」

「覚醒したとき？」

「早奈の場合は赤い髪と赤い目になったときだ」と名刀はタバコに火をつけながらそう細くをした。

最初に会った時か…と関根はその時の様子を思い出して頷いた。

「あの時、お兄さん。私に人間か？って聞いたのを覚えている？」

その時じゃなくても今も人間かどうか気になるよと思いつながら関根は何も言わず頷いた。

「確かに私たちは人間よ。でも普通の人間と言われたら、私も弥譜音も名刀も樹希翔も人間離れしているの」と早奈の瞳と髪が赤く変わっていく。

あの時と同じ髪と瞳だ。赤い瞳はまるで獣のように光っている。まるでお腹を空かせた虎が獲物を狙っているような感覚を覚えた。殺気というものが分からない関根にも分かるこれは自分の身を脅かすものだ…。

「これが覚醒」と早奈は瞳と髪の色を戻して言った。「私は5歳の時に脊髄に入れられたウイルスによって殺そうと思うと髪と瞳の色が変わるの。そのウイルスはまだ成長途中の子供の体に入るとDNAを組みかえその個体をまったく別の物に変えてしまうの。性格も考え方、知能、顔、体付き、髪や瞳の色…全て自分ではない物にさせてしまうの」

早奈が一体なんの話をしているのか関根にはさっぱり分からなかった。

「入れられたウイルスは通称、HKW - g t k。人を殺すためだけに考えられたものだ人を殺すと言っても感染した宿主を殺すままでのウイルスとは違い。このウイルスは宿主のDNAを殺人に適した物に変えてしまう」と名刀がたばこを灰皿に置きながら言った。

「殺人を望んでいる者は俺達の中には元々いない。ただ薬で殺人欲を抑えない限り、もう一人の自分が外に出てきて殺戮を繰り返してしまう。それに薬を飲んでもパルパックの刺青をみると憎しみが溢れて来て自分を止めることができない」と弥譜音が首を振る。

「薬でとめているから俺らの体は中毒になり、薬がなくなればその中毒症状に苦

しむことになるし、それに元々、無菌状態である脊髄に菌を入れるということとは

宿主には必ず死の危険がある」と言いながら名刀は火のついていない煙草をくわえた。

「HKWはヒトの幼児期細胞を取り出しがんに感染させ増殖し、殺人に優位なDNAを組み込み研究に研究を重ね作られた」と金髪の青年が早奈を抱きしめたまま小さく呟いた。

「何故？ パルパックはそんな危険なウイルスを生み出したんだ？」と関根は尋ねた。

彼らの言っている意味がさっぱり分からない。というかまずなぜこんな話をしているのか分からない。彼らの話が現実とは思えなかったのだ。

『HKW - g t k』（後書き）

<訂正>

33と34話を訂正しました。

他のサイトに載せたところ「楓が二人いる」のご指摘を頂き、天海に尋ねたところ楓の弟にする予定だった^{かなめ}要と間違えたということでしたので訂正しておきました。

^{かなめ}要ではあまりにベタすぎてまた間違える気がしたので要ではなく^が芽生^おという名前にしました。

天海からもらったキャラ設定によると、

芽生^がは茶髪の少年で楓の弟。楓同様、爆発物に精通している。外見はチャラ男的だが中身は超一真面目。楓が過保護で甘やかしたせいか少し我が儘なところがある少年だそうです。

混乱を招いてすいません。いよいよ最終段階です。気合を入れて頑張りますので今後ともよろしく願います。

*変更箇所。第33部分『危キ』と第34部分『守ゴ』。^{かえで}楓 芽生^が

b y・成田 慎也

『条約』

「他国から日本を護るためよ日本は世界の中で武力を捨てた国…それに国土も人口も他の国に比べたら少ないわ、こんな国では永世中立国になるわけにはいかない。日本政府が一番恐れているのは他の国に攻められて負けること」と早奈。

「他国に負けたとき必ず処刑されるのは彼らですからね」と弥譜音がさりと付

け加える。

「ちよつと待て政府つて…今はパルパツクの話をしていたんだろ？」と関根。

「なに言っているの？お兄さん」と早奈は意味が分からないという顔で関根を見る。

「パルパツクは国の機関。パルパツクに研究をするように命令を下したのは政府よ。もしかして、お兄さん。パルパツクが勝手にその研究を始めたとも思っていたの？」

関根は頭を鈍器で殴られた感覚を覚えた。パルパツクが国の機関とは知っていた。しかし、国がそんな非人道的なことをやるとは認めたくなかった。日本は平和な国で民主主義の国のはずだ。そんな国がそんな研究をするとは思いたくない。

でも、何故？国はそんなものを作る必要があつた？

「日本はアメリカと結んだ条約によつて守られてはいる。だが、もしも日本と米国が同じに攻められたらアメリカは守ってくれるか？政府はそれが一番恐れているんだ」と名刀が嫌そうな顔で腕を組む。「日本には自衛隊がいる…」と関根は苦し紛れに声をだす。

「確かに自国を守るために自衛隊はいるけど…彼らは果たして他の国で命がけの

戦場を乗り越えて来た人々に勝てると思う？」と早奈は尋ねた。

関根は一瞬で勝てないことを悟った。訓練をしていると言っても限

界があるのでは

ないかと感じてしまった。

「そこで政府は考えたのさ、実戦を積むことなく兵力、要するに人数も最小限で

かつ強くかつ憲法に触れることなく日本を護る兵隊を作るにはどうするべきか？」

「この言葉で関根は気付いた。

「それでHKWを？」

「そう…」と早奈はそう頷いて下を向く。

「俺達はそのために生み出された。そのためだけに体の中身を変えられた」と名刀は辛そうな顔で呟いた。

「じゃあ、お前らは作られた人間なのか？」

「いや、ちゃんと親はいます。関根さんと出生の仕方何も変わらない。違うのはHKWを摂取されたかされてないかの違いだけ…」と弥譜音が言葉を詰まらせる。

その言葉にも関根はショックを受けた。国は自国の利益のために人体実験をやったというのか？俺はこんな国に仕えているのか？頭の中があまりのことで真白になり「それは本当か？」と関根は思わずそう聞いた。

「お兄さん。どうして、私達を前にしてそんなことを聞くの？」と早奈が悲しそうな顔で呟いた。

「嘘だと思っなら…調べてみてくれ。俺は元・防衛省の役員だ。そこにいる名刀と弥譜音は元々・衛生兵。樹希翔は元・防衛省の諜報員」と海聖。

関根は驚いて彼らの顔を見た。彼らは目をそらした。

「なりたくてなったんじゃない。たまたま、俺の中に入れられたウイルスが知能を高めるウイルスだったただけだ。したくもない勉強を強制的にさせられ一週間に一回あるテストで満点を取らなかつたらパルパックに殺された。60人近くいた仲間が半年で20人になった。」と名刀は頭を抱えた。

「なあ？関根。お前には分からないだろう？俺達がどういう風に生きてきたなんて」と名刀は関根を睨みつける。「俺はお前がはつきり言って憎い。何も知らずにこの年まで平和に生きてきたお前がな。俺らが泣き叫んで、苦しんで、歯をくいしばって生きてきた時、お前は母親の愛に触れていたんだろうからな」

「名刀、やめな。関根さんは何も悪くない」と弥譜音が名刀を静止させる。

ちつと名刀は舌うちをするとたばこをまったくわえて黙った。

「関根さんが俺達のことを信じようと信じまいと勝手ですが、最終的に言えることは俺たちが普通の人より丈夫に出来ているということです。だから、道霧は21階の高さから落ちてでも死なない。まあ、私は死にますがね」と弥譜音は笑った。

「私達は摂取されたウイルスの種類によつて高められた能力が違うんだ。道霧の場合、スパイのために作られた能力だからあれぐらいの高さではまず死なないよ。」と早奈。

「どういうことだ？」

「うーん」と私も良くは分からないんだけど、元々、戦争のために作られたウイルスだからいろんな風に戦争に役立つようにDNAが組み立てられているらしいよ？」と彼女は考えながら言った。「例えば、私に入れられたウイルス…HKW-gtkウイルスH-8型は攻撃力とスタミナと足の速さを普通の人間の持つている限界よりも20倍近く高く作つたらしいよ。でも、そのかわり無理にそれらを上げたから心臓にかかる負担は半端ないし、病原性が強いみたいだね。私は20歳まで生きられないみたいよ」と早奈がにつこりと笑う。

「20歳までつて…」と関根が呟くと名刀が眉をひそめたまま、「あと半年は持たないだろう。早奈の体は18歳まで持たないと宣告したが、もうすでに寿命をこしている」と呟いた。

「早奈と同じウイルスの型を持った子たちは18歳を迎える前に衰弱死しています。つまり、彼女と同じ能力を授かった子供はもうこの世には誰一人存在していません」と弥譜音はお茶をいれながら言

った。

「ってか、まず半分の子は髄液に菌を入れられた時点で死ぬ。運良く生き残っても発症で約80%が死亡。覚醒で約10%が死ぬからな。まあ、これはウイルスの型によっても変わってくるけどな」と名刀は床に腰を降ろして外を見つめながら言った。

「関根。俺達はただ自由に生きたいだけなんだ。この空が見えるこの世界でさ、俺達が殺してきた連中…パルパックは俺達を捕まえてまた研究所に戻すつもりだ。そうしたら俺達は死んだように生かされてモルモットにされる」

「あの頃に戻るのはいやだ。」と早奈がその言葉に続いた。「お兄さん。私達にとって空を見るのは夢の中の夢だったの。最初に作られたウイルスA-1を入れた子がね直射日光で皮膚ガンを起こす遺伝病があつたし、逃げだす危険もあつたから私たちはパルパックの地下で人工太陽の下にいたの。そこにはもちろん空がなかった。だから、私たちにとって空を見るのは夢だったのよ。また、闇に戻るのはいや」と早奈がそう溢した。

関根は黙ってその話を聞いていた。

「ひとつ聞いていいか？なぜ、君達は俺を守ってくれるんだ？」

「それは…」と早奈は一度下を向いて決心したように関根を見た「貴方に探して欲しいと頼んだ伊藤 凧幸博士が貴方をよろしくと言ったからよ。」

「博士は俺達をあの闇から救いだしてくれたんだ」と名刀。

「どうして俺に伊藤 凧幸博士は俺を助けるって言ったんだ？なぜ、お前達は俺に伊藤 凧幸博士を探してくれというんだ？俺と博士の間にはなにがある」と関根は尋ねた。

その言葉に彼らは黙った。やがて、関根の後ろにいる樹希翔がぽつりと言った。

「それは言いたくない。言えば不幸になる奴が増える」

「どういう意味だ」と関根は尋ねた。

それを跳ね返すように「関根は何も気にしないでいいから、私たち

に任せて」と早奈はそう言っ て玄関を見た。「長居しすぎたようだ。彼らが来る。樹希翔。関根を頼む」と早奈。

「分かった」と樹希翔は小さな体で関根の体を軽々と持ち上げた。

「関根さん。飛び降りるから俺に捕まって」と樹希翔はそう言っ と、ベランダに出る。

「怖かったら目つぶっ ていてね」と彼はベランダのふちに立っ た。玄関から緑色のどろどろしたものが溢れてくるのが見えた。

それらは玄関の隙間から中へとすごいスピードで入りこんでくる。やがて、中へとはいると人間の形へと変わった。緑色のスライムの中から人間の眼球と鼻が見えた。まるでヒトの頭蓋骨の上から緑色のスライムをかけたような……いや、どちらかという と人間の皮膚がドロドロに溶けたようにみえる。

赤い髪 of 青年が鞘から刀をだしながら「早く行け！！」と叫んだ。その瞬間、樹希翔は21階のベランダから下へと飛び降りた。

人は飛び降り自殺をする時、途中で意識を失うというのは本当のようだ。関根は樹希翔に抱えられたまま意識を失っ た。

『条約』（後書き）

あけましておめでとうございます。

2009年もよろしく願います。

長く滞っていてすいません…終わりに近づくと終わらせたくなくて手が止まるようです…なんて、本当は天海が投稿をサボっていました。いや、本当に手が止まるって言うのもあるんですよ？

まあ、読めば読むほど駄文にしか思えなくなってきたてお恥ずかしいですが、物語には必ず終わりがあります。ことしも頑張っていくのでどうかよろしく願います。

by・天海 聖哉&成田 慎也

『一軒家』

気がつけば、樹希翔はすごいスピードで木の上を飛び移っている所だった。

「もうすぐ着くからね」と彼はそう言つて笑った。

やがて、彼は一目につかなそうな森の中にひっそりと佇む大きな一軒家へと関根を連れて行った。

「ほいつ。着いたよ」と彼は自分の体より高い関根を地上へ降ろし家のインターホンを押した。関根はふらふらしながら地面へ足をつけた。まるでジェットコースターに乗ったように体がふわふわしていた。

やがて玄関の扉が開いて「はい……」とかなり低い声が響いた。

「あつ！紅空^{あくう}。俺、樹希翔だけど……覚えている？」

彼はドアから顔を出した20代前後の緑色の髪に金色の瞳の青年を紅空^{あくう}と呼んだ。

紅空という青年は何も言わずに頷いて関根を見た。

「あの人は関根さん。聞いているだろう？」という樹希翔の問いに彼は無言で頷いてドアを開けた。「お邪魔します」と樹希翔が家の中に入っていく。

関根もそれに続いた。玄関にはたくさんの靴が並んでいた。

紅空という青年は手に黒い手袋をし、部屋の中だというのに長い口――ブに身を包んでいた。

「紅空^{あくう}。誰か来たの？」と奥から若い男の声がした。

その言葉に彼は一言も返すことなく部屋の奥へと歩いて行った。外から見るよりも中は広かった。まるで昔の日本の家を思わせるような広さだ。

閉まっていた障子が開き、中から深緑色の髪の男が顔をのぞかせた。

「樹希翔！！」と彼は嬉しそうにそう呟くと樹希翔に抱きついた。

樹希翔は焦りながら「ひさしぶり、心綺^{こゐ}」と言った。

「本当に久しぶりだよ！！」と心綺はすぐうれしそうに笑い関根を見た。

「はじめまして。関根です」と関根が挨拶をすると彼は嬉しそうに関根に抱きついた。

「はじめまして！！俺は心綺こあと言います。話は聞いています。会えて光荣！！」関根は困って樹希翔を見た。

樹希翔はそれを見て笑い「気にしないで心綺は元々、ハワイ生まれだからスキップが激しいからさ」と言つと「心綺。武はどこにいる？」と尋ねた。

「武イサムですか？武なら二階で休んでいます。覚醒後、体調が安定しないって愛言いづみつていた。覚醒した時の記憶も前のまま思い出せないよ。うたと…」と心綺は心配そうにそう呟き小さな声で聞いた。「皆がここに来たということは戦争が始まった。と紅空あかうが言っていた。Dは28人殺された。Aは30人。Bは40人。Cは壊滅に近いよ。俊が意識ないってCに駆け付けた楓から連絡貰っている。EとZはリーダーに連絡さえつかない。生きている者はここ集まる」

「集まるのは何人だ？」と樹希翔。

「えーと…、20前後じゃないかな？伝播主は全て生きている。早奈の戦略によつて伝播主は護ることが出来た。今、芽生が生存者を探しているけどテロとパルパックの攻撃によつて不意打ちに合つて生存者が残っている確率は少ないよ。伝播主と残り少ない型を持つた者以外は彼らにとつて邪魔な存在だから殺された確率は高い。楓達の連絡によると本当に手慣れの者しか生きていないって…2000人近くの仲間の遺体を確認したって言っていた」と彼は目に涙を浮かべてそう言った。

「そう…」と樹希翔はそう呟いた。

「たぶん…中学生で残っているのは真良輝と樹希翔と芽生だけだよ」と心綺は静かに呟いた。

「大丈夫だよ。慣れているからさ」と樹希翔は笑った。

「中学生！！」と関根はその言葉に驚いて声を上げた。

樹希翔は首をひねる「どうしたの？ 関根」と彼は不思議そうに尋ねた。

「君は中学生なのか？」と関根は恐る恐る聞いた。

「うん。俺14歳」と彼はそれがどうした？とでも聞くように彼はそう言った。

「嘘だろ」という関根の言葉に彼は笑った。

「なんで嘘つく必要があるの？ 俺はピチピチの14歳だよ？」

関根にはどう考えてもこの前にいる青年が14歳には見えなかった。彼には確かにどこか幼さは残っているが、それにしてもその辺にいる中学生とはどこか大人びている。確かに言われて見れば背丈はそう高くないしかし、100歩譲ってせいぜい高校生だろう。彼が14歳の少年には見えなかった。

「大人びているな」と関根がそう呟くと彼は当たり前だと言う風に関根を見た。

「大人びなかったら、とつくにパルパックに殺されている。自分の身は自分で守らないとならない。ヘマなんてしたらいつも隣には死が転がっているもんでね」と彼は関根を睨みながらそう言い放つと心綺との会話に戻った。

心綺は2人をテーブルへと案内するとお茶を用意してくると言って部屋を出て行ってしまった。

「なあ？ 俺をこんなところへ連れてきていいのか？ 俺は警察官だぞ？」

「貴方は俺達の敵ではないからいいんじゃない？」と彼はそう言つて関根にとって衝撃的なことを口にした。「それにあの池袋駅と警察所の爆破は元々、関根を狙った物だからね関係ないとは言えないでしょ？」と彼は淡々と言い放った。

「俺を狙った？」関根は頭を抱えた。あの爆発は早奈を狙ったものだと思っていた。しかし、まさか狙われたのは自分だったなんて……「たくさんの死傷者がだよ。でも早奈のおかげでこれでも被害規模は最小限ですんだ」と樹希翔は中庭を見ながら言った。

関根はその言葉に何も言えなかった。あの爆発は俺を狙ったものということを信じるのが怖かった。まず、自分にはたくさんの命を犠牲にしてまでも生き残る価値があるとは到底思えない。

「ちなみに早奈は言っただけだと思っただけ、俺達が黒い蝶を殺してきたのは関根を護るためだよ。彼らを関根にどうしても近づけたくなかった。関根は俺達の最後の希望だからね」

「俺にはそんな価値はない。人違いじゃないのか？」と関根は怒鳴った。

「そんなことはないよ。関根にはなくとも俺達には希望。隣に死しか落ちてなかった世界に指した。一筋の希望だよ」と樹希翔。

なぜ、彼らは俺を一筋の希望というのか？俺の命は何人の命を犠牲にしても守らなければならぬものなのか？

「聞いてもいいか？君たちはパルパックでどんなめにあって来たんだ？人体実験というのはわかるが詳しく言えばどんなことだ？」と関根は彼に聞いていた。彼らのいう闇がどんなもんか彼は聞いてみたかった。空が希望という彼らはどんな風に生きてきてこんな風になったのか知りたくなった。それを聞けば彼らが自分に賭けている何かが見えるのではないか？と思った。

「なんでそんなことを聞く？」と樹希翔は明らかにイヤそうな顔をした。

「仕事から詳しいところまで聞かないと落ち着かなくてね」と関根がそう誤魔化しを言うのと樹希翔は何か考えながら言った。

「いいけど…俺は10年前のパルパック崩壊の時には関係してなかったからそのあとのことしか離せないけどそれでもいい？」

「それでも、教えてくれ。俺が君たちに大切だという理由もそこにあるのだろうか？」

「うーん…俺にはなんとも言えないよ。関根さんのことは早奈に任せられているからさ」と樹希翔はお茶受けに出されていた煎餅をかみ砕きながら言った。

そこへ心綺がお茶を持って乗せたお盆を持って入ってきた。

その後ろから金髪の気の強そうな女の子が入ってくる。

「あら？ 関根に樹希翔。」と彼女はそう言っていると嬉しそうに二人の前に腰を降ろした。

「真良輝。これ名刀から」と樹希翔は彼女に白い錠剤の入ったビンを渡した。彼女はそのビンを見て明らかに迷惑そうな顔をしたが黙って受け取りポケットに入れる。

心綺が3人の前にお茶をだした。

「ちょうど良かった。真良輝、パルパックが俺達をどんなふうに扱ってきたか話してあげてよ。」

「はあ？ なんで私が？」と真良輝はイヤそうにそう言うと言った。

「樹希翔が話せばいいじゃない」

「真良輝は伝播主でしょ？」

「そんなの関係ないじゃない」と真良輝は面倒な顔をした。

「俺が話そうか？」と心綺が二人の言い合いの間に入る。

「過去の話なんて誰もしたくないよ」と彼は笑って「紅空あぐつもこつちにおいでよ」と中庭に座りお茶を飲んでいた彼を呼んだ。

いつから彼はそこにいたのだろうか？ 心綺が彼を呼ぶまで彼の存在は気づかなかった。体が大きく緑色の髪にローブを着ている彼の姿はイヤでも目に止まるはずなのに：彼は一体、いつからそこにいたのだろうか？

紅空あぐつは無言で頷くと立ち上がり、心綺の隣に座った。

『崩界』

「俺がバルパックに初めて紅空と一緒に連れて行かれたのは13年前だ。俺は5歳、紅空は8歳だった。俺の両親ハワイ人だけクリスチャンだから日本の教会で働いていた。紅空の家は俺の隣にあつたから俺と彼はよく一緒に遊んでいたんだ。でも、ある日……」と心綺は話しながらその時のことを思い出していた。

それはまだ紅空の髪も瞳も黒い日本人といえる顔をしていた時の話だ。心綺だつて金髪に青い瞳だった。あんなことが起きなければ……。白い教会の前に咲くチューリップを紅空と眺めていると目の前の道路に黒い高級車が止まった。黒い服にサングラスの男達が降りてくるのを彼らは見ていた。空が赤くなりかけた夕暮れ時のことだ。当時、彼らの住んでいた村には子供と言えば彼と紅空しかいなかった。紅空の両親は帰りが遅くて心綺の家によく預けられていただから彼は紅空とよく一緒に遊んでいたのだ。

「君たち、何しているんだい？」とそう尋ねてきた男は優しくそんな顔をしていた。

「チューリップに水を上げているんだよ？」と心綺はそう彼に話した。

「そうだよ、お兄さん。チューリップ知らねえのか？」と心綺が水を上げているのを眺めていた紅空がそう言う。

「君が紅空君と心綺ちゃんかい？」

「そうだけど？おじさん誰？」と紅空が尋ねると彼は笑った。

そして、高級車の近くににいる黒い服に合図を送った。「間違えなさそうだ」と彼がそう言っていたのを覚えている。

何？と思っているうちに二人は黒服の男に捕まり車の中に押し込まれようとしていた。

「離して！！何？いやだ！！」と心綺は騒いで彼らから逃げだそう

とした。

「マザー！！ファザー！！」と心綺は両親に助けを求めた。

その声を聞いて心綺の両親が出てきた。

「何をしている。どこへ連れていく。ここは教会だと知つてのことか！！」と父が彼らに必死に英語で訴えていた。心綺は何回も助けを求めて泣き叫んだが紅空と共に黒い車に乗せられた。車の後部座席で両親が銃に打たれて地面に落ちて行くのを紅空と一緒に泣き叫びながら見つめていた。

二人が連れて行かれたのは灰色の箱の中だった。

紅空と心綺は牢屋のような部屋に押し込められた。暗く冷たいコンクリートの部屋。これからどうなるのか怖くて怖くて堪らなかった。やがて、白い服を着た研究員が嫌がる紅空を連れて行った。「やめるよ！！なにすんだ」と騒ぎ連れて行かれる紅空を心綺は泣きながら呼んだ。「やだ！！イヤーアクウをどこに連れて行くの？」

「うるせー」と研究員は心綺を殴り飛ばした。

心綺は背中を壁に強く打って床に転がった。やがて、紅空が牢屋から出されると牢屋のカギが閉められた。いろいろなところから泣き叫ぶ子供の声が聞こえてくる。泣き叫びながら研究員に連れていかれる子供が牢屋から見えた。

やがて、牢屋の気温が下がり寒くなったところ、牢屋のカギが開いてぐったりした紅空が中に投げ入れられる

「アクウ！！ねえ？大丈夫？」と心綺は彼に近づいてそう声をかけた。

その言葉に紅空は声を出すことはなかった。

魂が抜けたように彼は横になったまま床を眺めていた。白い服の男が入ってきて心綺を捕まえて言った。「次はお前だ」

心綺は牢屋から連れ出され、階段を上り白い部屋に通された。

「博士、連れてきました。」と彼は白衣を着た白いひげを生やした老人に彼を渡す。

「君が心綺君こしきかね？」

心綺は震えながら頷いた。

「そんなに怯えることはないよ。ただ注射をするだけだからね」と彼は心綺の腕に注射をした。その瞬間だった。気持ちが悪くなり彼はその場に嘔吐した。

頭が割れるように痛い……。頭を押さえてそのまま動けずに気を失った。目の前が霞むなか「やっぱりだめか……」という声が聞こえた。彼が目覚めたのはそれから何日後だったのか？気がつくと思の部屋に一人寝かされていた。どこだろうここ……とか思いながら辺りを見渡した。

しかし、そこは何もない白い部屋だった。一本のナイフだけが畳の上に置いてある。

何も分からなかったがそのナイフを手にしていた。

白い部屋の扉が開かれた。赤い髪に瞳を持った子供達6人部屋の中に入ってくる。彼らの目は血走り、持っているナイフからは血が滴っている。彼らの瞳は暗く何も映っていないようだ。一斉に彼らは心綺に襲いかかってきた獣のような声を発しながら。

殺されると思った瞬間、彼は握ったナイフを振りまわしていた。ドロツとした感触が握ったナイフから手首を伝い流れてくる。帰り血が首を包みこむ。

生暖かいその感触と生臭い匂いが彼の頭に快楽を生ませる。もっと欲しくて彼はナイフを振りまわした。気が付いた時には周りが赤くて赤くて怖くなって彼は泣いた。

そこへ研究者がやってきて彼の手と足に枷をつけた。

その日から彼の生活は死と隣合わせとなった毎日、毎日、自分を殺そうとする奴らを殺して殺して……その毎日だった。弱い者は死ぬんだと彼は幼いながらそう悟った。

ある日、いつものように白い部屋で敵を待っていると深緑の髪の青年が入ってきた。心綺よりは体が大きな青年だ。心綺はいつも通りナイフを握って走り出した。さっさと終らしてしまいたかった。しかし、彼は心綺の体を掴むと壁までふっ飛ばした。心綺は壁に背中

を打ちながらもまた彼に向かっていった。しかし、また彼に吹っ飛ばされた。何回やっても同じ……。しかも彼は吹っ飛ばした後何をしようともしないでそこに立っているだけ、今度こそと心綺は彼に向かって行った。

彼の攻撃を交わし今度こそ彼を仕留めると思った瞬間、彼の顔が見えた。それは変わりに変わっていたが紅空であつた。彼は涙を流したまま心綺を見た。

心綺は攻撃を止めた。そして、後ろに下がった。

「イヤ。なんで？なんで？アクウ……お前らアクウに何をした！！」と心綺は叫んだ。

心綺の心は壊れかけていた。彼は根が優しかった。人を殺すという行為を認められずにいる彼に研究者たちは焦っていた。彼は兵隊として殺しを背負うには心が脆い存在ではあつたが彼の持っていたものは全てウィルスと一致して最高の人材だと言えた。だから研究員は友達殺しということを成し遂げれば彼は心が強くなると思つたのだ。紅空もウィルスを摂取した子供のなかで良い検体ではあつたが、心綺はそれ以上の存在だつた。

彼を立派なものにすれば彼のDNAからまた新しいウィルスを作れるとそう考えていたのだ。

怒りを見せた心綺に部屋の隅から睡眠薬の針が飛んだ。心綺はそのまま意識を失つた。

『心綺と紅空』

「この子は良い検体なんですがね」と心綺を医療カプセルに入れながら一人の男が言う。

「いくらウィルスでも性格の全ては変えられないからな」と隣にいる青年がそう言った。

「G-7でナリソコナイにならなかったのは彼ら2人だけなんですよ?」と男は医療カプセルに心綺を寝かせるとそう尋ねた。

「ああ。まさか一番ダメだと思っていたハーフの子に一番一致するとはね」と彼は笑いながら医療カプセルの中で眠る男の子を見た。

「あとで懲罰房へ入れておけ」と彼はそう言うのと部屋から出て行った。

「ごめんなさい」と叫ぶ子供の声が暗闇から聞こえる。

灰色の暗い部屋で男の子が二人泣いている。彼らの前にはタバコをふかした男。

上半身の服を脱がされ後ろ手に両手を縛られ心綺と紅空の二人は男達から与えられる痛みに泣いていた。彼らの背中には複数のみみずばれが飛んでいて見るからに痛そうだった。

「お前らは兵隊だ。言われたことに従え!!なぜ、殺さなかった」と男が怒鳴っている。

「今から隣の奴を殺せば許してやる」と男が心綺の耳にそつと呟く。「いやだ!!許して。それだけはいやだ」と彼はずっと叫んでいた。「おまえはどうだ?」と紅空に男が囁く。悪魔のささやきのようだった。しかし、紅空も黙ったまま首を振った。

男がもう何個目になるのかたばこを紅空の背中に押し付ける。それでも彼は何も言わなかった。悲鳴を一つも上げない。

怒りに満ちた男は手が出せない彼らを蹴りあげ投げ飛ばした。

心綺は悔しいと思うながら手さえ動けば殺してやると思うながら彼

らを睨んでいた。

心綺と紅空はそれ以来会うことはなかった。

心綺は6歳になると牢屋の暮らしから検体の暮らしに変わったからだ。血や髄液を取られ体全てを検査された。

嫌だったのは研究員が彼に投与する薬だった。まるでモルモットのようにいろいろな薬を体に投与され、吐き気が止まらない日も頭の頭痛が止まらない日もあった。毎日、体がダルく一日中動けない日もあった。目の前で同じ薬を飲んだ子が苦しんで死んでいく姿を見ることもあった。そのたびに涙が溢れて止まらなかった。死んだ子は運ばれる際必ずきつねのぬいぐるみが遺体の上に乗せられていた。「いやだ！もう止めて薬なんか飲みたくない」といえば彼らは必ず心綺を殴りつけた。

だから、心綺の顔には生傷が絶えなかった。

気が付けばこの施設に来て3年がたっていた。

3年たったある日、いつものように畳の部屋に寝っていると明け方、一人の女の子と共に紅空が入ってきた。「良かった。君はナリソコナイじゃないんだね？」と彼女はそう呟く。

「ナリソコナイ？」と彼はそう聞いた。彼はナリソコナイというものを知らなかった。

「まあ、いいわ。早くここから出ましょう」と彼女はそうナイフを握りながら言った。

「ここから出る？ここから出ることが出来るの？」その言葉に紅空が頷いた。

「この人達が出してくれる。心綺」と紅空が差し出した手を心綺は取っていた。

そして、心綺と紅空はパルパックから抜け出した。

心綺の話を黙って聞いていた紅空がぼそりと呟いた。

「早奈が外に出してくれた」それだけ言うと彼は心綺のお茶を勝手に飲んだ。

「それ俺のお茶だよ。紅空のはそっち」と心綺が困った顔でそう言う。

「飲んだ」と彼は自分の前のコップを彼に見せる。彼のお茶は全て無くなっていた。

「おかわりっていいんじゃない？」と真良輝が言うと彼は興味なさそうに中庭を眺めた。「性格わるっ」と真良輝がそう呟く。その言葉に心綺は苦笑いしお茶を淹れなおすと彼の前にお茶を置いた。

「気にしないで、仕方ない。紅空はウィルスの影響で脳に障害が出た。」と心綺は無理に笑顔を作った。

『内通者』

話の区切りがついたところにインターホンが鳴り響いた。その音に紅空がスツと立ち上がりドアに向かう。「はい」と彼が低い声で玄関にでる音が聞こえた。やがて、なんやら揉めている声が玄関からする「誰だろう?」と心綺は玄関に行こうとが立ち上がった。

しかし、彼が行く前に訪問者は紅空を押し退け玄関と茶の間を分けている障子を勢いよく開けた。

「心綺!」

突然のことでコアは驚いた表情のまま彼に「はい」と返事を返した。勢いよく障子を開けたその男は赤く短い髪を振りみだしたまま尋ねた。

「まだ、地下はあるか?」

「あるよ?」

「使えるか?」

その言葉にコアは微笑んで「名刀はそう言うと思った。用意だけはしておいたよ?」と言うと紅空を呼んだ。

紅空は無言でうなづくと部屋の奥へと消えていった。

「今、紅空が電源付けに行った。待ってて」

「輸血用の血液なんておいてないよな?」

「そんなもんじゃないよ」

「だよな、まあ、ありがとう」と彼はコアにそうお礼を言うのと険しい顔をした。その後ろから考え込んでいる名刀を跨ぎ早奈が顔を見せた。

「ねえ? コア。シャワー浴びたいんだけど…」と彼女は下で考えている男に邪魔というオーラを醸しだしながら言った。

「勝手に使っていいよ」とコアが返事をする早奈は嬉しそうに笑った。

「じゃあ、借りるね」

「早奈。その足で入れるのか？」と彼が尋ねる。

「大丈夫」と早奈はきっぱりそう言つて松葉杖について行つた。やがて、紅空が戻つてきた。それを見たコアは名刀に視線を映す「電気ついたみたい。」

「サンキュー」と彼はそう言う走つていった。

すれ違いに芽生が部屋へ入つてくる「お邪魔します」と先頭にいる男は挨拶をするとコアに親しそくに手を振つた。

「久しぶりだね、芽生。」とコアはそれに対して手を振り返し、笑うと真剣な顔で「どうだった？」と尋ねた。

「うーん…どうだろう？ 今、E班の6人を名刀達に頼んだけど…3人重傷。」

「E班だけ？」

「あとはほぼ壊滅だぜ…E班はリーダーの葉が逃げる時間を稼いでくれたみたいだけど…」と芽生。

「葉は…」とコアはそう呟き言葉を詰まらした。

芽生が首を降る。「間に合わなかった…ナリソコナイに一発」と芽生はそれ以上声に出すことが出来ず下を向いた。

「そう…」とコアは呟くと気持ちを入れ換えて楓に「お茶いる？」と聞いた。

「はい」と芽生は返事を返した。「寛隆と紅黎と笙流もいる？」と芽生の後ろにいる3人もそう尋ねた。3人はうなづいた。「そう。作つてくる。座つてて」と彼は部屋を出て行つた。

芽生というまだ幼さの残る少年は関根の存在に気づくと柔らかく笑つて樹希翔の傍に座り込み耳打ちをした。

「兄貴からの伝言。内通者が分かったよ。裏切り者は…」
その言葉を聞いた樹希翔は内心驚いた顔で聞き返した。

「本当か？ そんな…そんなわけ…」

そういう樹希翔に彼は止めを刺すように耳打ちした。

「目撃されているパルパックの人形を置いた少女もそいつの仕業だ。」

奴が彼らと接触している所を目撃したと兄貴は言っていたよ」

「それを早奈には？」

「まだ、言っていない。彼女は言わなくても感づいているよ。何せ、俺らのデータベースにハッキングされた後があったから辿ってみた。早奈のPCからだったしね」と彼は笑い、妙に感心したように言った。「本当に早奈はすごいよー」

樹希翔は芽生のその言葉に何も言わずに頷いた。

『判断』

その頃、早奈はお風呂でシャワーを浴びていた。

熱いお湯がシャワーから溢れていく。もうすでに40　はゆうに超えているだろう。

なにも考えなくなかった。次々と早奈の体から赤い血が流れて行く。奴らの返り血に自分の血が混ざっていく。血のあの独特な臭いが鼻につく。早奈はそれを見ながらぶつぶつと何かを呟き耐えきれなくなつて顔を手で覆つて泣いていた。

今日、自分が犠牲にした命の数を彼女は全て知っている。天の使徒がテロをすると言つた時、彼女は関根と武を守るために彼らを犠牲にさせた。誤算だつたのは武が俊達と一緒に戦いに参加してしまつたことだつた。それ以外は上手くいった。

このことを知っているのは名刀、海聖、弥譜音はもちろん、樹希翔、真良輝、芽生、真斗、紅空、俊、嫌々ながら愛、幸哉、それに真護だつた。おかげで死者は少なくてすんだし、戦闘準備と強い者を選抜することが出来た。でも、失くしたものは大きかった。早奈はその大きさ背負いきれなかった。自分があんな命令を出さなければ……私が天の使徒にいけば彼らは生きられたという思いが早奈の中を渦巻いていた。

「早奈。大丈夫？」と女の子の声が外から聞こえた。

早奈は何も言えずにドアを見つめていた。ドアの外の真良輝はジャージャー流されるシャワーの音を聞きながら言つた。

「早奈が全て抱え込むことはない。早奈の判断は正しかった。あの状況ではあれしか方法は無かつた。私たち、伝播主は生き残る必要がある。たとえこの命が短いって分かつていても負の遺産を未来に残す訳にはいかない。私たちが立ちきらなきや。それに止めなかつた私たちにも罪はある。早奈が一人で抱え込むことはない！！」とそれだけ言つて真良輝の気配は消えた。

早奈はその言葉でなんか気持ちになりシャワーを止め、外に出た。

そして、真良輝がその言葉を泣きながら言っていたことに早奈は気づいた。お風呂に入る前に早奈が手すりにかけておいてバスタオルがバスマットの上に落ちていた。拾いあげるとそれは誰も使っていないはずなのに微かに濡れていた。彼女は人前では絶対に泣かないし、泣いた証拠も残さない。服の袖で涙を拭けば泣いたことがバレてしまうから真良輝はバレないように近くにあったバスタオルを握りしめ泣きながらそう早奈に言ったのだろう。

そう思うとまた涙が溢れてきたが、早奈は唇を噛みしめてそれを我慢した。ここで泣いている訳には行かない。私はもつと強くならなきゃならないと早奈はそう思った。

早奈はお風呂から上がると服を着て茶の間に行った。心綾は髪をふきながら出てきた早奈を見ると冷たいお茶を渡し「もう出てくると思ってた。」と言うとニコツと笑った。

「ありがとう」と早奈は礼を言い「突然、押し掛けてごめん。大変でしょ。」

彼はいつも絶やすことない優しい笑顔を早奈に返し言う。

「そんなことない。こんな広い部屋、僕ら3人じゃもつたない。それに…」と彼は早奈に耳打ちした。

「紅空も喜んでいる。」

早奈は無表情で空を眺めている紅空を見た。彼が喜んでるようには見えないが…一緒に住んで心綺がそう言うのだからそうなんだろう？

「それにもうすぐ、大学から衣舞ちゃん帰ってくる。そしたら喜ぶ」衣舞とはこの家のもう一人の住人。彼女の行きたい大学がこの埼玉にあったということ。この家に心綺達と共に住んでいた。衣舞は早奈と同じ年であり、偶然にも誕生日が一緒なこともあって非常に仲良しである。その言葉に早奈が一瞬嬉しそうにしたのを心綺は見逃さなかった。

「嬉しそうだねえ。早奈」と心綺がそう言つと彼女はそんなことない！とピシヤリと言つて黙つてしまつたが彼女は本当に嬉しそつた。心綺はその表情に嬉しく思いながら彼女にお茶を渡した。

彼女は左手でお茶を受け取るとありがとうと言つた。心綺は首を捻つた。

彼女は確か右利きだつたはずだ。

「早奈。右手、どうかしたの？」と早奈が強がりということを十分理解している心綺は手っ取り早く彼女の右腕を掴む「いっ…」彼女は驚いた顔と悲鳴に似た声を上げて右腕を左手でぐつと掴み背中を丸めた。

どうやら痛みに耐えているようだ。「弥譜音！」と心綺は二階から降りてきたばかりの彼に声をかけた。

弥譜音はため息をついて立ち上がると「早奈。やつぱり怪我していたのですね」と言つた。

「うるさい！大丈夫だつて」と彼女はそう怒鳴つた。

「ほつておくと動かせなくなりますよ？」

その言葉に早奈は静かになつた。「心綺。隣の部屋開いている？」

「うん。」と心綺は返事を返した。「おいで」と弥譜音は早奈の左腕を掴み、隣の部屋に連れこんだ。

「早奈。どうしたの？」とその一部始終を見ていた樹希翔がそう聞いた。

「利き腕を怪我した」と心綺「そう…」と彼は心綺に近づいて関根には聞こえないように言つた。

「怪我人が多くて今は戦闘体制に入れないけど、どうするつもりだろ？」

「それは…皆が来てみなきや分からない。報告を聞くしかない」

「8時には全員集まるのか？」

「衣舞から連絡が入つた。情報収集を頼んだ」が全滅。だから真斗からの情報に変更。9時には帰るつて。」

「それは道霧から聞いた。送り届けて道霧も参加するから8時には

「帰るって。」

『月』

月の光が深い森を照らしている。

彼女は月の光を便りに深い森の中を走っていた。

彼女は黒い影から逃げていた。四方八方から短刀が彼女を襲う。彼女は鋭い瞬発力を利用して全ての短刀を避け立ち止った。

「なんなんだ！！お前ら！」と痺れを切らせながら彼女は大声をあげた。

「クツクツ…。久しぶりだね？衣舞。」という声と共に彼女の前に銀髪の青年が現れる。彼は悪戯をした子供のように笑った。

「ゆう…」と彼女はまるで幽霊でも見たように彼の名前を呼んだ。彼は衣舞を抱き締める。

「ごめんね？君の力を試してしまった」と彼は衣舞の耳元で静かにそう言い笑った。

「貴方、死んだはずじゃ…」と衣舞は涙を流し、彼の手をぎゅっと掴んで彼の顔を見上げた。

「いや、早奈のおかげで生きているよ。早奈が裏切り者を教えてくれたおかげでね」と彼は衣舞から離れると右手を上げた。

森の中から一人の青年が現れる。

「こいつは龍。戦闘はまるつきりダメだが、彼の治癒力を使えば彼らとの戦闘は可能だろう。早奈に伝えてくれ、俺達は心綺の家の周りの森で待機している。裏切り者が携帯電話に爆弾が仕掛けたみたいでな携帯電話は粉々に吹っ飛んでしまった。それと彼が心綺の家に向かってっている。」

「わかった」と衣舞は携帯電話でメールをうち込んだ。

「龍。衣舞を頼む」と彼は心配そうにそう言った。

「お任せを…」と龍は彼に頭を下げる。

「祐は一緒に来ないの？」

「奴を騙すには俺らは死んだということにしておいたほうがいいだ

ろう？早奈もそう考えるはずだ」と彼はそう言ってもう一度衣舞を抱きしめた。本当は離れたくない。でも、そんな我が儘言っではいけないことを祐は知っていた、もちろん衣舞も…。

「俺らはさっきも言ったとおり心綺の家の周りで待機している。衣舞、くれぐれも気をつけて」

「貴方も気をつけて」と衣舞は彼に携帯についている白い貝のお守りを渡して彼を振りかえりもせず走り出した。

祐はそんな愛しい衣舞の後ろ姿を見ながら月を見上げた。

この戦いはいつ終わるの兄さん…。兄さん達はどこで何をしているの？

俺らはいったいいつまで…？

月は何も語らず祐をただただ見下ろした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3206f/>

ソナーパレカル Soner PARECARU

2010年10月9日20時50分発行